
恋空 ～春、夜空の下で～

雪音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋空　　～春、夜空の下で～

【Nコード】

N0664U

【作者名】

雪音

【あらすじ】

大切な人が居たんです。攘夷戦争で背中を預けて戦っていた人が。けれど、その攘夷戦争で離ればなれになってしまっ。私の手元に残っているのはこのかんざしだけ。貴方は生きているのでしょうか？もう、会えないのでしょうか？会いたい。貴方に。会いたい。この命、尽きる前に。◆◆◆オリジナルヒロインは高杉の妹です！！展開によっては死ネタになるかもしれません。；苦手な方はご注意ください！！（死ネタが入る章の前書きに注意書きをします！！）◆◆◆

【第二訓】 チンピラ警察も人の子（前書き）

簡単にヒロイン説明です！！名前は高杉^{たかすぎ} 紫苑^{しおん}で、高杉 晋助の妹です！！攘夷戦争経験者で当時と現在の鬼兵隊副官という位置に居ました。剣の腕は中々ですが、兄には劣ります。成り行きで現在は真選組の隊士です。その成り行きは小説内で…☆（笑）

【第二訓】チンピラ警察も人の子

「紫苑^{しおん}、今日も綺麗でさア」

「ありがとう、総ちゃん」

ここは武装警察・真選組の屯所である。そして、紫苑と呼ばれた女は…一応、真選組の隊士だ。そして、その紫苑に「綺麗だ」と言ったのは真選組一番隊隊長の沖田 総悟である。ニコリと笑った紫苑に、同じように総悟も笑った。しかも、いつもの腹黒いＳツ気漂う笑みではなく純粹な無垢な笑み。かといって、この2人が恋仲同士というわけでもなく…。沖田も紫苑も、ただ純粹に兄弟^{きょうだい}のように接しているのだ。

「今日はお仕事？」

「そうなんでイ。はー、かったりいったらありやしねえぜ…」

「フツ、そんなこと言ってるトシにまた怒られるよ？」

「怒られたら返り討ちにしてやらア」

クスクスと笑う紫苑に、つられるように沖田も笑う。しかしそんな穏やかな時間も…

「総悟オオオオ！！！！テメエ、やつぱりここに居やがったかアアア！！！！」

スパーンと開けられた障子と、大きな声で終了となる。紫苑は大して驚いた様子も無く、例の如く笑っている。一方の沖田は小さく舌打ちしていた。この怒鳴り込んできた男こそ、さっき紫苑が“トシ”と呼んでいた真選組副長の土方 十四郎である。泣く子も黙る鬼の副長と名高いが…

「土方さん、そんなに怒鳴ってたら血管が切れますぜイ？そのままくたばれコノヤロー」

「アア！？誰のせいだ、誰の！！テメエがくたばれ、コノヤロー」

まあ、いつもこんな感じである。紫苑も最初こそ驚きはしたが、毎日この光景が続けばなれるというものだ。

「おはよう、トシ。今日も朝から大変ね」

微笑みながら言えば、「そう思うなら総悟を甘やかすな」としかめっ面で言われる。しかし、決して怒っているわけではない。

「総悟、近藤さんが呼んでたからさっさと行って来い」

「分かりやした。じゃあ土方コノヤローは後で殺すという事で…」

「テンメエ…！！」

「じゃあ紫苑、また後で」

「うん、またね」

手を振って見送る紫苑の前に、今度は土方がやれやれと零しながら腰を下ろす。

「あれ？今度はトシがサボる時間？」

「んなわけあるか！！ったく…」

とは言うものの、ばっちりと勤務時間中だ。サボりではない息抜きだと言ってはいるが、言葉が違うだけで立派にサボりだと思ふ紫苑である。

「最近はどうだ、体の調子は？」

「ん：良かったり悪かったり。けど今日は調子いいから、ちょっと外に出てみようと思うの」

「そうか。無理はすんなよ」

「ん、ありがとう」

フツと微笑みながら紫苑の頭を土方がなでれば、紫苑も嬉しそうに微笑んだ。土方と紫苑の仲も、恋仲というわけではない。やはり、兄と妹：そんな感じなのだ。

いや、真選組にいる誰もが：この紫苑という存在を大事な家族の一員として接している。

元々、紫苑は真選組の人間ではなかった。

それは：数年前まで遡る：。

見回りを追え、屯所に戻ってきた土方と沖田は屯所の前に大怪我をして倒れている女を発見した。慌てて連れ帰り、介抱したのだが：目覚めた彼女から聞いた名前と生い立ちを聞いて認識が変わった。

高杉 紫苑。彼女は、超過激派の攘夷志士である高杉 晋助の妹だった。当然ながら元攘夷志士であり、攘夷戦争にも参加していた。真選組に発見されるまでは高杉の率いる鬼兵隊の一員として動いていた。

しかし：昔の優しい兄から、復讐に駆り立てられどんどん変わっていく兄を見ることが出来ず、力づくで止めようと試みたのだ。紫苑もそれなりに剣の腕前は強かった。しかし、晋助に敵うはずも

無く返り討ちに遭い：命からがら逃げ出してきたのだ。

逃げる時に、何度も何度も幹部の者達に捕まりかけた。そのたびに刀を振るい、何とか追っ手から逃れてきた。

しかし、このままでは殺される。ただ、普通の暮らしをしているだけでは殺される。

それを恐れた紫苑は、一か八かの賭けで：天敵である真選組の屯所まで逃げたのだ。全てのことを包み隠すことなく話した紫苑は、当然ながら罪人として屯所の牢へと閉じ込められた。しかし、紫苑は悲観しなかった。怪我の手当てをしてもらったうえに、粗末とはいえ食べ物を与えてもらえる。そして何より、真選組という絶対的な安全圏内にいることが：紫苑を安心させていた。もちろん、この先に待ち受けている懲罰を考えると恐ろしい。死刑だって有り得る。しかし：変わっていく晋助を止めることも出来ない自分など生きていても無意味だと：牢屋の中で全てを捨てた。

ただ：一つだけ心残りがあった。

それは：攘夷戦争で、彼女が愛していたただ1人の男の事。晋助と同じ紫色の髪を、綺麗だと言ってくれた人。大きな背中での自分のことをいつも護ってくれた人。自分の事を愛してくれた人。大切な幼馴染であり、大切な恋人。

しかし：その恋人とはもう：ずっと、会っていない。

正しくは、生死すら分かっていないのだ。戦いの最中はぐれてしまい、紫苑は1人戦場に取り残された。晋助達と完全にはぐれてしまい、紫苑は攘夷戦争で孤独な戦いを強いられたのだ。そんな彼女が

晋助と再会したのは攘夷戦争が終わってすぐの事だった。だが：再会した兄の姿は、自分の知る兄の姿からかけ離れてしまっていた。

左目の包帯。そして：ギラギラと輝く、復讐に囚われた獣のような瞳。

初めて：紫苑は兄が怖いと思った。

それでも、たった1人の家族。彼女は傍にすることを望み、晋助もそれを拒む事はしなかった。だが：どんなに問うても、自分の愛した人の生死だけは教えてくれなかった。

牢の中で1人：愛する人から貰った最初で最後かもしれない贈り物のかんざしを見つめながら、紫苑は願ひ続けた。

生きていて欲しいと…。

牢に閉じ込められて1ヶ月程が経ったころ、近藤と土方が紫苑の牢にやって来た。いよいよ、自分の運命も終わるのかと：2人を見上げて、微笑んだ。

「何故：笑う？」

「さあ、何故でしょう…。私にも分かりません。しかし：これが報いだと：そう思っております」

「報い？」

「：兄を：晋助を変えられなかった：止めることのできなかった、出来の悪い妹の受けるべき報いだと：」

心残りはある。しかし、自分の想っていた人はとても優しく、とても素敵な人だった。例え生きていたとしても、もう離れ離れになっ

て随分と時間が経ってしまったている。自分以外のいい人が出来て、結婚しているかもしれない。幸せを掴んでいるかもしれない。いや…生きていくかどうか分からない。

恋人も救えず、兄も救えなかった自分に…のうのと生きている価値など…無い。

「だから、どんな所業にも私は耐えます。死を宣告するのであれば…それをも、私は受け入れましょう」

それが、紫苑の覚悟だった。髪と同じ深い紫色の瞳は強く2人を見つめていた。だが予想に反して、近藤はニコリと笑い、土方もフツと表情を崩した。

「大したお嬢さんだ。流石は侍といったところかな？」

「だがな、ワリイが…アンタの望む所業とやらを告げにきたわけじゃねえよ、俺達は」

釈放。それが…2人の口から告げられた。

1ヶ月、紫苑を真選組の屯所に閉じ込めたのには理由があった。紫苑がスパイである可能性を考えて一定期間閉じ込めておく事を土方が提案したのだ。優れた監察方ならば、自ら己の身体に大きな傷を付け、同情を誘い潜り込む。そうだったら、仲間を取り返そうと敵が屯所に攻め入ってくるはずだ。紫苑の兄が晋助であるならば尚更だ。しかし、この1ヶ月…そのような事は全く無かったのだ。

そう説明する近藤に、紫苑は悲しげに微笑んだ。

「そうでしたか…。やはり、私は兄に見捨てられたのですね…。当

然です、一番大きなわき腹の傷は：兄である晋助に斬られたものですから：」

もうあんな兄の姿を見なくていいのだという安堵と同時に：

「けれど、どこかで：兄が私を助けてくれる事を望んでおりました：」

本当に捨てられてしまったのだという悲しみに涙が溢れた。

「兄さんは：優しい人：だったから：っ：、どこかで：望んでいた：ッ：」

もう、あの頃の兄は死んでしまったのだと。今、鬼兵隊を率いている兄は：確かに兄ではあるが、紫苑の知る兄ではないのだと。

めでたく釈放となったが、紫苑のことを考えるとおそらく頼るところも無いだろうと近藤は話を持ちかける。紫苑の剣の腕は攘夷戦争で生き残ったという時点で保証されている。それに、そのまま釈放してどこかに住むことが出来たとしても、また命を狙われる可能性だってある。それを危惧した近藤・土方の両名は紫苑の真選組入隊を勧めた。最初はどうか悩んだが：その申し出を甘んじて受ける事にした。

最初こそ隊士達との間には溝があった。晋助の妹という肩書きが、深い溝を作っていたのだ。しかし、刀を片手に攘夷志士達に立ち向かっていく彼女の姿と、仲間を助ける為に命を張って護る姿に：その溝もすぐに埋まった。

そして紫苑は：“真選組”という大きな家族を得ることが出来たの

だ。

充実した日々が続いていたが…そんな紫苑を病魔が襲った。突然、巡回中に咳き込み吐血したのだ。そのまま病院へ運ばれ、下された診断は…余命1年、治療は不可という宣告だった。

真選組隊士の誰もが絶望した。何より、本当の家族同然に可愛がっていた近藤がその宣告に涙を流した。医者につかみかかり、何とかしろと怒鳴り散らした。ベッドで静かに眠る紫苑を目の当たりにして、彼女をどこか妹のように思っていた土方はきつく拳を握って壁に叩き付けた。

けれど…紫苑は、決して己の人生に悲観はしなかった。残された人生を全うしたいと…そう、望んだのだ。医者からは入院を勧められたがそれを断り、無理はしないという絶対条件の元、紫苑は屯所へと戻ってきた。

「ねえ、トシ？トシは今日…巡回に行くの？」

「ああ、パトカーで出るぜ。一緒に行くか？」

「うん、そうしたいな…。歩くのもいいけど、途中できつくなったら困るから…」

ニコリと笑う紫苑に、「準備をしてくるからちょっと待ってろ」と言い残して土方は部屋を後にする。その間に、紫苑も髪を整えたり隊服を整えたりした。腰には…自分が屯所に逃げてくる時まで手放さなかった刀。攘夷戦争を共に切り抜けてきた大事な刀。しかし…もう、紫苑に以前と同じように刀を振るう力は残っていなかった。しかし、真選組を名乗る以上、丸腰では話にならないと形だけ…帯

刀しているのだ。

「おら、準備出来たぞ。総悟も一緒だ」

「うん、今行く…!!」

そつと障子を開けると、フワリと優しい風が部屋に入ってくる。

「もう春だね…」

攘夷戦争が終わったのも、兄と再会したのも春だった。

そして…

「紫苑、行くぜイ」

「総ちゃん、待って…歩くの早い…!!」

「おっと、すまねえ」

今年の春…

それが、彼女の受けた余命のタイムリミットだった。

【第二訓】 チンピラ警察も人の子（後書き）

死ネタフラグがビンビンですよね（苦笑）ただ、まだこの小説は作成段階なので…話の展開によってヒロインの生死が変わってきます！！さて、どうするかなあ…^^；

【第二訓】 幸せと不幸は同時にやってくる（前書き）

この章でようやく、本家主人公の登場です（笑）ちょっと展開が早いような気もありますが…どうぞ☆

【第二訓】 幸せと不幸は同時にやってくる

「銀ちゃん!! 酢昆布欲しいアル!!」

「ちよっと待てって!! イチゴ牛乳の方が先だ!!」

「下らない争いはやめてくださいよ、恥ずかしい…」

スーパーであれを買う、これを買うと騒いでいる3人…（いや、騒いでいるのは2人なのだが）。彼らは“万事屋銀ちゃん”という何でも屋を営んでいる3人であり、銀髪の男が一応店長である。着流しを着て、腰には木刀。目は…死んだ魚のようだとよく比喻されるこの男の名は坂田 銀時。チャイナ服を着た女の子は天人・夜兎族の神楽。そして眼鏡を掛けた青年は志村 新八。今、この3人は仕事の依頼…ではなく、久々に入った依頼料で思うままに食材やら切っていた日用品やらを買い込んでいた。

「にしても、今回は凄い大金でしたね…!!」

「ったくよ、たかが猫探しでこの大金だぜ? まあ、こっちは大助かりだけだな!!」

「ペットブーム万歳ネ!! 金持ちほどペットに金をつぎ込むアル!!」

「いや、大体合ってるけどさ…なんか神楽ちゃんが言うと…容赦ないね…」

「何だと、このダメガネ」

「眼鏡関係ねえだろオオオ!!」

こんな調子でワイワイと騒ぎながら万事屋に向かって足を進めていると、見慣れたパトカーが遠くに見えた。

「あれって、真選組のパトカーですね。何かあったのかな?」

「どおーせ巡回と称したサボりだろ？総一郎君あたりが乗ってんじやね？」

「いや、総悟さんですよ。いい加減覚えたらどうです？てかワザとでしょう絶対…」

「マヨも乗ってるネ！！……あれ？後ろの方に知らない奴乗ってるヨ…？」

万事屋と真選組は言葉では表現できない腐れ縁という奴で…かといって、仲がいい訳ではない。決して無い。まあ、神楽と沖田、土方と銀時が互いにライバル視？しているだけで、他の者達とはそれなりの関係だ。かといって、真選組のメンバーを全員知っているわけでもない。

「どっかの物好きが新しく入隊したんじゃねえの？ほら、就活の春！！って言うじゃん？」

「ああ、確かにその可能性はありますよね」

「ケツ、また税金ドロボーが増えたアルか！！」

ジト目でベーツと舌を出す神楽。すると、助手席の窓が開き…

「そこのチャイナ。公務執行妨害で死刑でさア」

沖田がバズーカを構えてきた。

「はいイイイイ！！！？ちょ、何言ってるのあの人！？」

「おいおい、ただ素直な表現をしただけでこの扱いですか。表現の自由はこの国に無いんですか、コノヤロー」

「サド野郎、今日こそ決着をつけるネ！！」

「ま、狙いはお前だ神楽。お前1人で頑張ってきて来い！！」

「銀さんんんんッ！？サラッと面倒ごとを押し付けるなアアアア

「!!!!!!」

毎度おなじみのこのやり取り。いつものように土方が馬鹿な真似はするなと止めに入り、内輪もめになる…。

そう、いつもだったらそうなるはずだった…。

パトカーの、後部座席の扉が開き後ろに乗っていた人物が下りてくるその瞬間までは…。

先に気付いたのは沖田だった。

「あれ、万事屋の旦那でさア、土方さん」

「だからどうした。俺達は勤務中だ。それに、野郎に関わるとロクな事がねえ…」

そのまま行くぞ、と土方が車を発進させようとした。だが、後部座席に乗っていた紫苑が不思議そうに首を傾げる。

「万事屋…って、トシ達がよく話してる…?」

「そうでイ。ちなみに、チャイナは俺の得物だ。絶対に譲らないぜイ」

「もう、そんなこと言って…!! 女の子を苛めちゃ駄目よ?」

「言っておくが、万事屋は俺の得物だ。絶対に譲らねえ…」

「トシまで…!!!」

クスクスと笑いながら、それぞれの得物を睨みつけている運転席と助手席に乗っている同僚を見つめる。口では2人ともこんなことを

言っているが、本当は相手の力を認めている事を紫苑は知っている。

「何言ってるんですかイ、土方さん？旦那はいい人でさア。そもそもアンタ一回負けてる事を忘れちゃいけやせんぜイ？」

「バツ、総悟！！」

「へえ、トシが負けたの？珍しい…！！」

「あれ、聞いてなかったのかイ？」

「うん」

「それはいけねえや、土方さん。自分の負けを話さないたア…」

「や、喧しい！！」

そんなやり取りを微笑みながら見守る。ふと…沖田が万事屋一向に目を向けた時、丁度…チャイナこと神楽が自分達に舌を出しているところを目撃した。

「…上等だ、コノヤロー」

窓を開け、ガチャツとバズーカを構える沖田。

「バツ！！おま、何考えてやがる…！！」

「そこのチャイナ。公務執行妨害で死刑でさア」

「ちょ、総ちゃん…！！」

土方と紫苑が慌てて止めるがどうやら本気らしい。だったらせめて逃げてもらおうと、紫苑も窓を開けて叫ぼうとした。

しかし…その瞬間、ドクンと心臓が跳ね上がった。

万事屋の3人…もめているのだろうか？掴み合ったり、騒いだりしているその中心に…

目立つ、銀髪の男。

目が離せなかった。

見間違いかもしれない…都合のいい幻かもしれない…

そう思った。

しかし、見間違はずが無い。夢でもなければ幻でもない。

その姿は…

「銀…時…?」

あの頃と…

攘夷戦争のときとなんら変わらない姿だった。

大切だったその人が…愛した男が…今、目の前にいる。

「おい、紫苑? お前、万事屋と知り合いなのか?」

土方の問いも耳に入らない。気付けば、紫苑はパトカーから下りていた。

「紫苑? どうしたんでイ?」

只ならぬ紫苑の様子に、沖田は構えていたバズーカを降ろし、問うが…やはり返事はない。土方と沖田は顔を見合わせる。

しかし、次の瞬間…

「ま、待て紫苑！！走るな！！」

「走っちゃいけねエ！！身体に障る！！」

紫苑は、思うままに…駆け出していた。

「銀さん、後部座席から降りてきましたよ？女の人…かな…？」

後部座席から下りてきた真選組隊士を見つめて、首を傾げる新八。バズーカが下ろされ、沖田の視線が自分から逸らされたことに気付いた神楽も不思議そうに首を傾げた。

「真選組に女がいたアルか？」

ねえ、銀ちゃん？と神楽が問うが…銀時は固まったように、真選組のパトカーを凝視していた。

「銀ちゃん…？」

「どうしたんですか、銀さん？」

2人の問いに、返事はない。顔を見合わせる神楽と新八である。

「おい、天パ！！無視とはいいい度胸ネ！！」

一発ケリでもかましてやろうと神楽が構えたが、それを新八が必死に止めた。

「待って、神楽ちゃん！！銀さんの様子がおかしい…」

「…？銀ちゃん？」

新八と神楽は改めてパトカーから下りてきた女性隊士を見る。遠目ではあるが、美人だ。いつもの銀時ならば「あんな美人が真選組にいるたあ勿体無い！！俺達が貰い受ける！！」ぐらいの冗談を飛ばしてもおかしくは無いはずなのに。まるで…そこだけ時間が止まったかのように、ただ呆然と女を見つめていた。そして…ポツリと呟く。

「紫…苑…？」

え？と新八と神楽が顔を上げると…

「銀…さん…？」

「どうしたネ…？なんで…？」

銀時の瞳からは、涙が零れ落ちていた。パトカーから下りてきた女が駆け出す。それにつられるように、銀時もまた女に向かって駆け出した。

「ちょ、銀さん！？」

「ワケわからねえよ、銀ちゃん！！どうしたアルか！？」

慌てて2人も追いかける。パトカーから、土方と沖田も降りてきて慌てた様子で“紫苑”と呼ばれた女を追いかけていた。

2人には周りの声など聞こえてはいなかった。

銀時も、紫苑も…

「銀時…、銀時ッ…!!」

「紫苑ッ…!!」

ただ、互いの名前を呼び合っていた。

そして…伸ばされた2つの手は繋が…

「銀時ッ…夢じゃない…銀時…だ…ッ…!!」

「バカヤローッ…!!夢だったら許さねえぞ…ッ…!!」

お互いに、抱きしめあった。それぞれを追っていた者達の足が、ぴたりと止まる。至近距離まで近づいてはいたが…まるで自分達の存在など見えていないかのように、その空間だけ別であるかのように…ただ2人は互いを抱きしめあっていた。

「新ハィ…あの女の人も泣いてるヨ…」

「うん…。一体…誰なんだろう…?」

「土方さん、旦那が…」

「ああ…泣いてやがる…」

一体何が起きているのか分からない双方は、互いに視線を交わしあうが、それぞれ分からないと首を振るだけである。そこに居る誰もが、この2人の関係を知らない。知っているのはこの2人だけだ。

「…もう…会えないと思ってた…!! 攘夷戦争で、はぐれて…独りになって…。銀時が生きてるのかも死んでるのかも分からなくて、何処にいるのかも分からなくて…!! 兄さんには何度聞いても、何も教えてくれなかったし…ツ…!! こんな…こんなに近くにいたなんて…!!」

「ごめん…ごめんな、紫苑…。絶対に護るって…独りにしねえって約束したのに…!! 気付いたらお前だけなくて…!! けどよお、1人のために足は止められねえってヅラの馬鹿が言いやがって…!! 必死になって晋助と説得したのに、辰馬とヅラが却下しやがってよおツ…!! ずっと…ずっと後悔してた…!! なんてあの時、俺だけでも残ってお前を探さなかったんだってずっと後悔してた…!! けど…」

「「やっと…会えた…」」

更に強く抱きしめあう2人。銀時は紫苑の肩に顔を埋め、紫苑は銀時の胸に顔を埋めて…肩を震わせていた。

その時、真選組の2人だけは会話を聞いてすぐに分かった。

（ああ、コイツが紫苑の話していた…）

（攘夷戦争で離れ離れになった恋人ですかイ…。まさか、旦那だったとは驚きでさア…）

大切な人に貰ったかんざしを見つめながら、悲しげに話していたことを。自分には攘夷戦争が終わったら一緒になろうと約束した人が

いたということを。その人の生死が分かっていないということを。

土方も沖田も…いや、真選組の殆どの者が知っている。

「あの、土方さん…」

いつの間にか近くまで来ていた万事屋の子供達。新八は控えめに土方を呼ぶ。

「何だ？」

聞かずとも、聞かれることは分かっていた。

「あの女の人…？」

ああ、やっぱり…。

そんなことを考えながら、フーツと紫煙を吐き出す。そして口を開きかけたその時だった。

「ゴホッ…ゲホッ…ッ！！…ッ、ゴホッ…！！ッア…！！」

「おい…紫苑…？」

「だい、じょうぶ…、むせた…だけ…ッ、ゴホッ…！！」

ハッと土方は我に返る。すぐに視線を紫苑に向ければ、口元を押さえて苦しそうに咳き込んでいるその姿があった。

「おいっ、むせたって…そんなレベルじゃ……」

ヒューヒューという呼吸をしている紫苑。そっと、口元から離され

た手には…べつとりと赤いものが付いていた。

「…んで…かな、せ、かく…会えた…の…に……」

涙を零しながら、しかし微笑みながら…

「な…んで……、ぎ、と…き……」

「おいっ!!紫苑!!」

紫苑は、その場に崩れ落ちた。受け止め、銀時が何度もその名を呼ぶが、ただ苦しそうに呼吸をするだけで反応が無い。

銀時の頭が真っ白になる。

「ハハッ…おい、何の冗談だよ…?なあ、おい…お前、銀さんを騙してるんだろ?そんな、手の込んだ冗談に引っ掛かるほど、銀さん…単純じゃねえぞ?なあ、紫苑?ふざけるなって…。」

銀時が必死になって声を掛けるが、ただ紫苑の苦しそうな息遣いしか聞こえてこない。その表情も苦しそうで、一体何が起きたのか…銀時は分からずパニックに陥っていた。

「おいっ、しっかりしろ!!テメエがしっかりしねえでどうする!!」

そんな銀時を土方が叱咤する。土方を見上げる銀時の瞳は、今まで見たことのない…悲しみに揺れるそれだった。いつもの銀時から想像もつかないほど、とても弱々しい。

「とりあえず、パトカーで紫苑を病院へ運ぶ。おい、総悟…」

「病院には連絡を入れやした」

「そうか。万事屋、テメエも乗れ。…紫苑の傍に、居てやれ」

土方の言葉に、銀時は力なく頷く。いつものような覇気がない。突っ掛かってくるような、どこか憎たらしさが今の彼には無い。それほどまでに、紫苑の影響力は大きいのかとその場に居る誰もが思った。

「ワリイがお前達是一緒には乗せられねえ。定員オーバーだ。病院は大江戸病院だから、気になるなら…」

「分かりました。一度、万事屋に戻ってお登勢さん達に説明してから向かいます」

「ああ…」

いつもならば神楽が文句の1つや2つ言ってきたもおかしくは無い状況だが、流石の神楽もそんなことを言っている場合ではない事を把握しているのか…ただ黙って新八と土方の言葉を聞いていた。

「じゃあ神楽ちゃん、一度万事屋に戻ろう」

「うん…」

パトカーに背を向け去っていく2人。去り際に、チラリと神楽は振り返り向いて後部座席に乗る銀時を見た。

「新八ィ…」

「ん…？」

「あの女の人、銀ちゃんの知り合いネ…？」

「…：分らない…、けど…」

銀時の女性関係は何となく、神楽も新八も“だらしが無い”という

認識を持っていた。しかし思えば、あんなにも周りにいろんな女性がいるにも関わらず誰とも付き合うことをせず、あからさまな好意を抱いている女性がいてもそれすら見て見ぬふりをしていた。月詠やお妙、さっちゃん、すまいるのホステス達、吉原の花魁達…。彼女達以外にも、銀時に好意を寄せているものは多い。それとなく銀時にアタックしても、誰の目から見てもそうだと分かる行動を取っても、決して銀時はそれに答えない。

その理由が分かったような気がする。

「きつと…：…凄く、大切な人なんだと思う…」

あんなにも銀時が取り乱した姿を初めて見た。

それが…：そうであるという答えではないかと、新八はそう思ったのだ。

「とにかく僕達も急ごう」

「そうネ！！急いで帰るアル！！」

新八と神楽はかぶき町を駆け抜け万事屋へと急いだ。一刻も早く銀時に会いたいと思ったからだ。自分達が辛い時、苦しんでいる時に銀時は不器用ながらも手を差し伸べてくれた。

「今度は僕達が…」

「銀ちゃんに手を差し伸べる番ネ…！！」

だったら今度は、自分達が…。

そんな想いを胸に秘めて…。

【第二訓】 幸せと不幸は同時にやってくる（後書き）

はい、ヒロインのお相手は銀ちゃんです^^誰にするか悩んだんですが、ここは王道で主人公オチで行こうじゃないか!!と決めました（笑）

次回は、過去話になります!! ちょいと長いです!! メインは、銀時・高杉兄妹・桂・坂本という攘夷組です^^最後にちよつとだけ真選組が出るかな…?

【第三訓】追憶　く君と別れた日く（前書き）

今回より3話ぐらい攘夷戦争まで遡ります！！メインはもちろん、高杉兄妹・銀時・桂・坂本です^^最後にちょこつと真選組のメンバーも出ますがほぼ空気：^^；

てか、土佐弁が難しすぎるぜよ：orzなのに坂本さんフル活動という：（笑）めっちゃ難しかったです（苦笑）

【第三訓】追憶　く君と別れた日く

——話は…攘夷戦争の頃まで遡る…

「そろそろこの戦も限界が近そうだな」

そう言ったのは晋助だった。仲間はずつと倒れ、それでも天人達の数は減らない。

しかし、攘夷戦争…それが、彼らにとっての唯一の居場所だった。

「どういたもん^{どうしたもんか}でえ…。このままじゃあ流石に、づつないぜ^{苦しい}よ…」

坂本の言う事ももつともで、このままでは僅かに残っている仲間も全員死んでしまう。

「だが、ここで白旗を振るつもりはないぞ。俺は最後まで戦う…」

しかし、誰の瞳も決して諦めてはいなかった。桂の言葉に銀時が頷く。

「当たり前だ！！俺らの江戸を…俺らの大切な人を奪った奴らに、これ以上好き勝手されてたまるかよ！！」

バツと立ち上がった銀時の姿は、上から下まで真っ白。その姿で敵を倒す事から、彼は白夜叉と敵からも、そしてあろうことか味方からも恐れられた。だが、それ以上に彼を慕う者の方が多かった。

彼女も：そんな1人。

「うん、私達は絶対に諦めない！！私達から松陽先生を奪った天人を決して許したりはしない！！」

紫苑は刀を握り締め、銀時と同じように立ち上がる。それに呼応するかのように、晋助・坂本・桂も立ち上がる。

「では、今日の出陣だが：どうする、晋助？」

「俺の鬼兵隊と銀時、辰馬とヅラ：今日はこれでいく」

「りょーかい」

「分かった」

「おまんら、どんな状況でも無理はしちやいかんぜよ！！」

「辰馬もね！！」

鬼兵隊は高杉が率いる軍であり、紫苑はその鬼兵隊の副官だった。だから、鬼兵隊が出動する時は必然的に晋助と共に出陣する事になる。

「今日は銀時と一緒にだね！！」

「そーだな！！まっ、危なくなったらデケェ声で呼べよ？絶対に助けに行くからな」

「うん」

「銀時より先に俺が助けに行ってやらア」

「晋ちゃん？それだと、彼氏としての俺の面目丸つぶれなんですけどオー？」

「知るか」

紫苑と銀時の付き合いは誰もが知っており、晋助も公認の仲だった。他の誰でもない銀時ならば、自分の妹を預けられる。それほどまで

に、晋助は銀時を信頼していたのだ。

そして…

「行くぜエ」

「」「」「おうっ！！」「」「」

運命の時が、訪れる。

「鬼兵隊は俺に続けエエエエ！！！！！！！！」

「オオオオオオツツツツ！！！！！！」

晋助の声に、鬼兵隊の者達が武器を掲げて声を上げる。そして、天人達の集団に飛び込み、次々に天人達を倒していった。

「鬼兵隊に遅れを取るなアアッ！！突撃イイイイ！！！！！！」

「オオオオオオツツツツ！！！！！！」

そして少し離れたところでは晋助同様に、銀時が己の率いる軍勢の士気を高め敵へと進撃していく。

互いに激しい攻防が続いている中、もちろん紫苑も刀を片手に戦う者。後ろには仲間、そして当然ながら…

「ぐふふっ、女だ…女がいる…」

「お譲ちゃん？ここはお譲ちゃんのような子が遊びに来る場所じゃ

あないぜ…？」

目の前には敵がいる。2人の天人が下品な笑みを浮かべながら紫苑に近づいた。天人がそれぞれの武器を構えて紫苑に切りかかろうとするが、それを華麗にかわしてまずは1人の天人の首を刎ねる。ブシュウウウという音と共に血飛沫が舞い、辺りに血の雨が降った。

「この女…！！」

ギロリと天人が紫苑を睨む。だが、その天人の動きがぴたりと止まった。紫苑から放たれる殺気。そして…

「ククッ…女だから何だというのだ？あまり女をなめるなよ、下衆が…」

返り血を浴びて不敵に笑う、女の姿にすっかり萎縮してしまったのだ。近づく紫苑、後ずさる天人。

「ヒイイイ！！！！」

ついに悲鳴を上げて天人は背を向けてしまうが、それを逃すほど紫苑として優しくは無い。

「背中を見せた時点で、貴様の負けだ…」

躊躇うことなく紫苑は天人の心臓に刃を突き立て命を奪う。刃を抜けば、勢いよく血が噴出し、再び紫苑の体を赤く染めた。

「あーあ、また汚してしまった…」

折角綺麗に洗ったばかりなのに、と死んだ天人を冷たい目で見下ろしながらそう呟き、刀をヒュンと振って付着していた血を振り払う。

「副官！！増援が来ました！！かなりの数です！！」

「高杉あにの指示は？」

「そのまま迎撃せよとのこと！！」

「ならば遅れを取るな！！そのまま進めエエエツツ！！」

戦場においての紫苑は、晋助とよく似ていた。敵に情けはかけず、口調もいつもの柔和なそれから冷徹なものへと変わる。笑い方もどこか、晋助に似ていた。しかし、鬼兵隊からの信頼はとても厚く、晋助同様、紫苑の命令もまた鬼兵隊員の間では暗黙のルールで絶対のものとなっていた。

「副官、白夜叉様が呼んでおられます！！」

「分かった、そっちへ行く！！ここは任せたぞ！！」

「了解です！！」

襲い来る敵を倒しながら、白夜叉：銀時の元へと急ぐ紫苑。駆けつけければ、そこには白い羽織を真っ赤に染めながら戦っている銀時の姿があった。

「銀時！！」

「おう、紫苑！！ちよっくら手エ貸せや！！流石にこの数はキツイわ！！」

「これだけ殺やつといてよくそんなことが言えるな！！」

「それでも、こちららギリギリよ！！ほおら、来た来た！！」

「銀時、背中は任せた！！」

「紫苑、俺の背中もな！！」

フツと互いに笑みを零してダツと駆け抜ける。

斬って、斬って、斬って、斬って。

殺して、殺して、殺して、殺して。

「邪魔だあああ!!」

「死ねええええ!!」

ひたすら刀を振るう2人の周りには、沢山の天人の屍と、その屍から流れ出た赤で染まっていた。

しかし、銀時も紫苑も…刀を手にながら思う事はいつだって同じなのだ。

一体、いつまでこんな戦いが続くのかと…。

「まあ、ざっとこんな感じか？」

「ここら辺は落ち着いたな…」

それから暫くの攻防が続いたが、紫苑と銀時という圧倒的な力に天人達はなす続べなく次々と倒されついに2人の周りには立っている天人は居なくなった。だが、遠くからは砲撃音などが聞こえる。

「副官、白夜叉様!!!更に増援です!!!」

鬼兵隊の1人が2人の元にやって来て現状報告をする。それに、2人は同じタイミ^にングで苦^にそうな顔をした。

「チツ…キリがねえなあ…」

銀時の呟きに全くだと紫苑が溜息を吐くが、悠長な事を言っている場合でもない。

「高杉^{あに}はどうした?」

「先陣を切って戦っております!!!巽^{そん}(現在の南東)を攻めていた桂軍・坂本軍もこちらに加勢に来ているとのこと!!!」

「……銀時…!!!」

「ああ…流石に晋助と鬼兵隊だけじゃ、やばそうだ!!!俺達も行くぞ!!!」

ダツと駆け出し、すぐに鬼兵隊本隊の加勢へと向かう。

駆けつけたときは、すでに桂・坂本両軍の増援も到着しており、酷い混戦状態となっていた。

「晋助エ、ツラア、辰馬ア!!!誰か近くにいるかア!!!居たら現状報告しやがれコノヤローツ!!!」

「おお、銀時やかっ!!!おんしも、こっちに来ちよったがかあ!!!」
「私も居る!!!辰馬、現状報告宜しく!!!」

どうやら近くに居たのは坂本らしく、銀時の言葉にいち早く反応した。坂本の報告によると、周りから攻めてきていた天人の集団はこちらの戦力を分散させるための陽動だったらしく、本隊は鬼兵隊と

晋助の首を狙ってきていたことが分かった。それを知った坂本と桂は軍を率いていち早く鬼兵隊の元へと駆けつけたのだ。

「クソッ、こっちの力をそぎ落とそうってのが作戦かよ!!」

「けれど陽動とはいえ四方八方から、こじやんち来^きちゅう敵を野放しにも出来ん!! どうするがが一番えいが!？」

四方八方からやってくる敵を放置しておけば、いずれは本隊であるこちらに合流する。そうなれば、いくら最強の鬼兵隊と言えど、いくら最強の白夜叉と言えど分が悪くなるのは目に見えていた。

「……私が鬼兵隊の一部を率いて離れる!!」

「紫苑、本気か!？」

「本気だ!! 幸い、今までの様子を見る限りだと陽動で送り込まれる敵の数は少ない!! 十分だ!!」

「けどなあ、紫苑!! 一度、晋助にも報告をして……!!」

「その兄さんが何処にいるか分かんないんでしょ!! 良かれと思つた事は自分で判断して動け!! これが私達鬼兵隊の頭^{かしら}が言っていた言葉だ!!」

銀時が紫苑を見つめる瞳は、敵を射殺す冷たい瞳ではない。大切な人を心から想う優しい眼だ。とても、戦場に居るものが見せる瞳とは思えないソレ。そんな銀時に、紫苑はフワリと笑った。

「大丈夫…銀時、私を信じて? 私は絶対に負けないから……!!」

「…分かった!! こっちが片付いたら絶対に応援に行く!! それまで、何が何でも持ちこたえろよ!!」

「了解!!」

パンッと互いにハイタッチをして、紫苑は銀時の横をすり抜ける。

「死ぬなよ、紫苑」

「銀時も、死んだら許さないからね」

互いにそう誓い合う。

それが…銀時と、紫苑の最後の会話だった。

「辰馬ア！！私は鬼兵隊の一部を率いて本隊から離れる！！陽動でやってくる兵をこちらに近づけないようにする！！」

「了解ぜよ！！けんど無理は禁物じゃき！！」

「分かってる！！」

そして…

「鬼兵隊！！私に続けエエエエ！！！！」

「オオオオオオオツツ！！！！！！」

紫苑と鬼兵隊の一部は、本隊から離れて陽動部隊の殲滅へと向かった。

その日の殲滅を終え…辺りは天人達の屍と、仲間達の屍の山となる。

いつも…戦いの後は同じ光景が広がっていた。

そして、決まって戦場には雨が降る。

まるで…世界が、この惨状を悲しんでいるかのように。

それを銀時はいつも見上げていた。

自ら殺した者、死んでいった仲間…

それらを弔うかのように、その場に残って。

いつもだったら、その隣には自分の大切な恋人…紫苑がいる。

しかし、その日…紫苑は居なかった。

「辰馬、ヅラ！！紫苑は何処だ！？鬼兵隊の一部を率いたまま、まだ戻って来ねエ！！説明しろ！！」

「ワシらも分からんちゃ…。陽動部隊を殲滅する言^ゆうて離れて行っただ後はさっぱりじゃ…」

「…ッ！！探してくる！！」

「待て、晋助！！迂闊に動いては危険だ！！」

「ヅラァ！！じゃあ、紫苑を見殺せてエのか！？」

「そうは言っておらん！！もしかしたら、銀時と一緒に居るかもしれないだろうが！！」

「それでも紫苑は必ず、一度こっちに顔を出す！！」

「とにかく落ち着くぜよ！！」

戻らない妹を心配して1人戦場に戻ろうとする晋助を、何とか止めようとする坂本と桂。そこに、ずぶ濡れになった銀時が戻ってきた。

「銀時…！！紫苑は…！？」

絶るような思いで、晋助は聞く。しかし、銀時の表情は驚愕のそれへと変わった。

「紫苑：居ねえのか：！？」

絶望：という言葉がまさに似合うであろうその言葉と表情に、晋助の表情は歪む。もしかしたら銀時と一緒に、いつものように雨に打たれているのかもしれないと思っていた。しかし、戻ってきたのは銀時1人だけだった。

「：紫苑ッ！！」

刹那、銀時は再び雨の降る戦場へと駆け出す。

「待て、銀時！！！」

「あつ、こら晋助！！ったく……言う事を聞かない奴達ばぶれもん達ぜよ……」

銀時に続くように晋助も雨の降る戦場へと駆け出していく。そんな2人の背中をただ、坂本と桂は見ていることしか出来なかった。

「分かっているさ、お前達がどんなに紫苑を大切に想っているかぐらい。“兄妹”と“恋仲”……。大切に想わん方がおかしいだろうて……」

しかし、ここは戦場だ。その思いが命取りになる事もあるのだ。

そんな桂達の心配をよそに、ひたすら晋助と銀時は戦場を走り続けた。降り続ける雨が鬱陶しくて仕方がなかったが、それにも負けずひたすら走る。

「銀時イ！！紫苑はどの方角へ向かった！？」

「離はな（現在の南）の方角だ！！鬼兵隊も一緒だった！！だが、四方から来る陽動隊を殲滅するつつってたから…離の方角に留まっているとは限らねえ…！！」

「だが可能性はそこだ！！とにかく、離の方角へ急ぐぜエ！！」
「おう！！」

ひたすら2人は走り続ける。彼女が向かったであろう場所へ。

しかし…

とうとう、紫苑の姿を見つけることは出来なかった。

沢山の天人と鬼兵隊なにかまむくろの軀むくろが転がっている。そこに、生き残っている者は居なかった。それでも、銀時と晋助は諦めることなく探し続けた。

生きていても、軀むくろと成り果てていても…必ず連れ帰ると、そう誓って。

しかし、どんなに探しても紫苑を見つけることは出来ず…

「…晋助、銀時…もう、これ以上は…」

中々戻らない2人を案じた桂が止めに来た。

「何言っただ、ヅラ。言っとくが、俺ア諦めねえぜ？」

「俺もだ。行きたきゃ1人で行けや…」

「ッ…！！銀時、晋助！！」

己の方を見ない銀時と晋助の肩を掴み、無理矢理その手を止めさせ桂の方へと体を向けさせる。すると、2人の瞳は「邪魔するな」と…そう物語っていた。しかしそれに臆することなく、桂は静かに言う。

「いいか、よく聞け。晋助…お前は仮にも鬼兵隊の頭かしらだということを忘れるな。頭かしらが不在の兵隊は消滅する。今、我々にとって鬼兵隊は唯一無二の戦力だ」

そして…と、今度は銀時に視線を向け桂は更に続ける。

「銀時、お前は我々の軍全体にとっての希望だ。お前は“白夜叉”なんぞという名で呼ばれて、あまりいい気はしないだろう。しかし、その名がどれだけ仲間を奮い立たせているか、そしてその名がどれだけ天人どもを恐れさせているか…。その名の通り、お前の力は強い。必要不可欠な力だ。だが、お前の力を今失えば…間違いなく、我々の軍は…消滅する。鬼兵隊も白夜叉も、今の俺達には絶対的に必要な存在なのだ!!」

そんな桂の言葉に、2人の鋭い視線が向けられる。

「おい、ヅラァ…だから何だってんだ？アア？」

「まさか、オメエ…紫苑を見捨てろって言うんじゃあるめえな？」

2人の視線が痛い。だが…言わねばならないこともある。

しかし…

「…とりあえず、今日はもう遅い…。それに、さっきの戦いで体力も消耗している。そんな中でこれ以上雨に打たれれば、身体を壊す。

特に銀時、お前はずっと雨に打たれっぱなしだろう…。休むことも大事な勤めだ。紫苑は強い。今は…紫苑の強さを信じる事も大事ではないのか…？」

自身が思っていたこととは全く違う言葉が己の口から飛び出す。本来であれば「もう諦めろ」と言う筈だった。しかし…

（お前のそんな顔を見たら、言えるものも言えんわ…）

今にも泣き出しそうな…そんな銀時の表情を見て、言葉を飲み込んだのだ。

桂の言葉に納得したわけではなかったが、このままでは身体を壊すと言われては反論も出来ず、結局その日は陣地へ戻る事となった。

戻る際…銀時も晋助も、何度も何度も後ろを振り返る。

もしかしたら、そこに紫苑が居るかもしれないと…そう思って。

翌朝、昨夜の雨が嘘のように外は晴れる。

それと同時に…晋助と銀時にとって、残酷な宣告がなされた。

「我々は進軍するぞ。このままここに留まり続けては危険だ」

桂の言葉に、真っ先に反応したのは銀時だった。桂の胸倉を掴み、恐ろしい形相で睨み付ける。それはさながら、戦場にいるときの銀時…否、白夜叉そのものだった。鋭い殺気に、近くに居た兵士達は

恐れをなしたのかどよめく。そんな彼らに坂本が「大丈夫ぜよ」と苦笑しながら呟いて落ち着かせた。

「おいおい、ヅラア。お前、昨日と言ってることが違うじゃねえか？アア！？昨日のアレは、俺と晋助を騙して連れ帰る為の嘘だったのかよ！！」

怒気を隠すことなくありのままをぶつけければ、桂はそれに動じた様子もなく真っ直ぐと銀時の目を睨み返す。その瞳もまた強い。

「昨日、ああでも言わなければお前達はずっとあの場に留まり続けただろう？違うか、銀時、そして晋助よ……」

「アア、違わねエ。そりゃ、自分の妹を想って探してんだ。可能性のある限り探し続ける。それが当たり前だ。この気持ち、オメエには分かるめえよ……」

「大切な人が1人で戦ってるかもしれないねえ、傷付いて動けずにいるかもしれない……。そんな奴を見捨てろってのか！！仲間を……大事な人を見捨てろってのかよ！！もしこれが“あの人”だったら、お前はそれでも同じことが出来たのか！？アアッ！？」

ギリッと胸倉を掴む銀時の手に力が籠る。晋助はその場から動きはしなかったものの、殺気は銀時にも負けず劣らずのものだった。場の空気は明らかに悪い。兵士達の顔色も蒼白だ。幹部同士の喧嘩ともなればこうなるだろうと、どこかで坂本は諦めてはいた。だが思いの他、予想以上に雲行きが怪しくなってきた。しかし……今はまだ口が挟める状況ではないと悟り、何も言わずそれぞれを見守っている。坂本には両者の言い分……どちらが正しいのか、判断しかねているのだ。

大切な仲間を見捨てて行くのかと問われれば、それは出来ないと断

言できる。

しかし、他の仲間を危険に晒してまでこの場に留まり続け、たった1人の仲間を探し続けるのが得策かと聞かれればその答えも否だ。

(げにまつこと、参^めったぜよ…)

しかし…と坂本は考える。今後のことを考えると、晋助と銀時には残酷のようではあるかもしれないが…桂と同様の意見だった。

「では聞くが…晋助、銀時。貴様らは…1人のために、大勢の仲間の命を危険に晒すつもりか？」

「……ッ……!!」

まさに坂本が口を開こうとした時、言おうとしたことを桂が口にす。その言葉を受け、銀時が目を見開き息を呑んだのが分かった。そして、晋助は小さく舌打ちをする。

2人とも、本当は分かっていたのだ。桂が言っていることが正しいという事も、自分達の行いが軍の足を引っ張っているということも。

「けどオメエ…紫苑だって大事な仲間だろうよ。その仲間を見捨てるってえのか？」

静かな晋助の声。明らかに怒りを露にしている。正論を言われたか라고言って、晋助も銀時も引き下がるつもりはないらしい。ギラギラとした瞳で晋助が問えば、桂の表情は歪む。

「貴様…俺が…何も感じていないとでも思っているのか…？」

悔しそうに…しかし、仕方ないのだと自分に言い聞かせるように桂

は2人に怒鳴る。

「俺が何も感じずに、紫苑を見放すと言っているとしても思っているのか！？そんなわけないだろう！！俺達は幼い頃から共に過ごしてきた幼馴染だぞ！？同じ時間を過ごし、共に笑い、共に泣き、共に戦に出ようと…先生の仇を討とうと誓い合った仲間だぞ！！何も思わないはずがないだろうが！！」

「だったら！！」

「だがな！！俺達は今、何の為にここに居る！？遊びに来てるわけではないのだぞ！！」

「……ッ……」

面と向かって怒鳴られ、銀時の手から力が抜ける。今まで胸倉を掴んでいた両手はだらりと下がり、ガクリと項垂れた。

「だったら…どうしろって…言うんだよっ…」

「…俺達は戦う為にここに来了。戦場に赴く前に立てた誓いを忘れたか…？」

その言葉に、銀時と晋助はハッとなる。

——もし、戦場で離れ離れになっても振り返らずに、前を見て進み続けよう…。

——見捨てるんじゃない…信じて待つんだ…！！

「…俺は紫苑を信じている。紫苑は強い。天人ごときにやられるとは思えん。もしかしたら、どこか別の軍勢に救われた可能性もある。

お前達2人が散々探し回っても…紫苑の軀むくろはなかったのだろう？」
「ああ…」

答えない銀時の変わりに、晋助あにが頷く。沢山の天人、そして鬼兵隊なかまの軀むくろはあったが、晋助と同じ…紫色の髪の間は、そこに横たわってはいなかった。

「……おまんらのことに、口を挟むつもりはなかったが…」

それまでずっと、3人のやり取りを見ていただけだった坂本が、少し落ち着いたのを見計らって口を開く。3人の視線が坂本に集中した。それぞれが、戸惑いや怒りなどを含んでいる。それに苦笑しつつ、坂本は続ける。

「ワシャ：ヅラの意見に賛成じゃ」

「辰馬、テメエ…！！」

「もし、おまんらの誰かがおらんようになって…ワシャ同じ判断をするぜよ…」

それはつまり、紫苑だけが特別なのではない。ここに居る誰かが紫苑と同じ状況に陥っても、その仲間を探すのではなく前に進む事を考えるということ。

「それが、ワシの結論じゃあ…」

「…辰馬の言う通りだ。もし俺が紫苑の立場であつたら…俺は、自分を見捨ててでも先に進んで欲しいと…そう思う。自分のせいで軍1つが潰れ、大義が成せなくなったとあれば…一番悲しむのは誰だ？他の誰でもない…紫苑ではないのか？」

考えろ、もしお前達が戦場で軍とはぐれたその時…何を思うか。

そう、桂に問われ：晋助も銀時も黙り込む。

そして考えた。

もし、自分が1人取り残されたら？

皆に危険を冒してまで留まって探して欲しいと思うだろうか？

それで自分達の軍が潰れるようなことがあったらどう思うだろうか？

その時にもし仲間から、「お前を待っていた。だが軍は潰れてしまった」と言われたら：どう思うだろうか？

「…………チツ…、何でこんな時に限ってヅラも辰馬もそんなクソ真面目な…逃げ道もねえ様な話を出して来るんだ…」

「約束、か…。んな約束もしたなア、そーいや…」

銀時は悔しそうに拳を固く握り唇をかみ締める。晋助はどこか諦めたように、悲しげに笑いながら天を仰いだ。

「確認ぜよ。ワシらは今から進軍じゃ…」

「異論はないな？」

坂本・桂の問い。それは、確認であり異議は認めないという言葉であつた。

「アア…分かった…」

「俺達は…紫苑の生存を信じ、進軍する…!!」

苦渋の決断…。今までもそれ相応に選択を迫られる事はあつた。しかし、こんなにも辛く思い選択を迫られる日が来ようとは思わなか

った。

大切な妹を見捨てて行く選択など、
大切な想い人を置き去りにして行く選択など、

こんな選択：あつて欲しくはなかった。

「…ワリ、迷惑掛けたな…」

銀時が力なく謝ると、その肩に桂が手を掛ける。

「いや…俺もすまなかった。本当に…すまない…」

銀時、そして晋助に向けて桂は頭を下げて謝る。

もうそれ以上、誰も何も言えなかった。

分かっていた。

誰が悪いわけでもないのだと。

ただこれが、戦いくさに身を委ねる者の定めなのだ。

進軍までの時間、銀時は1人陣地から少し離れたところで天を仰いでいた。そこに、晋助が歩み寄ってくる。

「…晋助、ワリィ…。俺があの時、紫苑を止めてりゃ…こんなことにはならなかった…」

あの時…、陽動部隊と戦ってくると鬼兵隊を率いていく紫苑を止めていれば。いや、あるいは自分も共に行っていれば。

こんな事にはならなかったのかもしれない。

「銀時のせいじゃねえ…」

そんな銀時の背中に己の背中を預け、晋助も同じように天を仰ぎながら言う。

「アイツは俺の言葉に…“良かれと思った事は自分で判断して動け”という鬼兵隊の道理に従っただけだ。銀時のせいじゃあるめえよ。強いて言うなら、んな事を鬼兵隊に教え込んだ俺のせいだ…」

紫苑は鬼兵隊の副官として、自分のやるべき事を全うしようとしていた。

ただ…それだけなのだ。

「……ッ……!!」

「……………」

2人は何も言わない。だが、背を預けたまま…

「紫苑ッ…」

「…すまねえ…ッ…」

「…晋助ッ…」

「…銀時ィ…」

「……すまねえ……」

声を殺して、泣いていた。

そして…攘夷戦争は終結する。

幕府が降伏するという形で。

「……負けた…？それがどうしたってんだア…？俺達鬼兵隊はまだ戦える…そうだろう、テメェら！！」

「俺も刀を手放すつもりはない。俺は先生の仇をとるまで歩みを止めんぞ」

「銀時ィ…」

「お前は どうする？」

それぞれが、それぞれの選択をする。

しかし、銀時は…

「もう…俺ア疲れた…」

戦う事から退いた。

「国の為に戦ったのに国に裏切られ、仲間もたくさん死んで、そして…」

目を閉じれば鮮明に浮かぶ、プレゼントしたかんざしを嬉しそうに受け取ってくれた紫苑の笑顔。

「恋人すら護れなかった…」

自嘲に歪んだ銀時の口から零れたのは…

「もう、俺ア何も護れる自信がねえわ…」

事実上の、戦線離脱の言葉だった。

あれから…どれ程の年月が流れただろうか？

しかしどんなに時が流れようと、銀時の中から紫苑という存在が消える事は無かった。生きていると…きつとどこかで元気にやっているのだと…そう信じていた。

万事屋をやりながら、何か情報が入らないかと待ち続けた。

僅かな情報でも…可能性があればすぐに調査した。

何度も何度も空振りして、その度にやけ酒に溺れ、崩れそうになる自身を何とか保っていた。

そんな日々が続いて、やっと…やっと再会できたというのに……

「こんなに待ち続けて…探し続けて…」

その大切な人は、今…

「何で…ッ…!!！」

大江戸病院の、集中治療室の中で眠っている。

ガラス窓一枚…それが隔たりとなり、触れたくても触れられない。
目の前に居るのに、話しかけたくても声が届かない。

「万事屋…」

銀時の後ろには紫苑を病院に運んだ土方と沖田、そして連絡を受けて駆け付けた近藤がいる。事情を聞いた近藤、そして状況を把握した土方と沖田は…何も声を掛ける事が出来ず、ただ銀時の背中を見つめる事しか出来ない。

——ダンッ…!!!!

銀時が壁を殴る。その音に驚き、沖田が「旦那？」と声を掛けるが…それすら銀時には届いていなかった。

そして：銀時は呟く。

「何が攘夷戦争の英雄だ：何が白夜叉だ：！！結局、俺ア：」

その場に、ズルズルと崩れ落ち：

「最後の最後まで：何も護れなかったじゃねえか：ツ：！！」

頭を抱え、口元を歪ませながら涙を零した。

今：万事屋は何かとてつもない事を口にしなかったただろうか：？

そんな事を、真選組の3人は思った。

しかし：

それを追求することなど、今の3人にはとても出来なかった。

否：

「ごめん…、ごめん…ツ：紫苑…：ツ：！！」

今の銀時にかかる言葉が、何も見つからなかった…。

【第三訓】追憶　く君と別れた日く（後書き）

次回はヒロインがメインの話です！！はぐれた後の話になりますね
^^多分、今回ほどは長くない…と、思う…（あやふやだなおい；）

【第四訓】追憶　　く貴方と別れた日く（前書き）

今回は本隊とヒロインがはぐれた後のヒロイン視点です！！なので
…ヒロインしか登場しません（||▽||；）

【第四訓】追憶　く貴方と別れた日く

今まで、神様なんて存在は信じたことがない。

いつだって、私が信じていたものは…

己の剣と、兄と、仲間と、大切なあの人だけだった…。

「……私が鬼兵隊の一部を率いて離れる!!」

そう言って、紫苑は鬼兵隊の一部を率いて本隊から離れた。襲い来る天人を切り倒しながら、それでも紫苑を筆頭とした鬼兵隊は止まることなくひたすら走り続ける。

「副官!! 向かう方角は？」

「離はな（現在の南）の方角だ!! 聞いた話によると、あの辺りに奴らの本拠地があるとの噂!! そこを潰すぞ!!」

「オオオオオオツツツ!!!!」

紫苑が刀を掲げて言えば、それに呼応するかのように鬼兵隊の隊士達もそれぞれの武器を掲げて声を上げた。

目的地に到着してからの戦いは、予想以上に苦戦を強いられるものだった。

（やはり、本拠地というのは強ち間違いでは無さそうだな…!!）

襲い来る天人をなぎ払いながら、返り血に染まった頬を拭う。気付けば、己の着ていた羽織は敵の血で変色してしまっていた。

（これ、気に入っていたのに…）

冷静にそんなことを考えていると、背後に気配を感じた。

「死ねエエエエ！！！！」

背後を取ったと言わんばかりに襲ってくる天人に、紫苑は振り向きざまに刀を横に振る。

「馬鹿が…気付いていないとでも思ったのか…」

その体は上下真つ二つに割れてドサリと崩れ落ち、大量の血が地面を赤く染める。

（やけに静かだな…）

相当な数を倒したが、もうすべて殲滅したのだろうか？ いや、それにしても静か過ぎる。仲間の声すら聞こえない。不審に思い、紫苑が辺りを見渡すと…

そこには、大量の天人と、自分の率いてきた鬼兵隊なにかまの軀むくろが転がっていた。

「…ッ…！！！！…クソッ…！！」

今、その場で生きているのは…紫苑ただ1人だけだった。率いてきた鬼兵隊の隊士達も恐らくは天人の攻撃にやられてしまったのだろ

う。その表情は、どれも恐怖と苦痛で歪んでいた。

「すまない…護って…やれなんだ…」

鬼兵隊副官として、部下を護ることができなかったという罪悪感。もし、自分が本隊から離れて来なければ…ここで命を落とすこともなかったのかもしれない…そう思えば、何と軽率な行動だったのだろうか、今更ながらに後悔した。

「やはり…兄さんを探し出して指示を仰ぐべきだった、か…」

空を見あげれば、ポツポツと雨が降り始める。

戦いの後は決まってそうだ。

まるで、死んでいった天人や人間達を弔うかのように。

そしてこの惨状を嘆くかのように。

空が泣く。

「……………」

それを、いつも紫苑は見上げていた。

冷たい雨に打たれ、恋人である銀時と手を繋ぎ…ひたすら空を見上げていた。

だが…今、紫苑の隣には誰もいない。

「独り、か…」

ポツリと呟いたその言葉は、雨の音にかき消され…誰の耳にも届かなかった。

暫く雨に打たれ続けていると、雑木林の方からガサガサと音が聞こえた。バツと振り向くと、そこには数人の天人。それぞれ、手に武器を構えている。

「へへッ、鬼兵隊の副官がたった1人で居るって言うから確認に来てみりゃ…ホントだぜ…!!」

「何だア？隊長さんから見捨てられたってかア？」

「ぎやはははは!! 違いねえ!! 女は使い物にならないからなあ!!」

「そもそも、女を副官にする隊長ってのが馬鹿なんだよ!!」

「意外と鬼兵隊の隊長さんも、頭悪いんだなあ!!」

ゲラゲラと笑い飛ばす天人達。しかし次の瞬間、ヒュンという音が鳴る。と同時に、1人の天人の首が飛んだ。大地を濡らす雨と共に血の雨が降り注いだ。

「……私を侮辱するのは大いに結構。だが……」

ギラギラと怒りに揺れ、深い紫の瞳が天人達を睨み付ける。凄まじい殺気は、それだけで天人達の動きを完全に止めた。

天人の返り血を浴びた姿。紫苑の瞳と殺気、そして：

「隊長を…我が兄を侮辱するものは…許さねエ…」

腹の底から這い出てきたような低い声。とても女の声とは思えないソレに、さっきまで強がって笑っていた天人達から笑みが消え、代わりに恐怖が支配する。

「ギャアアアア！！！」

「ば、ば、化け者だああああ！！！」

紫苑の殺気に当てられた天人達はそれぞれ、思いのままの言葉を口にしながら逃げ出していく。雑木林に逃げ込んでいったが、それを紫苑はゆっくりと歩きながら後を追う。

「逃げられると思うなよ…。この鬼兵隊副官の私から…逃げられるなど…」

ギリリと輝く刀は返り血で真っ赤に染まり、そして紫苑自身も返り血に染まり。

「た、頼む見逃してくれ！！！」

「黙れ、下衆が」

——ズシャツ：

何度も何度も刀を振るう。

「わ、悪かった！！だから、どうか命だけは…！！！」

「助けると思うか？ 甘いな、ここは戦場だぞ？」

——ズブツ……

何度も何度も刀を突き刺す。

「く、来るな！！ 来るな！！ 化け物……化け物……！！」

「化け物？ それはオメエ……お互い様だろうよ……」

——ザシユツ……

そして……

何度も何度も、殺し続ける。

「……随分、奥まで入り込んでしまったか……」

紫苑がハッと我に返ったときは、既に日も落ちており辺りは真っ暗になっていた。それに、理性が切れた状態で敵を追いつつ森に入つたため、帰る道も森の出口も分からない。

「完全にはぐれてしまったなあ……」

本隊の陣地に、戻る事が出来ない……。

「……ははっ……本当に、独りになっちゃった……」

つまり、完全に紫苑は本陣から離れてしまったのだ。連絡手段も、

帰る方法も無い。

「…ごめん、みんな…心配してるよね…」

怒りに狂い、敵を深追いしてしまった自分に今更ながら自己嫌悪する。しかし、今となってはもう後の祭りだ。ましてやここは広い戦場。たった1人の人間を探す事も、そして1つの軍を探す事も極めて困難。それに、たった1人のために、本陣がいつまでもその場に留まり続けることも危険極まりない。

恐らく…本陣は自分を置いて進軍する。

それは、考えずとも分かりきっていたことだった。

（ああ、けど何でだろ…。兄さんと銀時が必死に、コタローと辰馬に食って掛かる様子が目に浮かぶよ…）

フフツと笑いながら、紫苑はクタクタの体を大きな木に預けてその場に座り込む。

（けど…大丈夫、私は…生きてる…）

スツと空を見上げれば、木々の間から見える空。うつすらと掛かった雲から見え隠れする三日月。

（だから、私のことは構わず…進軍して…）

ギュツと己の刀を握る。本当は軍に戻り、また皆で一緒に戦いたかった。兄や仲間、そして大切な人とこの国のために刀を振るいたかった。

しかし…この現状が、それを決して許してはくれない。

帰りたくても…紫苑には帰る道しるべがないのだ。

（大丈夫、生きていたら必ず会えるよ。だから…）

辛うじて返り血を浴びていなかった部分で自分の手をゴシゴシと拭き、懷にしまっていたあるものを取り出す。それは、戦争に身を委ねる前に銀時が紫苑に贈ったかんざし。

——この戦争が終わったらよ…、一緒に暮らそう。だからな、その…俺の嫁さんになって下さいッ！！マジでお願いします！！紫苑以外の奴とか、俺には考えられねェ！！マジでお願い！！断られたら、俺泣いちゃう！！

銀時らしい言葉のプロポーズ。紅く優しいその瞳は、いつだって紫苑を見て優しく笑ってくれた。このかんざしを受け取り答えを返したときもまた、その瞳はとても嬉しそうに紫苑を映していた。

「……銀時ッ…！！」

ずっと、ずっと一緒だよ…？

そう言って、紫苑は彼の言葉を受け入れ抱きついた。

まるで昨日の事のように思い出されるその映像は、紫苑にとってはかけがえのない思い出であり、そしてその約束を自ら違えてしまっ

ただという自責に苛まれるものでもあった。

「ごめん…ごめんね、銀時イ…！！！」

誰も居ない、森の中で。

紫苑は1人…

「ごめっ…ごめんなさいっ…！！銀時、銀時ッ…！！！」

謝罪と、大切な人の名前を繰り返しながら…

泣いていた。

それから後、紫苑は孤独な戦いを強いられる。本陣に戻れない以上は1人。襲い来る敵はもちろん、自分で倒さなければならぬ。しかも、紫苑が鬼兵隊の副官だという事は天人達にも知られている。襲い来る天人達は、1人しか居ない紫苑に容赦なく多勢で襲いかかった。

それでも…

「どけエエエエエエ！！！！！！！」

凄まじい気迫で刃を振るうその姿は、まさに“鬼兵隊の副官”という名に相応しい姿であった。

天人達の間で、ひそかに紫苑の噂が広がる。

元鬼兵隊の副官、あれは天人以上の化け物。

怨念を抱いたあの紫の目は天人を食らう鬼だと。

そしていつしか…

“紫怨^{しおん}の鬼”と…天人達の間では呼ばれるようになっていた。

皮肉なことに、自分の名と同じ呼び名で…。

紫苑を見る天人達の目が変わった。中には、紫苑の姿を見ただけで逃げ出す天人も居た。しかしそれでも、紫苑は容赦なく天人を切り捨て続けた。

これが…自分にできる唯一の事だと信じて。

ここで少しでも多くの天人を亡き者にすることで、本陣の仲間達の戦いが楽になるのであれば…。

それこそが、本陣から離れてしまった自分の役目だと言わんばかりに…

「ヒイイイイ！！紫怨の鬼が来たぞオオオ！！」

「ククッ…言ってる、化け物どもが…」

紫苑は己の刃を振るい続け、迷うことなくその手を赤く染めた。

一体いつまでこんな孤独な戦いが続くのだろうかと思わない日々は無かったが…終りは以外にもあつけないものだった。

国の裏切り。

天人の力に幕府が降伏し、国を明け渡したのだ。

それにより、攘夷戦争は何ともあつけない幕引きとなる。

と同時に、天人が国の中枢に入り込みある条例を絶対のものとした。それは、侍達の暴動を恐れての行動。

“ 廃刀令 ”

国は負けを認めただけではなく、侍から刀をも奪った。

しかし、紫苑はそれでも決して己の刀を手放さなかった。

「これは…私の魂。絶対に手放さない…!!」

共に攘夷戦争をくぐり抜けてきた刀。手放せるはずが無かった。

やがて天人の介入により、江戸の町はすっかりと変わってしまう。昔のどこか質素な町から、ゴチャゴチャとした街へと姿を変えた。

そして、廃刀令違反や攘夷志士達を取り締まる“ 武装警察・真選組 ” の存在を風の噂で聞く。

(…刀を持ったまま江戸の町に降りるのは捕まりに行くようなものね…)

もしかしたら、かつての同志がそこにいるかもしれない。大切な人がそこに住んでいるかもしれない。しかし…紫苑は江戸の町に降りることなく、そつとその場を後にした。

(生きているならきつと、いつかまた会える…だから、私は…)

昔と変わらない静かな場所で暫く時を過ごそう。

そして、少し落ち着いた時に江戸に出てみよう。

それから…それから…

紫苑が目指した場所、そこは…故郷の萩だった。田舎ということもあり、江戸の町のような華やかさは無く、幼いころとあまり変わらない。しかし、戦の爪痕いづみがそこかしこに残されている。

そして…

「……ここも、このままだったのね…」

紫苑達が通っていた寺子屋で松楊の家だった場所。松楊が自分達に色々な事を教えてくれた思い出の場所であり、自分達が楽しい時間を過ごした場所…。

だがそこは、紫苑達にとって悲しい思い出の残る場所でもあった。

「…銀時が一番辛かったのよね…」

松楊は殺され、その軀は寺子屋ごと焼き払われてしまった。松陽が殺された瞬間を見たのも、松陽を殺した犯人を見たのも…全ては銀時だけだった。

紫苑達が駆け付けた時、銀時は轟々と燃える炎の前で茫然と立ち尽くし…無表情のまま涙を零していた。

それが…銀時、桂、晋助、そして紫苑達を戦争へと駆り立てるきっかけとなった。

そんな、いろんな思い出のある場所に…紫苑は1人戻ってきた。焼け落ちた寺子屋の前で、紫苑はそっと手を合わせる。軀が見つからなかった為、必然的に松陽の墓代わりとなっているのだ。もっとも、きちんとした墓は別にあるのだが…やはりここに松楊が眠っているのだと思うと、形だけの墓よりもこちらに足が自然と向く。

ゆっくりと目を開け、その場に紫苑は腰を下ろす。あの業火の中で、唯一残った1本の桜の木が花を咲かせている。満開だ…。

「もう、春なんだね…」

どおりで温かい筈だと…紫苑は微笑む。それは、暫くぶりの…穏やかな笑みだった。

「ごめんなさい、先生…。先生は、護るために剣を振るいなさいと私に教えて下さったのに、私は結局…何も護れませんでした…」

空を見上げながら、舞い散る桜の花びらを見つめ…1人呟く。

「貴方が愛していたこの国も、大切な仲間も…」

生きているのか、死んでしまったのか…それすらも分からない、幼馴染達。そして、唯一の家族。

「けれど…“きっと無事だ”と信じることは出来るんです。不思議ですよ…。本当に無事なのかどうかも分からないのに…」

もしかしたら、自分がただ信じただけなのかもしれない。それに縋って生きていただけなのかもしれない。

しかし…それだけではなかった。

きっと彼らならどこかで生きていると信じる事が出来たのだ。

「笑っちゃいますよね？根拠も何も無いのに。けれど…不思議とそう思うんです…」

けれど…刀を奪われた彼らが一体どのようなように生きていくというのだろうか…？江戸では攘夷を掲げて、刀を手放すことなく倒幕を狙っている者達もいる。

その中に、幼馴染や兄もいるのだろうか…。

もしそうだとしたら、やはり自分はその道を選ぶのだろうか…？

それは本当に正しい道なのだろうか…？

「先生、は……どう、思います……か……？」

陽気な春の日差しが眠気を誘う。普段ならばこんな開けた場所で眠ることなど決してないのに。

まるで…

——お疲れ様です。少し眠って疲れを取るといいですよ。私がそばに居ますから……。ね？紫苑……

松陽がその場で、紫苑に休むよう促しているかのように…。

「せ、んせえ…」

そのまま、紫苑は夢の世界へと旅立った。

やっぱり神など居るわけがない。

もし居たなら…何故、こんなにも残酷な仕打ちをする？

何故、国の為に立ちあがった我々に微笑んでくれなかった？

だから…神などという曖昧な存在は嫌いなんだ…。

【第四訓】追憶　　ゝ貴方と別れた日ゝ（後書き）

次もヒロイン視点になりますが、今度はちゃんとヒロイン以外のキヤラも登場します（笑）本当は次話と今回の話は1本だったんですが、あまりにも長かったので2話に分けたんです^^；

※松陽先生の名前、漢字を間違っていました！！すみません、読み直してて気付きました^^；2011/06/20に修正済みです！！

【第五訓】追憶　　ゝ再会、そして決意　　（前書き）

追憶3話目です！！攘夷戦争で仲間達と離れ離れになって、そのまま終戦……！！そしてついに、ヒロインは兄である晋助と再会します！！今回と次回は鬼兵隊祭りです！！（笑）何気に、ヒロインとまた子が仲良しという設定……（笑）

【第五訓】追憶　く再会、そして決意く

穏やかな春の日の下、^{もと}大切な恩師が眠るその場所ですっかり寝入っていた紫苑をたたき起こしたのは：

「起きるッス！！」

聞きなれない女の声。明らかに自分に向けられたものだと思っただけに、反射的に己の刀に手を掛けていた。腰を落とし、いつでも抜刀できるように構える。そんな紫苑を見て、目の前の女も同様に二丁の銃を抜いて攻撃態勢を取る。

（何者だ、この女…！？）

長い金髪を右側に留めており、服装は和服ではなく…かなり露出が高い。

（天人…ではなさそう。けど…こんな武器を持ってるんですもの。
“一般人”でない事は確かだね…）

互いに何も言わない…武器を構えた状態の沈黙が続いたが、やがて女が口を開く。

「アンタ“紫怨^{しおん}の鬼”で間違いないッスね？」

それは…天人達が自分と呼ぶ時に使っていた二つ名だった。銀時が“白夜叉”と呼ばれたように、紫苑もまた高杉 紫苑という本名よりも、二つ名の方が先走りしたのだ。

（なるほど、銀時が白夜叉って呼ばれるのを嫌う理由がよく分かるわ…）

戦いの時はさほど気にならなかったが、しかしこうして面と向かって言われるとあまりいい気分ではない。思いつき紫苑は顔をしかめる。

「確かに…間違いではないが、そう呼ばれる事はあまり好きではない。貴様…何者だ？」

ギロリと睨めば、それに怯むことなく女も紫苑を睨み返す。そこで、ほう…と紫苑は少し感心してしまう。

（私が睨んでも怯まないとは、大した女だ…）

しかし、相変わらず…ピリピリとした空気は変わらない。いい加減、この空気を何とかしたいと、今度は紫苑が口を開いた。

「どこの手先だ？何処かの攘夷志士か？それとも真選組か？生憎私は、攘夷に参加するつもりも、真選組に捕まるつもりもない。力づくでというのであれば…斬る」

決して脅しては無い、本気だと殺気を込めてそういえば僅かに…女が息を呑んだのが分かった。

「…ッ、そ…それでもっ！！私にとって、あの方の言葉は絶対ッス！！というかつ！！何で、私があの方の為に女なんかを連れ帰らなきゃいけないんスか！！こういうのは武市先輩の仕事じゃないんスか！！あーもうっ！！とにかく、この来島 また子と一緒に来てもらうッス！！」

どうやら、女の名前は来島　また子というらしい。そして、彼女自身不本意で紫苑の元に訪れたのだろう。それは、彼女の口ぶりからしてすぐに分かった。というか……この口ぶりからして、“惚れている男の元に何故、別の女を連れて行かなければならないのか”と言っているようなものだ。

「……本当に何者だ？その様子からして……真選組、ではないな……？」

もしこの女が真選組だとしたら、国も終りだな……などと頭の片隅で考えていると、女……来島の表情が曇る。

「あんな幕府の犬と一緒にされたとおっちゃ、胸糞悪いツス！！こっちは国をぶっ壊す鬼兵隊ツスよ！！何であんな奴らと一緒にされなきゃいけないんスカ！！おい、女！！あのお方が生かして捕えよと言ってるから生かしているが、今度同じ事を言ったらただじゃおかないツス！！」

ギャンギャンと来島は吠えるが……そんな彼女の言葉も、最後の方は全く頭に入っていないかった。

今……彼女は何と言っただろうか？

“鬼兵隊”と……そう言わなかっただろうか？

「鬼、兵隊……？」

「そう！！アンタも攘夷戦争で戦った女なら分かるはず！！あのお方は、お前なら絶対に分かったと言ってたツス！！」

先ほどから来島が“あのお方”と言っている人物。恐らくは彼女の

上に立つ者の事だろうということは紫苑にもすぐに分かった。

鬼兵隊の隊長は自分の兄である晋助だった。

いや、もしかしたらその名前を拝借している攘夷志士かもしれない。

しかし……こんな偶然が果たして、あるのだろうか？

「教えて欲しい事が……あるの……っ……」

「へ……？ な、なんスか急に大人しくなって……!!？」

刀から手を離し紫苑はただ来島の瞳を真っすぐと見つめた。その時ふと、来島はある違和感を覚える。

（あれ？ 何だ……？ この女……誰かに似てるような気が……）

一体誰だろうかと考えている間に、目の前の女は口を開いた。

「何故、貴方の言う“あの方”は私を鬼兵隊に勧誘しているの……？」

紫苑の鼓動がバクバクと高鳴る。相手にも聞こえているのではないかと思うほどに。紫苑の問いに、来島は一瞬呆けたがすぐに我に返ってその問いに答える。

「あの方がどうしてもその力を欲しているからッス!! どの馬の骨かも分からないアンタを、副官にするとまで言ってる……!! なんんスか……!!」

鬼兵隊の副官というポジション。それは攘夷戦争で紫苑が身を置いていたポジションだ。

少し…紫苑の呼吸が荒くなる。

「もう、一つだけ…教えて…」

声が震えてしまう。

もし、もし本当に来島の言う鬼兵隊が自分の知っている…自分が身を置いていた鬼兵隊だというのであれば…

「貴方の言う“あの方”とは…：…っ、鬼兵隊の頭かしらの…：…名前は…ッ…！？」

まるで縋るような、懇願するかのようなその問いにさすがの来島も一瞬戸惑った。さっきまでは気丈に振るっていたのに、突然このような事を聞いてくる。しかも酷く…取り乱している。

「…あ、あの方の名前は…鬼兵隊の頭かしらの名前は——…」

その名を聞き、紫苑の瞳からは涙が零れ落ちた。ボロボロと留まることなく瞳からは雫が落ちる。

「なっ…なっ！？ちょ、何いきなり泣いてるんスカ！？訳分からないうッス！！アンタ…！！」

「兄さん…：…ッ…！！」

「は…：？」

「…私の…私の名前は…高杉 紫苑と言います。高杉 晋助は…私の実の兄ですッ…！！」

「え…：…：？」

突然の告白に、さすがの来島も何も言えず…目の前で泣き崩れる紫苑をただ見ている事しか出来なかった。と同時に、ああ…と来島は納得する。

（誰かに似てると思ったけど…そういう事ッスか…）

紫苑を見た時にふと“誰かに似ている”と思った。それは…

「よかつ…よかつた…！！兄さんは…生きて…た…！！」

彼女の兄である、晋助に似ているのだと。

その紫の髪も、自分を鋭く睨んでいた時の瞳も。言われてみれば確かに、どれも晋助にそっくりだ。

「…えっと…、その…」

さすがに、晋助の実の妹とあっては先ほどのように強気に出る事も出来ず。かと言って、泣き崩れている紫苑にどう声を掛けたいのかも分からず。来島は戸惑ったが…とりあえず頭を下げた。

「あのっ…その、さっきは失礼したッス…。まさか、晋助様の妹様とは知らずに無礼な事を…」

バツが悪そうに謝る来島を見上げて、紫苑は涙に濡れた瞳でフフツと笑う。

「な、何スか？」

「いいえ、何だか似合わないなあと思って…」

「何が…ッスか？」

「晋助様、だなんて……」

まさか、兄がそのように呼ばれていようとは思ひもしなかったと……紫苑は穏やかに笑った。

「兄さんは攘夷戦争の時、みんなから“隊長”って呼ばれていたから……」

「そうなんスか？」

「ええ……。あと、幼馴染は名前で呼んでいたけれど……」

そこまで話して、ハッと紫苑は我に返る。

晋助がいまだに鬼兵隊を率いているという事はすなわち、攘夷活動を行っているという事。ということは……桂や坂本、銀時も……同じ場所にいるのだろうか？

いっそ、来島に全て聞いてしまえば楽になるのかもしれないと思っただが……

何故か、聞くのが怖かった。

そんな奴は知らないと言われるのではないかと……

その3人は死んでしまったと……そう言われたらと思うと……

怖くて聞けなかった。

「うわっ！！ヤ、ヤバいッス！！もうこんな時間……！！」

「え……！？あ、なんかごめんなさい……！！兄さんが呼んでいるというのであれば、私は拒むつもりはありません。えっと、来島さん……」

「そんな堅苦しい敬語も堅苦しい呼び方もなくていいッスよ!!
普通に話してください!! そんなもって、普通にまた子でいいッス
!!」

「うん、じゃあ…また子ちゃん」

紫苑は来島の瞳を真つすぐと見つめる。それは先ほどの殺気の混じったそれとは違い、真の通ったとても強い瞳。

「私を兄の元へ連れて行って。私を鬼兵隊の一員に…」

そして、その言葉もまた真つすぐと…己の魂を貫き通すという決意のように思えた。

「もちろんッス!! というか、さっきも言ったけど…紫苑様のポジションは既に副官で決定ッスよ!!」

「あ、いや、その…紫苑様っての無しにしない? 呼ばれ慣れてないのよ…」

「け、けど晋助様の妹様を気安く呼び捨てにするなんて畏れ多くて…!!」

「うーん、じゃあ…まだちょっと早いかもしれないけど、“副官”でいいわ。私は鬼兵隊に所属していた時、みんなからそう呼ばれていたの」

「…副官…!! 了解ッス!!」

こうして、紫苑は来島に案内され兄の元へと舞い戻った。

(兄さんに会える…やっとな…やっとな会えるんだ…!!)

どんなにこの日を待ち望んでいただろうか? どんなに再会の日を待ち続けただろうか?

その瞬間が、今…訪れようとしている。

案内されたそこは、屋形船。来島に聞けば、本拠地は別にあるがとりあえずはここで話を、との事だった。来島は用があると言って先に戻って行ったが、紫苑は分かっていた。

（氣を利かせてくれたのね…）

恐らくは兄妹水入らずでとってくれたのだろう。その気持ちに感謝しつつ、逸る気持ちを抑えながら…そっと屋形船の暖簾をくぐる。

だだっ広い座敷の窓際で煙管キセルを吹かしている…

兄の姿があった。

「にい…さん…」

見間違いなどではない、確かに自分がずっと求め続けた兄がそこにいる。

呼ばれて…兄…晋助は紫苑の方へ視線を向ける。

その瞬間、紫苑は驚愕と戸惑いが生まれた。

「兄さん…ツ…？」

「アア…久しぶりじゃねえか、紫苑…。無事で何よりだぜエ…」

以前の晋助と…身に纏う空気が何か違うような気がする。晋助は確かに、鬼兵隊の隊長として時に隊員達から恐れられることがあった。

しかし、不器用ながらも優しい人だった。

だが…目の前にいる晋助は…本当に同一人物なのかと疑ってしまうほど…変わってしまったていた。

紫苑ですら近づく事を躊躇ってしまいそうな空気。常に晋助に纏わりついている殺気。そして何より…

「兄さん、その…目は…っ…」

左目に巻かれた包帯…。一瞬、近づく事を躊躇ったが、我に返った紫苑は慌てて近づきそつとその頬に触れる。

「…アア、オメエとはぐれた後にやられた…」

「そんなっ…!!！」

ギユと晋助の身にまとっている着流しに縋りつき必死に涙をこらえた。

まさかあんなにも強かった晋助がこんな大きな負傷を負うなど、誰が予想しただろうか？無事であったという安堵。しかしその左目に巻かれた痛々しい包帯が…攘夷戦争という過酷さを改めて知らしめる。

「それより、紫苑。俺ア…オメエが無事だった事が何よりだぜエ…」

ギユッと抱きしめられたその温もり。久しぶりに見た晋助はあまりにも変わりすぎてしまって、一瞬戸惑ってしまったが…この温もりは、間違いなく兄である晋助の温もりだ。

「兄さん…ッ、兄…さんッ…!!ごめっ…ごめん、なさいっ…!!
私が、はぐれて…ッ…!!ごめ…っ…!!」

流れ落ちる涙と零れる謝罪。それは攘夷戦争で離れ離れになってしまった事であろう事は、もちろん晋助にも分かった。そつとその頭を撫でながら、晋助は続ける。

「オメエはオメエの思ったままに動いた。俺の言葉に忠実に従った。ただそれだけだろうよ…。謝ることはあるめえ…」

晋助の言葉に、紫苑は顔を上げる。自分を見下ろす晋助の表情は…

『紫苑、お前マジで銀時と一緒になるつもりかア? まあ…:銀時ならいっか…』

過去の優しいそれとは程遠かったが…

ギラギラと輝くその瞳の奥に、僅かに温かい色が見えた。

それだけでも、紫苑にとっては十分だった。

「ただいま、兄さんっ…!!」

「アア、お帰り…紫苑…」

幸せそうに微笑みながら抱きつく紫苑。

しかし、晋助の表情は…

野望に満ちた、怪しげな笑み。

もちろん、可愛い妹との再会も喜ばしかった。

しかしそれと同時に：

（これでようやく、鬼兵隊の復活だア…）

己の理想とする鬼兵隊が元のあるべき姿へ戻ることへの喜びの妖笑でもあった。

それからすぐに、鬼兵隊の本陣へと案内される。案内された先は：巨大な船だった。

「兄、さん…？これ…」

「アア、天人どもの技術を拝借した賜物たまものってやつだ…」

「……………」

「気に食わねえか？」

「ううん、そんなことないわ…」

とは言ったものの、やはり釈然としないというのが紫苑の本音だった。怨むべき天人の技術を当たり前のように使う時代…。今はそれが普通なのだろう。無理矢理そう納得させ、晋助の後ろに付いて歩いていく。

そして突き当たりの部屋にたどり着いた。いうなれば、晋助の為の個室だろう。「入れ」と促され紫苑が入ると、そこには自分を晋助の元まで案内してくれた来島と、見知らぬ男が2人…。どこかで、

幼馴染がいるかもしれないと期待した。しかし、そこにいたのは：全く知らない人だった。

（やっぱり、世の中そんなに上手くはいかないか…）

小さく嘆息し、気持ちを切り替えてそれぞれに視線を向ける。来島とは既に面識があるため、目が合った時に微笑みかけた。すると少し恥ずかしそうに、来島も微笑み返してくれた。

「えっと…兄さん？この方々は…？また子ちゃんは名前も聞いているから知ってるけど…」

「アア…今の鬼兵隊の幹部達だ」

“今の鬼兵隊”という響きに、妙な違和感を覚える。それについて口を開こうとしたが、それより先に晋助が口を開いた。

「来島は既に知っているたア思うが、俺達の新たな仲間だ。俺の妹…高杉 紫苑。コイツにゃ鬼兵隊の副官をやってもらう。異論はあるめえ？」

そう問われ、来島は「もちろんッス！！」と元氣よく頷く。他2人の男については、イマイチ納得しきれていないようではあったが、元鬼兵隊の副官であり“紫怨の鬼”と呼ばれていた事はもちろん知っている。そして何より、晋助の妹だ。その腕はなかなかのものであろうことは明白だった。

「私は異存ありませんよ」

「他ならぬ晋助の決定であれば、拙者も異存はござらん」

こうして、紫苑は再び鬼兵隊の副官として迎え入れられた。

「申し遅れました。私の名前は武市 変平太と言います。好物はかわいらしい娘さんです」

「先輩、変態丸出しじゃ副官が気持ち悪がりますって…。ロリコンも大概にして欲しいッス」

「ロリコンじゃありません、フェミニストですよ」

「拙者は河上 万斉でござる。……お主、晋助と同じリズムを持っているでござるな…」

「え、リズム…ですか？」

「ふむ…。普段はクラシックのように静かなメロディ。しかし、ひとたび刀を抜けば…：激しいロックを奏でる…。いや、ロックなんて生易しいものではごらんな。例えるなら、そう…」

「ええっと…？」

「河上先輩！！副官が困ってるッスよ！！」

「これは失礼した、副官殿…」

「あ、いえっ…！！」

頭を下げて謝る河上に、紫苑も慌てて手を振る。しかし…と紫苑は心の中で盛大な溜息を吐いた。

（何と言うか…：個性派揃いって感じね。いや、あの時の仲間も個性派揃いだったけどさあ…。この人達、…剣の腕はどうなのかしら？また子ちゃんは銃を構えていたから多分それ相応の使い手。武市さんは腰に帯刀…ということは、得物は刀ね。河上さんが背負ってるのは…三味線かしら？…：なんで三味線？）

本当にこれが、今の鬼兵隊の幹部なのだろうかと思わず疑ってしまうが、晋助が言うのだ。間違いないだろう。

「紫苑、最初は慣れねえたア思うが暫くすりゃあ慣れるだろうよ。

…そんなじゃ、オメエの部屋に案内する。ついて来い…」
「待って兄さん!!」

すぐにその場を後にしようとした晋助を紫苑が止める。幹部達は驚いて紫苑を見たが…その紫苑の瞳は真剣そのものだ。

「何だア？」

「…聞きたいことがあるの。どうしても、聞きたいことが…」

確認しなければならぬ。鬼兵隊の幹部がここに居る3人だという事は分かった。しかし、幼馴染達は…恋人である銀時は…同じ船にいるのだから？この、今の鬼兵隊に彼らはいるのだろうか？意を決して、紫苑は口を開く。

「…他の3人は…？コタローは？辰馬は？…銀時は…？一緒にいないの？」

紫苑の問いに、ピクリと晋助の肩が跳ねる。と同時に、僅かに殺気を感じた。それに今度は紫苑が顔をしかめる。

「…何で、んな事を聞くんなんだア？」

「何でって…仲間じゃない!!兄さんの安否は分かった…けど!!
!他の3人の事は私、何も知らない…!!ねえ、無事なの!?兄さん!!」

懇願するようなその声に、晋助はハアと溜息を吐きながら紫苑に向き直る。晋助の瞳には…感情の欠片もない。その瞳が酷く、恐ろしく感じた。暫くの沈黙の後、晋助が口を開く。

「生きてるぜエ…？」

生きている。

その言葉に安堵し、紫苑の胸が熱くなった。

しかし：晋助はそんな紫苑に構うことなく続ける。

「だがなァ、アイツらは好き勝手進みやがった。俺達ァ、最初こそ同じもんを目指していたと思ってた。だがよォ、結局は全員違あきなう場所を見ていたってこったァ。辰馬は天人を相手に商あきないをする“快援隊”の頭かしらとなつて宇宙を飛び回ってやがる。ヅラは：まあ、俺とは違うやり方で倒幕を考えてらァ：」

坂本も桂も、形は違えど自分達の出来ることを考えているのだろう。坂本に至っては、攘夷戦争の時から宇宙に思いを馳せていた。そしていつか、宇宙を飛び回りたいと言っていたことを紫苑は覚えていた。その夢を叶えたのだろう。

しかし、何故桂は：同じ倒幕を目指していながら、晋助と違う道を歩んでしまったのだろうか？そこに紫苑は疑問を感じずにはいられなかった。

そして、何より：肝心な人の名前が：紫苑がもつとも知りたい人の名前が、晋助の口から出てこない。

「兄さん、銀時：ッ、銀時は：生きているの？」

必死に、縋りつくように紫苑が尋ねる。

だが：

「知るか」

そんな懇願も、恐ろしい殺気とたった一言の言葉で切り捨てられた。

「知るか、って……なんで？だって、一緒に攘夷戦争を乗り切ったんでしょ？何で辰馬とコタローのことは知ってるのに、銀時のことだけ知らないの？何で……教えてくれないの！？兄さん！！」

必死に叫びながら恋人の生死を意地でも聞き出そうと詰め寄るが、その刹那……紫苑は目を見開く。

「ちょ、晋助様！？な……何をしてるツスか……！！」

来島が……いや、その場に居た武市、そして河上也驚いたように晋助を見つめる。

しかしそれ以上に、紫苑が誰よりも驚愕していた。

否、信じたくなかった。

「同じことを何度も言わせるな、紫苑。俺ア、銀時ヤロウのことア知らねエ。今度同じことを聞いたら……例えオメエでも、容赦なく叩つ斬る」

紫苑に向けて刀を突き付けたのだ。紫苑の目の前に、晋助が向けた刀の切っ先がある。

何の冗談だろうか？

これは夢だろうか？

優しかった兄が、自分に刃を突きつけるなど……何かの間違いではな

いだろうか？

「兄…さん…？」

驚きと悲しみの入り混じった声で兄を呼ぶが…

「…来島、オメエが紫苑を部屋まで案内してやれ。気が変わった」

「えっ！？あ、はいっ！！」

その声は、届かなかった。

晋助が部屋から出て行き、部屋を支配していた緊張が一気に解ける。と同時に、紫苑はその場に崩れ落ちた。

「大丈夫でござるか？」

その身を案じた河上が紫苑に声を掛けるが…

「な、んで…っ…、兄さんッ…」

河上の声は紫苑には届いておらず、その瞳からはパタパタと涙が零れ落ちていた。

そして…

「ねえ…生きてるよね…？無事よね…？」

唯一、安否の分らない…

「銀時ッ…、銀、時ッ……！！」

恋人の名前を、何度も何度も呼び続けた。

再び兄の元に戻り、そして鬼兵隊の副官というポジションに戻った。しかし、紫苑の心はいつも晴れず…。宛がわれた自室に居る時は、いつも窓の外を眺めてボーッと考え事をしている。時々、来島が来てはワイワイと女同士の話に花を咲かせるが、それ以外で紫苑が感情を表に出す事は無かった。

兄である晋助の前ですら…もう、以前のように笑う事は出来なくなっていた。

日課と言えば、新聞に目を通す事と、テレビのニュースに目を通す事。それは、仲間だった桂の安否を確認すると同時に、銀時の情報を得るためだった。直接晋助から聞けないのであれば、自分で探す。そう意気込んだものの、鬼兵隊は今や超過激派の攘夷志士であり、真選組が常に目を光らせている。何処から流れたのか、紫苑が鬼兵隊の副官となったことも世に知れ渡り、迂闊に外には出られない状態となってしまった。

紫苑にとって、唯一の情報源はもはやテレビと新聞だけなのだ。

一度、幹部の誰かに聞いてみようかと思ったこともあったが…そこから晋助の耳に入ることは明白だった為、やめた。

（私は…今の鬼兵隊の幹部を、心の底から信じることは…出来ない）

来島は純粹に自分を慕ってくれている。それは有り難かったし、唯

一紫苑も来島にだけは本来の自分を見せることができた。しかし、武市と河上：否、この鬼兵隊に所属する誰もが自分の敵であるかのようにすら感じたのだ。

「……最初は、嬉しかったんだけどね……」

晋助と再会した時は心の底から安堵したし、とてつもなく嬉しかった。

しかしそこから、奈落へと叩き落されたのだ。

鬼兵隊副官と呼ばれてはいるが、実質：紫苑はただ船の中に居るだけで何もしない。もちろん、攘夷戦争の時とは違うから毎日いっせが戦いくさというわけではないことは百も承知だ。紫苑自身、戦う事はあまり好きではないため戦わないのならばそれにこした事は無いと思っではいるが、祭まつりだと言って江戸の町に下りる時も：他の幹部は従えるのに、晋助はいつも紫苑だけを船に残して行く。まるで：混乱に乗じて逃げ出してしまうことを危惧しているかのように。いつも「本陣はオメエに任せる」と言っではいるが：どこまでが本心なのか、分からない。

“鬼兵隊の副官”という名の鎖でつながれている気分すら陥る。

「私は：何の為に呼び戻されたのかしら：？何の為の、“副官”なのかしら？」

鬼兵隊の隊士達と剣の手合わせをすることもあるが、それも最近では数が減ってきた。武器が剣ではなく、もっと優れた銃などに様変わりしたからだ。剣の相手をしている時が、唯一自分の存在を認められているかのようにすら思えたのに……今ではもう、それすら感

しない。

「…ただ、ここに居るだけ。私は“鬼兵隊の副官”という人形^{かざり}…」

鬼兵隊の作戦会議には当然副官として出席する。しかし、そこでなされる話は…どうやって敵を制するかという話ではない。

“どうやって、敵を陥れるか”、そして“誰を駒^{つか}として利用^{つか}うか”という話ばかりだ。

一体…何処で、晋助の人生は狂ってしまったのだろうか…何度も何度も思った。しかし、考えれば考えるほど…

自分が攘夷戦争の時に、本軍から離れてしまったせいなのではないかと…そう、思ってしまう。

だから、言いたくても言えなかった。

“もう、こんなことはやめましょう？先生はこんなこと、望んでないわい…”

昔の晋助ならば、この言葉も容易に届いただろう。しかし、今の晋助は遠すぎる。

もはや…今の鬼兵隊を率いる兄は、紫苑が誇りに思い、目標としていた兄ではなかった。

ただの“復讐の鬼”と化した、鬼兵隊の頭^{かしら}でしかなかった。

もう、あの頃の優しい兄はいない。しかしそう思っている、分か

っていても：どうしても、晋助の姿を見るたびに“もしかしたら”
という淡い期待を抱いてしまうのだ。

「何で：兄さん、私の着物を着ているのよ：。信じたいって思っ
ちゃうじゃない：っ：。」

それは、晋助の身に纏っている着物。あれは元々、紫苑の着物だっ
た。蝶柄の着物で、その模様が気に入った紫苑は攘夷戦争の最中、
物資調達で店に立ち寄った時に2着の着物を買ったのだ。柄は同じ
で色違い。片方は紫、そしてもう片方は桜色。本陣から離れてしま
った為、結局どちらも紫苑が袖を通す事はなかったのだが、その片
方を晋助が身に纏っている。どうせ答えてはくれないだろうと思
いながらも理由を聞けば、その時だけ酷く穏やかな表情で：

『紫苑という存在を忘れたく無かったからだ』

そう、言ったのだ。生憎、もう片方の桜色の着物の行方は分からな
いままだが：自分が欲して買ったそれを、晋助が好んで着ている。
他の誰でもない、紫苑という存在を忘れない為に：。

まだ、晋助の中に紫苑という存在は確かに存在しているのだ。鬼兵
隊の副官としてではなく、1人の大事な妹として。

「もう：ワケが分からない：。」

晋助が今、何を考えているのか。倒幕とは言っているが、本当にそ
れだけを目論んでいるのか。常に晋助は“この国をぶっ壊すだけだ
”と言っているが、その言葉の真意が分からない。来島と話した事
もあったが、やはり来島も同じらしく2人で首を傾げたくらいだ。

国を壊すというのは、幕府を討つという意味なのか。それとも本当にこの国諸共破壊するという意味なのか。

晋助の考えが…分からない。

「こんな時…銀時だったらパッと言い当ててくれるのにね…」

彼から貰ったかんざしを見つめながら、紫苑は思いをはせる。誰かが間違った道に進みそうになったら、必ずそれを誰かが止めていた。時には晋助が、時には紫苑が、時には桂が、時には坂本が、そして…時には銀時が。そうやって支え合って進んできた道も…今となつては先の見えない迷宮だ。

今の鬼兵隊に、晋助を止める者は居ない。紫苑がどんなに止めても、その声は届かない。だったら止めても無駄だと…いつしか紫苑も諦め、口を挟むことをやめた。

何もかもが無駄だと…そう、諦めた。

「……けど、本当にこれで…いいの…？」

諦めたつもりでいた。けれど、諦めようとすればするほど…

『よっしゃ、次の戦いは俺最前線で行くわ!!』

『おー、銀時は気合が入っちやるのお!!』

『先に突っ走るのはいいが、くれぐれも迷子になるなよ』

『そんな時ア、お前を放って行っただけだ』

『うわーっ、兄さんってば容赦ないねえー!! 大丈夫、私が大声で天パーッって叫んであげるから!!』

『何、その探し方!?! 限りなく嫌がらせに近くね!?!』

——アハハハハッ!!!!

他愛ない事で、皆で笑い合っていた昔の事を思い出す。

まるで、諦めるなど…そう言うかのように…。

しかしどうすれば晋助が自分の言葉に耳を傾けてくれるのかも、どうしたら以前の優しい兄に戻ってくれるのかも…今の紫苑には分からない。あるいは、晋助の望みを…討幕を成し遂げれば以前のような優しい兄に戻ってくれるのかもしれない。しかしそれでは何の解決にもならないのではと…紫苑は悩む。

本当の意味での解決は、晋助の望みを叶える事ではない

本当の意味での解決は…。

「…できるかしら…今の私に…」

晋助の目を覚まさせること。

これ以外に無いのだ。

晋助にとって、まだ自分の事を大事な妹と思ってくれてるのであれば…。

何度も何度も言い続けられ…届くかもしれない…。

「……だって、戦^{いくさ}に行く前にみんなで約束、したじゃない…」

——戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時は……

「まだ、あの時の約束…果たせていないわよ…？」

だから、こんな事はもうやめましょう…兄さん…？

瞳を閉じ心を落ち着け、そしてゆっくりと目を開ける。

その深い紫色の瞳は、強く真っすぐと先を見据えていた。

（覚悟を決めよう。……鬼兵隊から抜ける覚悟を。兄と妹という縁を切るという覚悟を。……最悪、兄さんに殺されるという覚悟を…）

ギュッと刀を握る手に力が籠る。

何度も感じていた事だ。

自分と“鬼兵隊”の温度差。

そこに紫苑の居場所などない。

復讐鬼と化した兄の姿。

それを止めるのは妹である自分の役目であり使命。

紫苑が求める居場所は、殺伐としてはいたがそんな中でも互いを思

いやる優しさに溢れていた鬼兵隊。

紫苑が求める晋助^{あに}は、厳しく不器用ではあったがとても優しく自分と仲間を大事にしていた人。

決して、今の鬼兵隊ではない。

決して、今の晋助^{あに}ではない。

“今”に、紫苑の求めるものは何も無いのだ。

「……初めてね、兄さんに反抗するなんて…」

下らない事で喧嘩をする事は何度かあったが、それでも次の日には互いに謝って笑い合って許し合った。

しかし、刀を片手に喧嘩というのも物騒なものだと…紫苑は悲しみの微笑みを浮かべる。

だが、思い残すことは…この鬼兵隊には何も無い。

ただ、最後に…いつも良くしてくれた来島にだけは会っておきたかった。

（もう、二度と会えないだろうから…さよならを言わなきゃ…）

唯一、鬼兵隊の中で心を許せた存在。晋助以上に心を許せた存在…。一方的な思いだったかもしれないが、“友達”だと思えた存在。

そんな彼女にだけは…別れを言わなくては。

きつと引きとめられる事だろう。

けれど、誰に引きとめられようとも…もう紫苑の決意は揺らがない。

刀を持ち、紫苑は自室だった場所を後にする。持ち物は2つ。

刀と、大切なかんざし。

（元より私は、これしか持ち物が無かったのだから…）

極力人に見つからないようにそつと移動し、来島の部屋へと向かう。
扉をノックすれば元氣のよい返事が聞こえてきた。

「誰ッスか？」

「私、紫苑よ。また子…：ちょっといいかな？」

「紫苑ッスか？もちろん！！！」

共に時間を過ごすことで、堅苦しい呼び方は無くなった。普通に話すようになって笑いあつて…。思えば、女友達は彼女が初めてだったなあと…：そんな事を考える。開かれた扉からは、いつもの露出度の高いそれとは違う着流し姿。もう寝る準備をしていたのだろう。しかし、紫苑の姿は…初めて来島と対面した時の姿。つまりは、戦装束だ。

「…どうしたッスか？そんな格好して…？晋助様から何か…」

「また子、話があるの。あまり人に知られたくないから…」

「だったら中に入るッス！！！」

迎え入れられた来島の部屋で、紫苑は椅子に座るよう促されるが……それを断り真っすぐに来島を見つめる。

「また子、私の話を何も言わずに聞いて。そして出来れば……何も言わずに、見送って……」

「紫苑……？」

不安そうな来島の声に微苦笑を浮かべながら、そして……

「私は……これより、兄・晋助の元に行き……鬼兵隊の脱退を申し出る」

「なっ……！？何を言ってるツスカ！！そんなことしたら……！！」

来島の言わんとしている事は分かっていた。鬼兵隊の脱退は直結して裏切りとなり、その場で処刑となる。晋助の機嫌が良ければ、その場で即処刑ではなく……逃げ出すターゲットを幹部達や鬼兵隊の隊員達に追わせてじわじわと追い詰めるという処刑^{ゲーム}になることもある。また、晋助が手放したくない存在である場合も然り。そうすることで「こんな仕打ちを受けるぐらいなら戻った方がマシだ」と言ってみてきた者も少なくは無い。

「分かってる、処刑……されるわ」

「だったら、何で……！？」

何故、と問われればいろんな思いが交差する。

理由は沢山あった。

けど、確かな理由があるとすれば、それは……

「今の兄は…私の尊敬した兄ではない。攘夷戦争で共に動いていた時の兄は……」

『いいか、副官の紫苑の命令は俺の命令だと思え。紫苑に付き従う者は、紫苑に命を預けろ。我ら鬼兵隊は、俺と紫苑、そしてお前達の力があってこそその鬼兵隊だ！！戦に出る時は覚悟を決めろ！！死ぬ覚悟じゃねエ！！戦い抜いて、生き抜く覚悟だ！！』

「仲間を思い、常に先陣を切って走り、傷付いた仲間の為に怒って敵を制する…そんな人だった」

「……紫苑……」

「今の兄さんからはね、“復讐”という感情しか感じられない。昔の兄さんは優しくて仲間をととても大切にしていたの。……私の話を聞いても信じられないでしょ？正直に言っているわ。誰にも言わないから……」

「……正直、信じられないッス。優しい晋助様というのが……。いや！！今も十分優しいッスけど……！！」

「うん、そうね…また子の言う通り、今も優しいと思う。けれど……」

今の晋助の瞳は、昔のそれとは随分と変わってしまった。

あんなにもギラギラとした…獲物を狙うハンターのような瞳では無かった。

「昔はね…あんなに鋭い瞳じゃなかったの。もっと…温かい、優しい瞳だった…」

「そう…なの…?」

「うん、そうなの。多分、あの時の仲間が見たら…今の兄さんからは離れてしまうわね…。コタローが何故、鬼兵隊に入らなかったのか…分かったような気がする…」

そして、もし銀時が今の晋助を見たら…間違いなく、殴り飛ばすだろう。「なんつー目をしてんだ、コノヤロー!!」と言いながら…。

「そんな事を色々考えてたらね、私の居場所は今の鬼兵隊には無いって…そう思った。それと同時に…兄さんの目を覚まさせなければならぬと思った」

来島は小さく「まさか…」と漏らす。それに紫苑は小さく頷いた。

「喧嘩、してくる。久々の兄妹喧嘩きょうだいを…ね?」

「喧嘩って…!! 駄目ッス!! そんなことしたら、紫苑が…!!」

「本当に馬鹿よね。刀をぶつけ合う兄妹喧嘩きょうだいなんて…。命がいくつあっても足りないわ」

けど、と…来島の目を真っすぐと見据え、微笑んでいた口を横一文字に正して…

「今、兄さんが行っている行為は…間違っている。確かに国が…幕府が憎いという気持ちは私も同じ。けれどこんなやり方は…誰も、望んでいないの。攘夷戦争で共に戦い散って逝った元鬼兵隊の仲間達も、今もどこかで己の信念を貫こうとしている幼馴染達も、そして…」

目を閉じれば鮮明に浮かぶ…恩師の笑顔。

「私達がとても大切に思っていた、今は亡きあの人も…」

そして、何より紫苑自身が…望んでいないのだ。

復讐にしか興味を持たない晋助の姿など…。それによって関係のない一般人が巻き込まれて犠牲になることなど…。

「けど、今の兄さんを止める事は誰にもできない。だから…」

今の幹部達は晋助に従うだけで自分の意見は決して言わない。

晋助を止める、なんてことは絶対にしないだろう。

だったら、その役目は…

「せめて、妹である私が命を掛けてでも目を覚まさせなきゃね…」

妹である紫苑の役目だ。

ふわりと笑う紫苑に、困惑する来島。

来島は幹部の立場だ。もし、紫苑の処刑が決まれば…その場に同席しなければならなくなる。それが直接、晋助が手を下すにしても、ゲームと称した処刑をするにしても…結果的に、紫苑の処刑には必ず居合わせなければならぬ。

止められるものなら是が非でも止めたい。

しかし…

「止めても駄目よ？私、兄さんと一緒に頑固だから：一度決めた事は何かあっても曲げないの」

それを見越して、紫苑が言った。

「そんな事言われたら：止められないじゃないッスかっ：」

「うん、また子は優しいから：きつと止めると思って。だから、自分が止められなかったせいでって：そんな風に苦しんで欲しくなかったから：その言葉を言わせなかった。ごめんね？私、卑怯よね：？」

そつとその頭を撫でれば、来島は俯く。泣くまいと我慢しているのだろう。そんな来島を抱きしめ、そして：

「ごめんね、ありがとう。この鬼兵隊：私にとっては居心地が悪かったけれど、また子との時間はとても楽しかったわ。私にとって貴方は、唯一の友達だった：。また子が私の事をどう思っていたかは分からないけれど：私にとって、貴方は唯一無二の女友達だった：」

紫苑の言葉を受け、来島も紫苑に抱きつく。紫苑の胸に顔を埋め、肩を震わせる。ポンポンとあやすようにその背中を撫でていると、小さな声が聞こえてきた。

「私にとって：紫苑は姉上のような存在だったッス：！！凄く優しく、頼りになって、話してて楽しくて：ッ！！姉上がいたらきつと、こんな感じなんだろうなって：！！紫苑みたいな姉上だったら欲しかったなって：そう、思ったッス：！！！」

震える声から紡がれた言葉は、来島の心からの言葉。それを受け、

紫苑は驚いたように目を見開いたが…フワリと笑い、ギュツとその身体を抱きしめる。

「うんうん、そうだね…。また子みたいに可愛くて、おてんばで…けれど優しくて素直な子が妹だったら、私も幸せだったなあ…」

けれど、これから紫苑がしようとしている事は鬼兵隊を…来島を裏切る行為。

「こんな、駄目なお姉ちゃんでごめんね、また子…」

「そんなこと、無い…!! 私はずっと楽しかったし、幸せだったツス…!!」

「それが聞けてうれしいよ。ああ、もう悔いはないや…!!」

互いに離れると、来島の頬にはいく筋もの涙の痕が。紫苑の表情は…悲しげな笑み。

ああ、できる事ならば…

本当の兄の姿を知って欲しかった。

出来る事ならば…

今の鬼兵隊ではなく、あの頃の鬼兵隊で出会いたかった…。

そんな思いを紫苑は一瞬にして払拭し、スッと来島に背中を向ける。

「じゃあ…さようなら、また子。次に会う時は…」

処刑場で…

悲しい響きに、また…来島の頬を涙が伝う。

パタン、と扉を閉め…紫苑は扉に背中を預けて天井を仰ぐ。

「別れも告げた…もう、思い残す事はない…。いや、1つだけ…」

結局、最後の最後まで銀時の生存は…分からないまま。何度も来島に聞いてみようかと思ったが、それにより来島に迷惑が掛かつてはいけないと自重していた。

「銀時…どこかで、生きてるよね…？ 銀時は強いから…。けど、ごめん…私はもしかしたら、これが最後になるかもしれない。折角プロポーズ…してくれたのにね…。ごめん…ごめんねっ…！！…愛してる…ッ、大好き…！！今も、この気持ちは…変わらないッ…！！」

貴方が幸せならば、私も幸せ。だから、貴方は貴方らしく…いつものように、笑っていて下さい…。

自然と零れる涙を拭い、紫苑は深呼吸を繰り返す。目を閉じ精神を落ちつかせ…カッと目を見開いた。

「……さあて、喧嘩といきますか……」

ニイツと口角を吊りあげて、紫苑はその場を後にする。

向かう先は……

兄である晋助の部屋…。

その気配が去るまで、ずっと扉の前に居たまた子は…紫苑の言葉に驚愕した。

「プロポーズ…って、何ッスか…？それって…結婚が決まってる事ッスか…？」

その時、来島は今までの人生で初めて深く後悔した。

まさか、銀時と紫苑の関係がこんなにも大切なものだとは思ひもしなかったのだ。晋助からは“坂田 銀時の生存については紫苑には言うな”という緘口令^{かんこうれい}が布かれていた。故に、伝えたくても伝える事ができなかったのだ。

しかし、こんなことになるならば……そっと教えてあげるくらいしてもよかったのではないかと、今更ながらに悔やんでしまう。

そうすれば、目を盗んで会うことぐらいは出来ただろう。何せ、高杉一派と銀時は機械技師^{からくり}を巻き込んだ祭^{いひ}の時に出くわしていたのだから…。

「……ッ、できの悪い妹で…ごめんッス…ッ…」

愛する者の生存も分からず、愛する者との再会も叶わず、処刑されるなど…何と悲しい結末だろうか…？

しかし、どんなに後悔しても…もう紫苑の歩みは止まらない。

例え全力で来島が止めたとしても、恐らく紫苑は来島を気絶させてでも晋助の元へと向かうだろう。

もはや、この先の運命は…

紫苑と晋助にしか分からないのだ…。

【第五訓】追憶　　ゝ再会、そして決意ゝ（後書き）

着物の話はとっさの思い付きでした（笑）晋助のあの着物ってよく、女物って描写を見るんですが……実際どうなんですかね？女物なのかな……？まあいっか（笑）

そして何気にまた子の口調がムズいという^^；あれだよ、沖田君と同じくらいムズいよこの子……^^；

【第六訓】追憶　　ゝ決別ゝ（前書き）

追憶編ですが…後もうちょつと続きますへへ；本当は今回の話と次回UPする予定の話、1話の予定だったんですが思いのほか長くなつたので分割しました（苦笑）

ついに、ヒロインと晋助が……！！

って…あれ？この小説、お相手銀ちゃんだよね…？高杉夢じゃないよね…？あれ？（笑）

【第六訓】追憶　　ゝ決別ゝ

長い長い廊下は、まるで死刑台に向かっているかのようだ。

時々、すれ違う鬼兵隊の隊士達が紫苑の戦装束いでたちに驚いたような表情を見せるが、何より紫苑から零れ出ているただならぬ殺気に誰も、何も言う事が出来ずにいた。何か言えば、その場で斬り捨てられそうな…そんな雰囲気をももし出していたのだ。

紫苑とすれ違った者達はそれぞれ、思った。

流石は、あの高杉　晋助の妹だと…。

晋助の部屋の扉の前まで辿り着くと、紫苑は小さく深呼吸をした。一応は話し合いのつもりだが…あの言葉を決して忘れたわけではない。

——例えオメエでも、容赦なく叩つ斬る

それは、銀時の生存について聞いたときに言われた言葉。その殺気からして、言葉に偽りは無い。一応、“話し合い”のつもりで来たが、それと同時に“喧嘩”しやげも覚悟の上で来ているのだ。

（私の言葉が届かないのならば…）

ギュッと己の刀を握り締める。もし、言葉が届かないのであれば：もう、力づくで止める以外に方法はない。晋助に勝てるとは最初から紫苑も思っていないが、一矢報いるくらいは出来るだろうと思っていた。

（ホント、世界一不器用な兄妹きょうだいよね、私達：）

今となってはこんな方法でしか晋助を止める事ができない。刃を交えなければ話をする事も出来ない。

昔は：違っていたはずなのに。

小さく息を吐き、意を決したように扉をノックする。すると、中からは晋助とは違う男の声が聞こえた。

（……万斉がいるのか……）

これはまた面倒な、と内心で悪態を吐く。

「夜分に失礼、兄さん：大事な話があるわ」

「ほお：そんな大層な殺気を身に纏って“話”たア：確かに大事な話らしいなア：」

ククッと喉を鳴らして笑う兄の声が聞こえる。

やはり、気付いていたかと嘆息し：ゆっくりと扉を開けた。

部屋には最初に返事をした河上と、武市もその場に居た。何でよりにもよってこんな時に揃っているのかと、何度目か分からない悪態を内心で吐く。一方の河上らは、突然現れた紫苑にも驚いたが、そ

の出で立ちにも驚いた。紫苑の出で立ち、それは戦装束…。

「よお、俺あにに会いに来るのに、随分とめかし込んでるじゃねえか…」

まるで全てを見透かしていると言わんばかりのその瞳。

本当は、口で直接言いたかった。

貴方は間違っている、と…。昔の貴方に戻って、と…。

しかし、紫苑に向けられた視線が、紫苑に向けられた殺気が…全ての言葉を拒絶すると物語っている。

どこかで諦めてはいた。もう…言葉は届かないだろうと。

ならば自分はもう、今の鬼兵隊に用はない。紫苑は晋助の座る場所まで歩み寄り、そしてスツと頭を下げた。

「……紫苑さん？」

武市が不思議そうに紫苑を呼ぶ。河上は何も言わず、ただその様子を傍観していた。そして、当の晋助は…

「……………」

冷徹な瞳で、頭を下げた紫苑を見下す。

（これは、予想以上にやばそうね…）

凄まじい殺気に、紫苑の額に冷や汗が伝う。しかし、もう後戻りは

出来ないし、するつもりもない。

紫苑の口が…開く。

「本日限りで、鬼兵隊を脱退させてもらいたく参上しました」

武市・河上が驚く中、晋助だけはまるで予想していたと言わんばかりに口角を吊り上げる。

「だろうなア…。いつそう言って来るかと楽しみにしてたぜエ…？」

楽しみにしていたとは果たしてどういう意味なのか…。やはり、今の晋助が考える事は分らない。そんな紫苑の困惑をよそに、クツと口角が吊り上ると同時に、鋭い視線が紫苑を睨み付ける。

「まア、興味はねえが…一応理由を聞いてやろうじゃねえか…。鬼兵隊副官というポジションにいながら、何が不満なんだ？アア？」

何が不満かと問われれば、色々とグチグチと言いたくなる。

しかし、シンプルに一言で片付く言葉を紫苑は持ち合わせていた。

何が不満なのか、その問いの答えは…

「全て」

晋助を含めた“今の鬼兵隊”を否定する言葉だった。晋助の予想と違っていたのか、一瞬…晋助の表情が変わったがすぐに余裕の笑みを浮かべる。それと同じように、紫苑もまた口角を吊り上げた。

「全てたア、また随分と曖昧じゃねえか…。なんだア？攘夷戦争ん時みたいにな、最前線で人殺しでもしたいってか…？」

「馬鹿言ってるじゃねえよ、このクソ兄貴。私は…このイカレた鬼兵隊の全てが気に食わねえつつてんだ…テメエも含めてなア…」

突然豹変した紫苑の言葉。人生で初めて、紫苑は兄に向かって暴言を吐く。攘夷戦争ではいくらでも敵に対して吐いた暴言。しかし、仲間と兄にだけは決してこのようなことは言わなかった。

だが、紫苑はもう“話し合い”は諦めていた。

「面と向かって否定する。私はこの“鬼兵隊”を…“鬼兵隊”だとは認めない」

そして…と、続けざまに…

「今のアンタを、兄とも思わない」

言った。

出来れば、一番言いたくなかった言葉。どんなに変わってしまったって、晋助が自分の兄である事には変わりはない。しかし、もうこんな復讐に囚われるだけの兄など見たくはなかったのだ。

昔…まだ子供の頃に寺子屋で桂に教えられた事…。

『いいか、紫苑？もし、晋助のことが気に食わないと思ったときには思いっきり晋助に向かって“嫌いだ”と言ってみろ。あ奴のことだ、必死になって許してくれと言ってくるぞ』

何気ない会話だった。悪戯っぽく笑いながら桂の言った言葉に、じゃあいつかそんなことがあったら試してみるねと紫苑は言った。

（まさか、それが今だなんて…ホント、笑っちゃう…）

ピリピリとした空気に、明らかに武市がオロオロし始めた。河上は成り行きを見守るようにただ見ているだけだ。

スツと…晋助が立ち上がる。

と同時に…

——キイイイイン！！！！

晋助が抜刀した。それに素早く反応し、紫苑も抜刀して晋助の太刀を己の刀で受け止める。

「ほお、随分言うようになったじゃねえか、紫苑…」

「いつまでもアンタの後ろをチヨロチヨロついて回る私だと思うな」
「今の鬼兵隊が鬼兵隊じゃないだア？今の俺が、俺じゃないだア？」

晋助の押す力が増した事に気付いた紫苑は一度、離れて間合いを取る。刀を構えたまま晋助は床を見つめていた。紫苑は刀を構えたまま、いつ晋助が攻撃してきてもいいように体勢を整える。

「ククツ…」

「何が可笑しい？」

「そりゃ、可笑しいさ…」

その言葉と同時に、一瞬紫苑の目の前から晋助の姿が消えた。

だが僅かな気配で、俊敏に反応する。再び、刃の交わる音が部屋に響き渡った。

ガチガチという刀同士がぶつかり合う音。そして、ぶつかり合う鋭い視線。

真っ直ぐと、自分を見つめる晋助の瞳、そして自分に向けられたその言葉で…

「そりゃ、テメエが変わっちゃったからだろうよ。俺ア昔から何も変わっちゃいねエ。ただ、先生の仇を討つ、そしてこの世界をぶっ壊す。昔も今も、俺の思いは変わらねえし、鬼兵隊もまた変わらねえ。それを変わったと感じるってこたア、単にテメエが腑抜けになっちゃっただけだア、紫苑…」

紫苑の中に僅かに残っていた希望も、音を立てて崩れ落ちた。その瞬間、紫苑も決意を改める。

話し合いは不可。

だったら…

「そう、私が変わったと…そう言いたい…。だが残念だったな…」

もう、手を抜いた鏑迫り合いなど無用だ。紫苑はありったけの力を

込めて、晋助を押し返した。予想していたのか、今度は晋助が後ろに飛び退き何事も無かったかのように着地する。

「…私とて今も昔も変わらない。ただ…」

——紫苑、お前は優しい子だから大切な者を護るためにこの剣を振るいなさい。そして、仲間が誤った道を歩もうとした時は…お前が止めてあげなさい。きつと、お前の優しい言葉ならばどんな者にも届くでしょう…。

ごめんなさい、先生…。護るためじゃない刀を…他の誰でもない兄に向ける事になってしまいました。けれど…

「己の剣で、己の信じる道を切り開く…それだけだっ!!」

もう、兄には私の言葉など届かないのです。剣の道しか知らない私達は…

「切り開くだア? テメエ、まさかこの鬼兵隊から無傷で逃げられると思っっているわけではあるめえな?」

「はっ、言ってる!! 私、攘夷戦争終盤は独りで戦い続けた!! 確かにアンタは強い。けど…」

こうすることですか…

「簡単にやられるほど、やわじゃないっ!!」

もう、分かり合えないみたいです…。

ごめんなさい、先生…。

貴方は私達に、いつまでも仲の良い兄妹きょうだいでありなさいと仰おほっていました…

どうやら、それも今日で終わりのようです。

そちらでもし、お会いすることがありましたら…存分に私を叱しってくださいな。

私は貴方の説教を、甘んじて受けましょう。

互いの斬り合いを、ただオロオロと狼狽しながら「やめなさい、紫苑さん！！晋助様も落ち着いてください！！」と何とか鎮めようとしている武市とは打って変わって、河上はサングラスの奥から2人の様子を見つめるだけ。そしてクツと口角が釣り上がる。

（やはり兄妹きょうだいでござるな。静かなクラシックから…ロックへ…。いや、やはりロックなんて甘っちょろい曲調ではござらん。これを例えるならば、激しさの中に更に更に激しさを持つ…音楽の中でもっとも荒々しい…ヘビメタ…）

これは面白くなってきたと、河上はただただ2人の戦いを傍観していた。

「言うだけあって強くなったじゃねえか、紫苑…。やっぱ、テメエは“紫怨しおんの鬼”だなア…」

「その名を……呼ぶなアアアツツ！！！！！！」

二つ名を他の誰でもない兄に呼ばれ、完全に理性が切れた紫苑は腰から抜いた鞘で隙だらけだった晋助の脇腹に一太刀入れる。流石に反応仕切れなかった晋助は、それを受けて膝をついた。

「……ッ……!! ククッ、剣と鞘を使つての戦い……。久々に見たぜエ、テメエの本気をよォ……」

まさかあの晋助が膝をつくほどの攻撃を繰り出すとは思わなかった。武市と河上は流石にこのままではまずいのではないかと思い始める。しかし、晋助からの指示が無いまま手を出せば、標的が自分に代わることは目に見えていた。

(とりあえずは様子を見ますか……)

(面白くなってきたでござる)

睨み合う2人、そんな2人をただ見ているだけの2人。だが……さすがに……と、河上は静かに手を上げた。

「何だァ？」

「邪魔すんな、万斉」

殺気と明らかな怒気の籠った2人の声に、武市が「何余計な事しちやってるの!？」と頭を抱えていたが、それを綺麗に無視して河上が口を開く。

「このような狭い場所では、折角の殺し合いも楽しめまい。ここは一度、場所を移してはどうでござろうか？拙者も、主らの戦いのリズムに興味が湧いた。このような狭き場所で奏でるには、惜しいリズムでござる……」

その河上の言葉を最後に、部屋はシンと静まり返る。最初に沈黙を破ったのは紫苑だった。

「知るか、何処で殺し合おうが私の勝手。テメエに口出しをされる筋合いはねエ：」

叩きつけられた殺気を綺麗に流しながら、河上は晋助の方に視線を向ける。

「晋助、お主も同じ考えでござるか？」

問われて、晋助は：

「ククッ：何事もやるんだったら派手な方がいい：。もちろん、殺し合いもだ：」

ニイツと口角を吊り上げ、河上の提案に乗った。紫苑は何処で戦っても同じだと再び吐き捨てて晋助に切りかかったが、それを晋助はひらりとかわす。

「同じじゃねエだろうよ：。折角の殺し合いだ：。しかも、他の誰でもねえ、テメエと殺り合おうってんだぜエ？これを樂しまずに何を樂しむってんだ：」

「ふざけるな！！私は樂しんでなどいない！！ただこの決着を早く終わらせる、それだけだ！！」

「だったら：：俺ア場所を移さねえ限り、剣は抜かねえし、テメエとも殺り合わねえ：」

どうだ、それでもそんなことが言えるか？

晋助に問われ、チツと小さく舌打ちをする。そして、ギロリと河上を睨んだ。

「余計な事をしてくれたものだ…」

このまま晋助が動かないというのであれば意味が無い。それどころか、自分は一生この居たくも無い場所で飼い殺しにされてしまう。だったらここは素直に従うべきかと…不本意ながら、構えていた刀を下ろした。

「いいだろう、場所を移してやる。どこだ？」

「どこだ、だと？ククッ、テメエが一番分かってるだろうよ…場所は——…」

船内が慌しくなってきた。その理由が分かっている来島は、ベッドに潜り込み固く目を閉じていた。

いつ自分が呼ばれてもおかしくない。こんなにも船内が騒がしいと言う事は、もう紫苑が行動に出たということだ。外からは「副官が晋助様に斬りかかったらしいぞ!？」という声も聞こえた。

（紫苑ッ…!!）

果たして、紫苑は無事なのだろうか？以前話してくれたときは、「自分の剣は到底兄さんには及ばないわ」と苦笑していた。その言葉が何度も何度も、来島の脳内を掠める。

「あーっ、もう！！消えろ！！消えろオオッ！！」

嫌な言葉を払拭するように枕を殴り続け、そのままボスンと枕に顔を埋める。

（私は…どうなって欲しいんだ…？紫苑に勝って欲しい…？けどそしたら、晋助様が…。…ッ、どうしたらいいのか…分からない…）

紫苑を死なせたくはない。だが、紫苑が生き残るということは即ち晋助が斬られるということだ。来島は晋助を崇拜している。そして、勝手ながらに好いている。しかし、同じくらい紫苑のことも好きだ。

好きな人同士がこんなことになってしまふなんて…。

やはり、何をしてでも止めれば良かったと今更ながらに後悔しながら、慌しい通路の声に耳を傾けた。

「おい、闘技場の方に移動したらしいぜ？」

「闘技場？いやいや、この場合は処刑場って言った方が正しいだろう…」

「ああ、確かになあ…。しかしまあ、副官も相当な手馴れと聞くが…お前、どっちが勝つと思う？」

「はあ？…そりゃオメエ…。いや、わからんなあ…」

嫌だ、聞きたくない。

そんな話を、何で私の部屋の前でする？

「やっぱ晋助様じゃねえのか？」

「バーカ、相手はその晋助様の妹だぜ？しかも、“紫怨しおんの鬼”だろ

？こりゃ、久々に面白い戦いが見れそうだ…!!」

何が面白いものか。

兄妹^{きょうだい}同士の殺し合いなど…悲しいだけではないか。

ぐるぐると渦巻く来島の思いは…

「テメェら!!ここが来島 また子の部屋の前と知っての騒ぎツスカ!!煩くて眠れないじゃないツスカ!!静かにしやがれ!!」
「ヒィイツ!?す、すみません!!」

扉の向こうに居る部下達への八つ当たりという形でひとまず、落ち着いた。

その時、来島の携帯が鳴る。着信は河上からだった。

(…ツ、つまり…闘^{しやけいじよう}技場に来て事ツスカ…!!)

自分は幹部であり、そこに同席する必要がある。幹部として、裏切り者の結末を見ろという使命がある。

いつもは馬鹿な奴だと鼻で笑っていたが…

「…冗談、きついッスよ…」

その表情は、悲しみに歪んでいた。

いつもは鬼兵隊の隊士達が互いの腕を磨き合う闘技場。しかし、ここは時と場合によって姿を変える。

罪人を裁く、処刑場へと…。

今まさに、闘技場はその姿を変えていた。周りにはこの戦いに興味を持った鬼兵隊の隊員達、そして河上・武市・来島といった幹部ら。

闘技場の中央には…

「じゃあ、仕切りなおしというこうや…」

「ふん…」

鬼兵隊の隊長である晋助と、鬼兵隊の副官である紫苑の姿。

2匹の鬼がまさに、殺し合いを始めようとしていた。
きょうだい

「精々、俺を楽しませてくれや…」

「楽しませる？ 残念だったな…：私はそういう嗜好は…」

ダツと紫苑と晋助が地面を蹴る。

刀同士がぶつかり合う独特の金属音が響いた。

「…持ち合わせていないッ…」

「じゃあ、テメエは何の為に戦う？ アア？」

「最初はアンタの目を覚まさせる為だった。昔のアンタに戻って欲しいと思っていただけだった。だが…」

腰帯から鞘を抜き、ヒュンと振り翳すが今度はそれをギリギリでか

わされる。

「それが叶わないなら、私は鬼兵隊を抜ける。そのために刃を振るう！！」

「鬼兵隊を抜けてその後はどうする？真選組はテメエを鬼兵隊副官として追っているぜエ？」

「だったら私は身の潔白を証明する為に、真選組に捕まろう。そこで…洗いざらい、鬼兵隊について…吐いてもいいんだぜエ…？」

ニヤリと口角を吊り上げる紫苑の姿に、その場にいた誰もがゾツとした。

今、晋助と対等に戦っているのは…本当にあの紫苑なのか？いつも自分達と手合わせをしてくれていた…厳しい中にも、優しさのあったあの女性なのだろうか？

そこに居るのは…

「ほら、かかって来い…。テメエの剣、叩っ斬ってやる…！！」

「ククッ、上等だ。やれるもんならやってみな。俺が、テメエを、叩っ斬る…！！」

“鬼”ではないのか…？

「やはり、こうでなくては面白くないでござる」

「しかしまさか、あの美しいお嬢さんがこんなにもお強いとは…。銃を撃つ以外脳のない猪女のまた子さんとは本当に大違いですね」

「武市変態、煩いッス。黙って死ねや」

「テメエが死ねや」

こんな軽口を叩いてはいるが、来島の内心は正直複雑であった。どちらかが勝てば、どちらかが必然的に重症を負う。下手をすれば、命を落とす。

(……晋助様…、紫苑……)

自分は…どっちに勝って欲しいのだろうか…？そんな葛藤の中、凄まじい斬り合いをただ呆然と見つめていた。

2人が剣を交えて…どれほどの時が経っただろうか？長いようであり、短いようであったが…

「ハッ…ハア…ッ…!!」

「…ッ、どうした、紫苑？息が…上がってるぜ…？」

「…その、言葉…そっくりそのまま送り返してやらア…!!」

時間が経つに連れて、2人の息は上がっていく。それでも決定的な致命傷を互いに与える事が出来ず、双方の身体には各所に浅い刀傷が付いていた。紫苑の着ていた戦装束も所々ぱっくりと割れており、そこから鮮血が滲んでいる。

双方、力は互角。

一体…誰がこんな展開を予想しただろうか？否、誰もが予想してないなかった。まさか、こんなにも長く、こんなにも壮絶な戦いになるなどとは…。

「もうかれこれ1時間ですか…」

「…流石にどっちもきつそうッスね…」

肩で息をしている2人を、武市と来島が見つめる。しかし、河上だけがそんな2人を違う目で見ていた。

（いいや、アレはまだ牙を隠しているでござる。晋助も、紫苑も…
どちらもまだ、ようやく前奏を奏で終わったに過ぎぬ。これから
…）

「よお、紫苑…ダラダラやっても仕方あるめえ。そろそろ本気の殺し合いといこうや…」

「同感だ。さっさと終わらせて…」

（鎮魂歌^{レクイエム}という名のフィナーレでござるよ…）

クツと口角を吊り上げながら、河上はサングラスをクイツと上げる。双方をその瞳に捕らえ、それぞれのリズムを感じながら…この殺し合いを静かに見つめていた。

「私は鬼兵隊を抜けるッ!!」

先に仕掛けたのは紫苑だった。タンツと地面を蹴り、深く腰を落とす。

（足を切り落とすつもりか？ いやア、この目は…）

足目掛けて白刃が迫るが、しかし紫苑の瞳は違うところを捕らえている。そう…晋助の瞳だ。

（最初から、狙うは…）

（おもしれえ、初っ端から…）

（貴様の首だ！！）

（俺の首を狙ってきやがった）

——ガキィイイン！！！！！！

凄まじい金属音が、先程のそれとは比べ物にならない。そこでようやく、そこにいる全員が把握した。まだ2人とも、本気など微塵も出していなかったのだと…。

感じる殺気も、気迫も…数十秒前とは比べ物にならないほどがらりと変わった。場の空気が一変したのだ。

そうそれは例えるならば…

「あの頃を思い出すなア…そうだろ、紫苑…？」

「攘夷戦争か？フン、思い出したくもない…あんな、無意味な負け戦などッ…！！」

攘夷戦争さながらの戦い。

2人が攘夷戦争で刃を振るっていたことはもちろん、この場に居る全員が知っている。だからこそ、思った。

攘夷戦争では、この程度の腕は当たり前なのだろうか…。

「その負け戦を糧に俺ア鬼兵隊を作り上げた。そして俺は、今度こ

そ…幕府をぶっ潰す…!! 江戸の奴らが恐怖し逃げ惑う様は、大層見ものだろうよオ…!!」

「…貴様ッ!! 無関係の人間まで巻き込むつもりか!？」

「この世界から天人を排除するためだ…仕方あるめえよ…」

ニイツと笑う晋助、一気に頭に血が上る紫苑。バツと飛び退き、再び紫苑は刀を構える。同じように腰を落とし、狙いを定めた。

「同じ事を繰り返したところで無駄だぜエ…?」

また首を狙ってくる。それは紫苑の目を見れば分かった。再び刀で防ごうと構えたが…

——カンッ…!!

晋助の構えた刀に当たったのは、白を基調とした刀の鞘。

「…ッ!!…チィッ!!」

晋助の舌打ちに、ニヤリと紫苑が笑う。と同時に、紫苑の白刃がシユツと薙ぐ。晋助の首元から血飛沫が舞った。

「…ククッ…どうだ? 見下していた奴に斬られる気分は…?」

「アア、悪くねえ…。それでこそ、殺りがいがあるってなもんだ…」

辛うじて体を捻ることで、白刃の軌道は逸れたが…晋助の首に赤い筋が出来る。深く傷付いたそこからは、ドクドクと鮮血が流れ落ちていた。

「さあ、私が切り刻むが先か…貴様が失血死するのが先か…見ものだ…」

「いや、その前に…俺がテメエを…叩っ斬る…!!」

そう言うや否や、今度は晋助が低く身を屈める。それを察知した紫苑は、鞘で地面を突き高く飛翔する。

(よし、かわした…!!)

(チッ、飛翔びやがった…!!)

晋助が難いだ剣は空を切っている。今、晋助は隙だらけ。上から一突きにすればそれで終わりだ。紫苑が刀を構える。

これで、終わる。

殺せ、殺せ…!!

けど…

——本当ニ、ソレデイイノ？

(……ッ!!)

刀を構えた刹那、紫苑の脳裏を過ぎったのは…

『おい、紫苑…考え直せや。こんなチャランポランのどこがいいん

だ？天パだぜエ？』

『こらアアア！！晋助！！テメエ、天パは余計じゃああああ！！』

『あ、怒るところはそこなんだ…』

『アツハハハ！！げにまっこと、銀時は面白いのう！！』

『自分がチャランポランと言われて否定しないという事は、認めているということか…』

『おい、紫苑…今からでも遅くねエ。コイツにお前の将来を預けるのかと思うと……幸先不安すぎて眠れやしねエ…』

『そして晋助は心配性じゃき…！！人は見かけによらんっちゅーが…おまんら、これがよか例やとは思わんかえ？』

『確かに…』

『兄さん、遠回しにシスコンって言われてるよ？』

『テメエら、よっぽど死にてえらしいなア…！！』

『ギャアアアア！！！！晋ちゃんタンマ！！何で怒りの矛先が俺エエエエ！？』

『そこにテメエが居たからだ、このクソ天パ！！』

『八つ当たりすんな、低杉イイイ！！！！』

(な、んで…！！何で…何でっ…！！！)

『ねえ、攘夷戦争が終わったら…私達は何して暮らす？』

『そうさなア…、全員で一緒に暮らすかア？』

『はあ？冗談！！俺は紫苑と2人で暮らす！！もう決めてるしいく？』

『ワシヤ宇宙に行くぜよ！！』

『お前は相変わらずだな、辰馬。……そうだな俺は……まあ、好きなように生きるさ』

『んだよ、結局全員バラバラになるんじゃないやねえか…。まあ、俺は絶

対に紫苑と2人暮らし希望だけどなっ!!!」

『フツッ：それも楽しそうだねえ：!!! あ、いいこと思いついた！私達の故郷!!! 寺子屋は焼けちゃったけど：桜の木が1本残ってたでしょ？ 戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時はその桜の木の下で、宴会しようよ!!!』

『マジでか？いや、あんま騒ぐと先生にうるせえって怒られるぜ？』

『他ならぬ先生だ、その時ぐらい大目に見てくれるだろうさ』

『桜の木の下で宴か：。確かに、悪かねエ：。それが夜の月見酒ならもつとオツだなア：』

『ほりゃあ楽しみじゃ!!! くら、簡単に死ぬわけにゃいかんぜよ!!!』

——じゃあ、約束だよ：？死んだら仲間はずれだからね：!!!

(今更ッ：!!!)

楽しそうに騒ぐ仲間達と、優しく笑う晋助^{あに}の姿。

(もう、あの頃の晋助^{あに}と今の晋助^{コイツ}は：違うのよッ：!!!)

必死に否定しようと刀を振り下ろすが：

(何でっ：動かないのよっ：!!!)

紫苑の腕はカタカタと振るえ、微動だにしなかった。

「……紫苑のリズムが狂ったでござる……」

ポツリと呟いた河上の言葉に、武市と来島が「え？」と一瞬視線を

外す。河上の方に視線を向けたそのホンの数秒の間。

その数秒の間に…

「オイオイ…考え事たア、余裕じゃねえか……。なあ、紫苑…？」

——ズシャツ…！！

「余所見してつと、はらわた…引き摺り出すぜエ…？」

僅かに乱れた紫苑の動きから隙を突いて、体勢を整えなおした晋助が紫苑の脇腹に刃を突き立てた。反射的に紫苑も体を捻らせたが完全にタイミングが遅れる。

「ガハッ…！！！」

深く抉られた脇腹からは血飛沫が飛び、口内には鉄の味が広がった。そのまま、ドシヤリと紫苑は地面に叩きつけられ、紫苑が蹲るそこにはじわじわと赤が広がり、血溜まりができる。少し離れたところに居た晋助は、ゆっくりゆっくり紫苑に近づく。刀を構え、ニヤリと笑いながら。

（このままじゃ…殺される…！！立たなきゃ…！！立って戦わなきゃ…！！）

しかし、さっきのことで紫苑ははっきりと分かった。

どんなに憎んでも、どんなに…今と昔では違うと言い聞かせても…

やはり、兄は兄であり…晋助を殺す事など…出来はしないのだと。

「悔しいか？ テメエで仕掛けた戦いくさに負けて…」

容赦なくドカッと足で体を蹴られ、強制的に仰向けにされる。目に映るは、闘技場の天井と自分を見下す晋助の姿。そして…

目の前に突き立てられる、晋助の刀の切っ先。

赤く染まったそれは、ライトに照らされ不気味な色をかもし出す。

ああ…もう、死ぬんだ…

そう思ったとき、フワリと…紫苑の表情が緩み…微笑む。

「……何故笑う…？」

感情の欠片もない声で晋助が聞けば…

「分からない……、けど……やっぱり、これでよかったんだって…」

紫苑はそう答えた。

「……死ぬ事が出来て満足か？」

何故今更そんなことを、と…晋助の表情が訝しげに歪む。そんな晋助の表情を視界にとらえてゆっくりと首を横に振った。

「兄さんを殺すなんて…やっぱり、私には出来ない…」

例え昔と違ってしまっても。

もうあの時のように微笑んでくれなくても。

それでも…

「コタローにも、辰馬にも、銀時にも…もう会えないけど…」

その刃の切っ先を見つめながら…

「兄さんの手に掛けて死ぬならば…いいかも、しれないなあ…」

穏やかに微笑んだ。

そんな紫苑を見て、小さく晋助は舌打ちをする。

（…何だっぺんだ…、何で…テメエはそんなに…真っすぐであり続けられる？何で、俺の色に染まらねエ？何で…ッ…！！）

『にーさん！！出陣するよー！！置いていくよー！！』

『バーカ、お前が先に行っても迷子になるだけだ』

『あーっ！！さりげなく方向音痴に仕立て上げたな！？』

『…ヅラと共に離（やりかた現在の南）の方角へ向かえと言ったのに、真逆に進軍していたのはどこの大将だったか…』

『わーっわーっ！！それまだ引きずる！？もうその話は忘れようよ！！』

『ヅラが大変だったってへばってたなア…』

『うっわ…その笑い方ホントに、ムカつく…！！』

『お前も似たような笑い方だ』

『イヤーッ!! 私、こんなドSスマイルしてたの!? イヤーッ!!』
『お前は俺をなんだと思ってやがるんだ…』

晋助の脳裏を過ぎったのは、攘夷戦争中に交わした他愛ない兄妹きょうだいの会話。当たり前のように笑っていた妹と、そんな妹のコロコロと変わる表情を面白可笑しく見つめていた自分。

そして思い出したのは…

紫苑と戦場で離れ離れになってしまったときの絶望。

銀時と背中合わせに涙を流したあの日の虚無感。

今…自分は何をしようとしている？

この刃を向けて、自分は今、何をしようとしている？

折角出会えた唯一いもつとの家族に刃を向けて何をしようとしている？

——自ラ、マタアノ虚無ヲ生ミ出ソウトシテイル……？

(……何やってんだ、俺ア……)

自覚はあった。

最初に再会した時は素直に嬉しかったはずなのに、

次第に紫苑が、以前のように笑わなくなっていく姿を見て…苛立ちを覚えていた事くらい。

いつしか自分を見る紫苑の目が変わったことに、気付いていながら気付かないフリをしていた事くらい。

そして…

いつか絶対に、紫苑がこんな事を起こす事くらい。

手に取るように分かっていた。

しかし、必死にあがき、そうではないと…違うのだと、晋助は己に言い聞かせてきた。

その結果が…

(…笑えねエ…)

ギリッと歯を食いしぼる。

目の前に横たわる傷付いた妹は、“晋助に殺されるならそれでいい”と微笑った。

その笑顔がずっと…ずっと見たかった。

やっと取り戻したのに…

何故、自分が刃を向けた時にその笑顔を見せる？
何故、死の間際にその笑顔を見せる？

あるいは自分ではなく、他の誰かの前だったら…

紫苑はその笑顔に向けていたのだろうか？

例えば、同じ鬼兵隊の来島であつたら？

例えば、共に攘夷戦争で戦った桂や坂本であつたら？

例えば…恋人だった銀時であつたら？

では何故、紫苑はその笑みを己に向けなくなった？

昔はあんなに笑ってくれていたはずなのに。久々に再会した時は戸惑いながらも笑ってくれていたはずなのに。

いつから、彼女は笑わなくなった？

（ああ…そうか…）

紫苑が笑わなくなった理由。それをようやく…晋助は理解した。

（オメエから笑顔を奪ったのは…俺か…）

——私はこの“鬼兵隊”を…“鬼兵隊”だとは認めない。今のアンタを、兄とも思わない…

（オメエの居た鬼兵隊はあの頃の鬼兵隊であり、そしてオメエの兄
おれはあの頃の俺ってことか…）

紫苑から笑みが消えていったのは、思えば自分が銀時の情報を一切与えなかったあの日からだったような気がする。そして日に日に、“今の鬼兵隊から消えたい”と望むような目で自分を見つめるようになっていった。

もしあの時、何か少しでも銀時に関することを教えていれば？生存しているという事実だけでも知らせていれば？

あるいは、この状況も変わっていたのだろうか？

しかしそれももう、すべては過ぎてしまった事。

時間は巻き戻せないし、言葉を取り消す事も叶わない。

（結局、俺ア：オメエを救ったつもりでただけで、オメエを苦しめていただけだったって事か…）

鬼兵隊副官というポジションに紫苑を置き、鬼兵隊を完全復活させることで自分の野望を果たそうとしていた。それと同時に副官である紫苑は本陣に残ってもらい、本陣の守りを固めるという理由で紫苑自身をも護っていた。いや、護ったつもりでいた。

しかしそのどれもが：紫苑を苦しめていたに過ぎないのだ。

そしてその結果が、鬼兵隊の脱退。

そして、この現状。

晋助^{あに}の刃により傷付き、倒れた紫苑^{いもつと}の姿。

(……ククッ、本当に……変わったのは俺の方だったってことか……)

微笑む紫苑の姿を捉えながら、晋助は口元に弧を描く。しかしそれは、いつものニヒルな笑みではなく……

「に……い、さん……？」

どこか……寂しげな笑み。

「……動きが止まりましたね……」

「ふむ、晋助のリズムも変わったでござる。まるで弦の切れたギターのようにござるな……」

「また分かりづらい例えッスね……」

急に静まり返った闘技場内に、見ていた者達が困惑するようにざわめく。と同時に、幹部達もまた何が起きたのかと中央の2人を凝視していた。幹部達がいる位置からだ、晋助は背中を向けている……どんなやり取りがされているのか、それを知ることが出来ない。

ただ……

(らしくも無い……。今の晋助から感じるのは“戸惑い”と“悲しみ”でござる……。見事に先程のリズムから狂ってしまった。一度狂ったリズムをさっきまで奏でていたリズムに戻すことも出来ず……さ迷っているでござる。さて、晋助よ……。この迷子になってしまったリズム、お主はどうやって奏でなおすか……見物でござるな……)

河上だけが冷静に見つめていた。

「…………おい…」

「え…？」

晋助は静かに呟く。決して、誰にも聞こえないように…紫苑にのみ聞こえるように。紫苑は驚いたように晋助の瞳を見つめる。

その瞳は…どこか悲しげで、しかし紫苑の良く知るあの頃の兄の瞳。

「まだ…動けるか？」

「…………何を、言ってる…？」

殺されると思っていた紫苑に、明らかな戸惑い^いが生まれる。何故急に、晋助はこんなことを問うてきたのだろうか？否、何故このよう^いな…昔を思い出させるような瞳をしているのだろうか？

まだ何か…考えているのだろうか？

更に自分をどん底まで叩き落す打算でもしているのだろうか？

晋助を信じたいという気持ちと、もう優しかった兄は死んだのだという葛藤からか…紫苑はただ戸惑うだけだった。そんな紫苑に晋助は再度問う。

「まだ、動けるかって聞いてんだ…。答えろ」

静かな言葉ではあったが、先程までにじみ出していた冷たさや殺気などは全く感じない。それは、攘夷戦争の時の…

『紫苑!! まだ動けるか!? 答えろ!!』

『何とか動けるけどっ……!!』

『だったら、怪我した奴らを連れて一度ここから離れろ!! このままじゃ圧倒的に不利だ!!』

『了解!!』

傷付いた仲間を逃がすときの言葉の響きと酷似していた。

どう…答えればいいのか分からない。ついさっきまで、晋助は紫苑を殺す気で斬りかかってきていたのだ。それが突然、何でこんな状態になってしまったのか…。しかし晋助の瞳は真剣そのもので…絶対の答えを求めている。

(……動けるかですって? 無理に決まってるじゃない。こんなに斬られて、体力も限界で…。けど……)

ギュッと紫苑は自分の刀を握りなおし、フラつく足取りで、何とか立ち上がる。動くたびにビチャビチャと…斬られた横腹からどす黒い赤が零れ落ちたが、紫苑はそれに気付かぬフリをした。そして…

「言った、はず…だ…。私、は……鬼兵隊を、抜ける……!! それまで、この、歩みは…決して、止めない……!!」

強い瞳で、晋助のそれを見つめる。それを受け、フツと晋助は微笑わらった。いつものニヒルな笑みとは違う…優しい笑みに、一瞬紫苑は目を見開く。しかし次の瞬間には、さっきのそれは嘘のような…いつもの姿に戻っており、ククツと喉を鳴らして笑っていた。

(私の見間違いない? 違う…、確かに兄さんは…)

一体、晋助は何がしたいのだろうか？まだ動けるかと聞いてみたり、突然微笑んだり…。紫苑の思考が完全に乱れる。

殺した筈の思いが…“昔の兄に戻ってくれるかもしれない”という希望が…再び沸き起こりそうになる。

手を伸ばせば、届くのではないかとさえ思えてしまう。

しかし、そんな紫苑の思いは…

「興が削がれた。それに…そんな状態になってまで立ち上がるたア、やっぱり手放すのは惜しいなア…」

簡単に碎け散る。

いつもと同じ笑みで、同じ口調で、同じ声色でそう言っているのは紛れも無く晋助だ。

しかし…何か矛盾しているような気がした。

（だって…兄さんが、動けるかって…聞いて…っ…!!）

だからこそ、紫苑は立ち上がった。どこかで兄が逃がしてくれるのではないかと、そう思っていたのかもしれない。

それ程までに、さっきの響きはとても懐かしく紫苑の良く知るそれだったのだ。

だが、次の瞬間、晋助の口から零れた言葉は…

「……けど、そういうことなんだろうぜ？だってほら、晋助様はそう仰った…」

「だったら…」

周りの困惑が、殺気に変わる。それに気付かぬほど、紫苑も鈍くはない。刹那、四方から銃弾が飛んできた。それを最小限の動きでかわすが、そのたびに晋助に斬られた脇腹が傷む。

しかし…

「ククッ…アハハハッ…！！！！殺れるものならやってみろ…！！死にたい奴からかかって来い！！相手をしてやらア！！」

そんな殺気をねじ伏せるほどの凄まじい威圧と殺気を叩きつける。騒がしくなった闘技場が一瞬静かになったが、それもまた怒号にかき消され流れ込むように闘技場に鬼兵隊員達が迫ってくる。それぞれの武器を片手に紫苑を追い詰めようとしている事は明白だった。

（幹部はどう動く…？）

襲い来る隊員達を斬りながら、チラリと幹部達3人が座っていた場所に視線を向ける。しかし、既にそこには幹部達の姿は無かった。

（…万斉と武市は間違いなく私を止めに来るだろう。どっちかという上万斉が厄介だな。戦い方が分からん…。そもそも、奴の戦っている姿など見たことが無い。そして…）

脳裏を過ぎるのは、鬼兵隊脱退を申し出る前に別れの言葉を交わした来島の姿。

（…また子がどう出るか…それが分からない…）

退路を確保しつつ、闘技場を駆け出す紫苑。それに続くように追いかけてくる隊員達を振り向きざまに斬りつけながら、来島のことをぼんやりと考えていた。

【第六訓】 追憶　　ゝ決別ゝ（後書き）

途中で切っちゃったから、なんか凄く中途半端な終わり方ですね
^; ホント何から何までグダグダですみません or z

【第七訓】追憶　く鬼の目にも涙く（前書き）

追憶編もとうとう終盤に差し掛かってきました！！そしてこのタイトル！！もう分かりやす過ぎて：凹みそうorz（笑）誰か私に、
ナイスなタイトルセンスを下さい：！！（無理すぎるww）

【第七訓】追憶　く鬼の目にも涙く

「どうしたでござるか？ 晋助…お主らしくも無い…」

「万斉か」

一方、闘技場が騒がしくなった頃。自室へと足を運んでいた晋助を呼び止めたのは河上だった。そう…晋助の乱れた感情に違和感を覚ええたのだ。

「拙者、終盤よりお主のリズムが乱れた事には気付いていたでござる」

「流石だな。んなもんに気付くのはオメエぐらいのもんだろうよ…」

ククツと喉を鳴らし笑う晋助に、なおも河上は続ける。

「お主であれば乱れたリズムから再び新たなリズムを作り出すことも、また乱れたリズムを立て直す事も可能であるはず。何故、あの状況で退いたのか…それが気になったでござる」

遠回しな河上の言い方に、いつに無く晋助はイライラしていた。それは河上も感じ取っていたのか、いつ晋助が斬りかかってきてもいいように、一見は無防備に見えるがそれなりの構えはとっている。

「言いてエことがあるならはつきり言えや。俺ア、回りくどく言われるのは好きじゃねエ…」

「ならば単刀直入に申そう。お主、わざと紫苑を逃がしたのでは…？」

河上が言い終えるか否かの間際。

——ガキイイイイン！！！！

刀と刀のぶつかる音が通路に木霊する。凄まじい殺気と共に晋助が河上に向けて刃を振り翳すが、それを寸前で受け止めたのだ。

(…ッ、流石に今のはヤバかったでござるな…)

一瞬でも気を抜いていたら、間違いなく真つ二つになっていただろう。それ程までに凄まじい一太刀だったのだ。

「テメエが何を勘違いしてるかは知らねえが、俺アただ殺し合いに飽きたから引き上げただけだ。アレをわざと逃がしただア？んな得にもならねえ事をして何になる？俺ア、ただ…」

ぶつけていた刀を鞘に収め、いつもの冷たい笑みを浮かべながら…

「いっそ殺してくれと…こんな仕打ちを受けるぐらいならまた副官にしてくれと…、俺に懇願してくるアイツの顔が見てみたくなっただけだ」

そう言った。その目はいつもと同じ、ギラギラとした獲物を狩る瞳^め。河上が知る、鬼兵隊隊長・高杉 晋助の瞳だ。

「そうでござったか。それは失礼致した…」

叩き付けられていた殺気が無くなったことを確認し、河上も刀を三味線の中へとしまう。そして、踵^{かかと}を返して晋助の元から去っていく

た。

「お主らの戦いを見ていたら、拙者も一手交えてみたくなったでござる。晋助よ、紫苑は残念ながら生きては戻らぬが…よいでござるな？」

「好きにしろ」

去り際に確認の意味を込めて聞くが、結局最後まで…晋助の思惑が河上に分かる事はなかった。

「やれやれ、どんなリズムを奏でてくれるかと期待していたら…とんだ茶番でござった。ここからは拙者の独奏^{ソロ}となりそうでござるな…」

船内から聞こえてくる船員達の叫び声と怒号を聞きながら、河上はクツと口角を吊り上げる。

「これは楽しみでござる…」

怪しげな笑みを浮かべ、その姿は戦場と化した通路へと消えていった。

一方、晋助は自室に入るなり目に飛び込んでいたその姿を一瞥した。部屋の前で河上と話していたときから、誰かが自室に居る事は分かっていた。

「何をしている、来島ア…。オメエも紫苑を追いかけてねえか。幹部は全員処刑者を追いかけるのが仕事だぜエ？」

そこにいたのは来島だった。本来であれば晋助の言う通り、幹部は全員参加となるこの処刑。しかし、来島はその処刑に参加することなく…晋助の前にいる。黙ったまま、俯いたまま何も言わない来島に痺れを切らし、晋助は小さく舌打ちをする。

「オメエも紫苑と一緒に鬼兵隊を抜けるってかア？」

「ッ！？ち、違いますッ！！そ、そんなじゃないッス！！私は…ッ…！！！」

来島は後ろに隠していた救急箱をバツと前に差し出した。一瞬、撃たれるのではと思った晋助だったが予想外の事に呆ける。

「怪我…。特に首の怪我は放って置いたら致命傷になるッス。なので、その…私なんかで宜しければ手当てを…」

モゴモゴと口籠る来島。いつもであれば、そんなことはいいから仕事を全うしろと追い出すところだ。来島も当然、そうなるだろうと思っていた。

だが…

「アア、流石にこのままじゃアイツの言った通り失血死しちまいそうだ。来島ア、頼む…」

「は、はいッ！！！」

予想に反して、晋助は来島の言葉をすんなりと受け入れた。

（よかった…！！私が紫苑を討ちたくないからここに來たってことはバレてない…！！）

手当てはもちろん理由の1つではあったが、やはりどうしても…来島に紫苑を討つことなど出来なかった。しかし幹部は強制的に処刑に加わらなくてはならない。それを承知の上で尚且つ上手くそれに参加しなくてもいい正当な理由。それを考えた時に思いついたのが、“傷付いた晋助の手当て”だったのだ。晋助の手当てができ、そして紫苑と戦わなくて済む。来島にとってはある意味、一石二鳥だったのだ。

だが…

（うまく言い逃れたつもりでいやがるな、コイツは…）

そんな来島の思惑も、晋助はもちろん気付いていた。

だが…

「手間ア掛けさせてワリイな」

「とんでもないツス!!」

それを追求する事も、咎める事もしなかった。

（来島は唯一、紫苑が慕っていた幹部であり、来島もそんな紫苑を慕っていた。そりゃ辛エだろうよ。自分が慕っていた奴を手に掛けるのは…。どっちもなァ…）

晋助が紫苑と戦っていた時に垣間見た紫苑の表情。確かに、“殺す”と口では強く言ってはいたが…その表情はどこか辛そうにも見えた。自分も…そんな表情かおをしていたのだろうか…？

当然だ。家族同士で斬り合っているのだから。

そんな思いをもう、紫苑にはさせたくない。

少なくとも、唯一今の鬼兵隊で心を許す事の出来た来島くらいは、最後まで紫苑の味方でもいいのでは？

それが…晋助の下した判断だった。

（俺も…まだまだ甘エな…）

自嘲に歪む口元は、来島の位置からは見えなかったらしく来島も気付いていない。

騒がしい船内。

あちこちから隊員達の声や銃声、はたまた砲撃音にも近い音が聞こえてくる。

「ククッ…派手にやってやがる…」

「えっと、武市先輩と河上先輩は…？」

控えめな来島の問いに、晋助は口を開く。

「武市は知らねエ。だが、万斉は動いた。野郎が動いたってこたア…紫苑もしめえだな…」

晋助の言葉に思わず来島の手が止まる。

しかし晋助はそれに気付かないフリをした。

そして：

「しかし、紫苑も強エ。手負いだが、奴はそれでも己の道を切り開くと決めたらどんな状態でも己の意志を貫く女だ。ククッ、結果が楽しみだなア、おい…」

そう言いながら、窓の外のを眺める。今宵は綺麗な満月だった。

「……かぐや姫は満月の夜に月に帰る、か……。もつとも、奴に帰る場所なんざありやしねえが…」

「……晋助様？」

「いや、なんでもねエ…」

煙管キセルに火を点け吹かしながら…満月を眺め、小さく微笑わらう。

それは、来島が今まで見てきた中で一番優しく、そして一番綺麗な姿だった。

「こんな…満月の夜だったなア、あの夜も…」

ふと漏らした晋助の言葉に、目の前でバクバクと白米に食らい付いていた青年は手を止め、コテンと首を傾げる。

「んん？何が？」

「…いやア？数年前…俺の手元から妹が逃げて行った日も、こんな

満月の夜だったなと：そう思っただけだ」

「ヘエ、タカスギにも妹がいるんだねえ！！その子、強いのか？」

白米から晋助の話に興味に移った青年：春雨第七師団団長であり夜兎族の神威はズイツと晋助に顔を近づけて問う。夜兎の本能からか、強い者に目が無い神威は純粹に興味を抱いたのだ。晋助の強さは知っている。その妹となればやはり強いだろう。

問われて、晋助はクツと口角を吊り上げる。

「アア、強い女だった：」

自信に満ちたその目からは、自分の妹の強さを自慢しているようにも見えた。それに思わず神威は声を殺して笑う。

「なんだかそういうの、嫌がる人かと思ってたけど：アンタも人間だね！！やっぱり血の繋がった妹は可愛いつてわけだ？」

「さあ、どうだろうなア？」

クイツと酒を流し込みながら、月を肴さかなに晩酌をする。あの夜と比べれば、今日は何と静かな夜だろうかと：そう思ってしまうくらいだ。

「けど、当然：鬼兵隊こへいだいにはいないんだよね？逃げたって言ってたし？それらしい女こも居ないし。まさか、あの金髪この女が妹さんとか言わないよね？」

「んなわけねえだろ。アイツは：紫苑は鬼兵隊から抜けた。生きてるのか、死んじまったのか：それすら分かりやしねエ」

「へえ？自分の妹なのに気にならないんだ？流石は血も涙もない“鬼のタカスギ”だね♪春雨の天人達はみーんなそう言ってタカスギの事を恐れているよ？」

「ククッ、そうかい…」

再び白米に手をつけ始めた神威を呆れたように眺めていたが、ふと晋助はあることを思い出す。それは、万事屋を営む銀時の傍に居た従業員の姿。紅桜の時に単身、晋助の乗り込んできたチャイナ服を着た少女…。その少女と神威の繋がり、晋助は知っている。

「神威、オメエにも妹がいるだろうよ。しかも地球にいて居場所も分かってんだ。兄妹きょうだいなんだろうオ？オメエこそ会いてえとは思わねえのか？」

素朴な疑問、だが真面目な質問ではない事は晋助の表情を見てすぐに分かった。その表情は、いつもの怪しい笑みだ。

「んー？俺は興味ないよ。だってアイツ…あ、タカスギは知ってるんだっけ…妹のこと。…神楽は弱いからね。俺は強い奴にしか興味が無いから。まあ、神楽もちょっとは強くなったみたいだけど…俺の血の渴きを満たしてくれるような強さではないね」

「そーかい。そりやまた、血に忠実なこった…」

ククッと笑いながら煙管キセルを吹かし、再び月を眺める。

例え強くても弱くても…晋助にとって、紫苑が妹であることに変わりはない。

見事、“鬼兵隊から脱退”を果たした紫苑のその後は、分からぬまま。

一部情報では、真選組に囚われたという情報も入ったが…晋助が動

く事はなかった。

事実かどうか分からなかったということも理由の1つにあったが……もう彼女を“鬼兵隊”という鎖で縛りたくはないと、そう思ったからだ。

ただ自由に生きて欲しいと、そう思ったからだ。

生きていれば、どこかで銀時と再会することもあるだろう。何せ銀時は、ここ最近騒ぎばかり起こしている。目立たないはずがないのだ。銀時と再会し、共に時間を過ごす。それが紫苑の幸せならば、それでいいと……そう晋助は結論付けた。

あの事件の後……全くといっていいほど紫苑の情報は入らなくなり……いつしか、誰も紫苑の名を口にすることはなくなった。

もう、誰の中にも紫苑という人物は存在していないのかもしれない。

ただ、晋助のみが……いまだ忘れられず、満月を見るたびに思い出しているのかもしれない。

「ねえ、タカスギ？もし、タカスギの妹さんに会ったら……戦ってもいいかな？タカスギの妹ってことは“侍”なんだよね？」

「アア？……好きにすりゃあいい。ただ……」

クツと口角を吊り上げ、猪口の酒をクイツと喉に流し込みながら呟く。

「アイツは……紫苑は強いぜエ？オメエでも手が付けられねえかもし

れねえ程になア…」

「アハッ！！そでこそ殺^やりがあるってもんじゃないの♪へえ、女の子なのにそんなに強いなんて…！！ホント、神楽とは大違いだ…！！」

楽しげに笑う神威を一瞥し、小さく溜息を吐いて空になった猪口に酒を注ぐ。

「本当に、強い女だったよ…最後の最後まで…」

ボソリと呟いた晋助の言葉は神威の耳に届く事は無く、ドタドタという騒がしい足音にかき消された。

「団長オオオオ…！！こんな所にいたのか、探したぜ！！」

「あれえ？ 阿伏兎じゃないか。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃねえよ、このすつとこどっこいが！！ったく…！！あー、うちの団長が失礼しました…」

「ククッ、なあに気にしちゃいねエ。オメエもどうだ？」

スツと猪口を差し出すが、阿伏兎と呼ばれた神威の補佐官はそれをやんわりと断る。

「いや、そりゃありがたいんだが、また別の機会についてことでいいですかい？ ちよいとこちらも、春雨関係の仕事がありましてね。おら、団長！！行くぜ！！」

「えー、俺も居なきゃ駄目なの？ 仕方ないなあ。じゃあ…ご飯ご馳走さま！！おいしかったよ！！またね、タカスギ♪」

「アア…」

グチグチと文句を言う阿伏兎と、それを聞いているのか聞いていな

いのか分からない笑顔で隣を歩く神威。

そんな2人の姿をぼんやりと眺めていたが、部屋から居なくなると再び晋助は外に視線を向ける。

「今ならオメエの気持ちが痛エほど分からア…」

——兄さん、銀時…ッ、銀時は…生きているの？

あの時、必死になって銀時の安否を確認してきた紫苑の姿が脳裏を掠める。

「紫苑……、オメエは……」

生きているのか？

そう、問おうとした言葉は…

——PPP…PPP…

「何だア？」

けたたましくなる携帯の呼び出し音によって遮られた。

やれやれと溜息を吐きながら携帯を開く。

電話の相手は：

「おいおい、何の冗談だこりゃア…」

袂^{たもと}を別^{わか}った筈のかつての同志であり、妹が心の底から愛していた男の名前だった。

「銀時に番号を教えた覚えは…」

そこまで考え、チツと小さく舌打ちをする。攘夷戦争で共に戦った仲間全員の番号を知る人物が唯一1人だけ居た。

「辰馬の野郎か…。俺の携帯にまで細工しやがって…」

暫く、その電話に出るか否か悩んだが：

何故か：

「よお、銀時ィ…。袂^{たもと}を別^{わか}ったはずのテメエが、俺に何の用だ…？」

その電話には、出なければならぬと晋助の本能が…そう警鐘を鳴らしていた。

そして、電話口の向こうから聞こえてきたその声と言葉に驚愕する。

アア…本当にどうして、こんな方法でしか俺達は会えねえんだろうなア…

それから…暫く通話は続き、「じゃあ、考えといってくれ…」という銀時の言葉で電話は切れた。

通話を終え、頭を抱えて肩を震わせる。

「クククッ…」

口元は笑っていたが…

「……ッ、本当に…俺もただの、人の子ってか…ッ…」

右目からはパタパタと、雫が零れ落ちていた。

銀時からの電話は…

妹である紫苑が生きていたという知らせであり、その命の灯火が消えつつあるという事実だった。

「今更、どんな面^{ツラ}して会いに行けってんだ…ッ…」

悲しげな問いに対する返事は、誰からも返って来ることはなく…

「…けど…“約束”だったからなア…」

晋助は猪口に残っていた酒を流し込むと、そのまま横になって天を仰いだ。

相変わらず窓から見えるのは大きな満月。

「桜の木の下で月見酒……。頃合じゃねエか……」

流れ落ちる涙を隠すように目元を腕で覆いながら笑う。

しかしその笑みはいつもの冷たい笑みとは違う……

とても、優しいものだった。

【第七訓】追憶　く鬼の目にも涙く（後書き）

はい、本当は登場の予定はなかったんですが…神威と阿伏兔を登場させました（笑）とっさの思い付きです、はい！！

さて、ついに次回で追憶編終了です！！次回はVS河上万齐編！！そしてそこから、幼馴染&兄妹&真選組がどう動くか…！！というのを本当はメインで書きたかったんだよ！！なのになんか追憶編がメインみたいになっちゃった！？…要修行orz（苦笑）

そろそろ、龍と夜叉もUPしたいなあ…！！

【第八訓】追憶　く逃走、そして今く（前書き）

はい、追憶編最後になります！！今回はバトルシーンが入ります！
！バトルシーンって書いてて楽しいんですね♪下手ですが^^；

前回の予告通り、紫苑vs万斉の戦いです！！そして、この話より
また時間軸は“今”に戻ります……！！

【第八訓】追憶　　ゝ逃走、そして今ゝ

「追えッ！！出口の方に向かったぞ！！」

「絶対に船内から出すな！！」

闘技場で行われた、晋助と紫苑の戦いは晋助が放棄するという形で幕を閉じ、晋助の一言で紫苑の命は鬼兵隊員達に委ねられた。自分の手柄にしようと、次々に紫苑を襲ってくるが、紫苑はそれらを全て一撃で沈める。といっても、ただ動けなくしているだけで命までは奪っていない。いや、今の紫苑に敵の生死を確認するほどの余裕は無かった。

（は、やく……！！船の、外に出なくては……ッ……！！）

晋助との戦いで消耗しきった体力に加えて、晋助によって負わされた脇腹の深い傷。歩くたびに脇腹からは見るに耐えない程の血液が流れ落ちている。しかし紫苑は、それでも決して歩みを止める事はしなかった。

（幹部が、来る前に……！！せめて、船の、外に……！！）

来島と武市の強さがどれほどからは分からないが、危険なのはその2人ではない。もっとも危険で、尚且つ戦い方の検討が付かない河上が紫苑にとっては一番の不安要素であり、一番敵視するべき対象なのだ。

「逃がすな……！！追え……！！」

「……ッ、邪魔だアアアア……！！」

追ってきた数人の隊員達を一太刀で一気に薙ぎ払えば、続いて追ってきた者達はその気迫に尻込みする。向けられた鋭い瞳と殺気に「ヒッ」と誰もが息を呑んだ。

「……死にたい奴から掛かってきな。お望み通り…殺してやらア…」
手負いで、立っているのもやっとなのはずなのに。

しかし目の前にいる女は何だ？

倒れるどころか、凄まじい殺気を叩き付け、その場に居る者達の戦意を消失させる。

目はギラギラと輝いており、その視線だけで射殺されてしまいそうだ。

「ヒイイイ!!」

「俺達には無理だ!!」

「こ、こら!! お待ちなさい!! 晋助様の命に逆らうおつもりですか!？」

「命が惜しい!! 俺はまだ死にたくないッ!!」

逃げ惑う隊員達を慌てて叱責する声。それは、幹部の1人である武市の声だった。

（チッ…!! 近くに武市が居るな。これはもう構わず走り抜けるか…）

果敢に立ち向かってきた隊員の1人を斬り伏せて、傷む脇腹を押さえながら駆け出す紫苑。それを視界に捉えた武市は慌てて叫んだ。

「紫苑さんが逃げますよ！！早く捉えなさい！！」

「む、無理ですよ！！晋助様が互角に戦っていたお方です！！俺達が敵うわけじゃないじゃないッスか！！」

武市の焦りをよそに、部下達はほとんど紫苑から距離をとり始める。追うどころか、背中を向けて逃げ出すものまで現れる始末だ。どんなに武市が追えと言っても、紫苑の殺気に当てられた者達は完全に戦意喪失していた。酷い者は気絶している。かと言って、武市自身が紫苑と刃を交えるのかというところ：そういうわけでもないらしい。あくまで武市は部下達に指示を出しているだけだ。

（貴方達に言われずとも：紫苑さん相手に三下程度が敵わないことぐらい百も承知ですよ。しかし建前上、みすみす逃したとなれば晋助様に言い訳が出来なくなるでしょうが：！！）

武市は一通りの剣術は身に付けているが、それは自分の部下達と変わらないレベルの腕だ。武市が幹部の座にいる理由は、謀略家としての知能の高さ故。来島や河上が腕を買われたというのであれば、もっぱら武市はその頭脳を買われたといっても過言ではないだろう。実際、武市の繰り出す策略はどれも晋助を満足させるものであった。

だが、今回の事は完全に計算外であり：流石の武市も、予想をはるかに超えたこの状況を収拾できる作戦は持ち合わせていない。咄嗟の機転で部下達を船唯一の出入り口に配置したが、それも結局は無駄に終わった。

「やれやれ：本当に紫苑さんは敵に回すと恐ろしい：」

今までは鬼兵隊の一員だったからこそ、安心して傍に居る事が出来

た。しかしそれが敵となれば話は別だ。武市の額に汗が流れる。

「美人でお強い…。本当に魅力的なお方だったんですけどねえ…」

ここに来島がいたら「変態も大概にしろ」とツツコミが飛んだことだろう。しかし、武市は紫苑が消えていった出入り口を眺めながらポツリと漏らす。

「……貴方が私達をどう思っていたかは分かりませんが、少なくとも…私は貴方を“仲間”だと…そう思っていたのですよ？」

消えてしまったその背中に、もはや武市の言葉は届かないだろう。あるいは、この言葉がもっと早くに紫苑に届いていれば…こんなことにはならなかったのかもしれない。

言うべきことはもっと早くに言うべきだったのかもしれない。

いつものポーカーフエイスの下で、そんな事を思いながら深々と溜息を吐く。すると、背後から気配を感じた。紫苑が居なくなってしまった今、背後に誰かがいるとすればそれは敵ではなく同じ鬼兵隊のメンバーだ。武市は態々振り返ることはしなかった。

「武市殿、紫苑はどこでござるか？」

「ああ、貴方だったのですね」と漏らし、スツと武市は出口を指差す。

「紫苑さんならあの先ですよ」

「目の前に敵を捉えながら、みすみす逃がしたでござるか？」

突き刺さるような河上の言葉に、相変わらずのポーカーフェイスで武市も言葉を返す。

「あまり良い響きではありませんね、それは。私の力では紫苑さんに敵わないと判断した為、追うのをやめたのです。自ら命を投げ捨てる必要もないでしょう。部下達も：見事に紫苑さんの殺気に当てられて逃げ出しましたよ。中には気絶する者もいましたねえ：」

河上が一瞥すると、そこには紫苑が斬り捨てたであろう鬼兵隊の者達の亡骸や、深手を負っている者達、もしくは武市の言った通り気絶しているだけの者達。

「なるほど、三下の手には負えぬというわけでござるな」

「そういうことですよ。私も剣の腕前は全くですからね」

随分前：まだ紫苑が鬼兵隊の副官として勤めを果たしていた時、一度だけ紫苑に「武市と剣を交えてみたい」と言われたことがあった。しかし武市はそれを必死に誤魔化して逃げたのだ。あの晋助の妹で、しかも“紫怨しおんの鬼”と恐れられた彼女に自分が敵うはずがない。例え、練習試合でも命を落としてそうだと：それを恐れて。それから紫苑が武市に剣を交えたいと言ってくる事は無かったが：その時の判断は正しかったと、今更ながらに思う。

「では、拙者が紫苑と手合わせしても問題はないでござるな」

「：もちろん、異存はありませんよ。しかし、殺してしまうのはいかななものか：。お美しく、そしてお強い。そんな方を失うのは、私としては惜しいと思いますが：」

「確かに、紫苑の力は晋助のそれと対等で本当に強いでござる。故に：」

スツと河上は三味線から刀を抜き、出口に向かって歩き出す。

「再び鬼兵隊に牙を向く前に、その牙を折る必要があるでござろう。
裏切り者不協和音は鬼兵隊に不要でござる…」

その河上から感じる殺気に、武市はブルリと震え上がった。

（ハア、どうしてこう…この船にはこんなにも血気盛んな人が多いのか…）

そこまで考え、ああと武市は納得する。

「類友ってやつですかね…」

晋助の強さに惹かれて鬼兵隊に入った者は多い。その者達が血気盛んな事はある意味、必然的なことなのかもしれない。来島は銃の腕を、武市はその頭脳を晋助に買われて鬼兵隊に勧誘された。しかし河上だけは違い、彼自身が晋助の力に惚れ込み、またそんな河上の力に晋助も興味を示したという関係なのだ。

「晋助様よりかは穏やかな性格ですが…」

それも一度刀を抜けばどうなるか分からない。
ひとたび

まだ、この鬼兵隊で見たものは居ないのだ。

河上 万斉が刀を抜き、本気で戦うその姿を…。

「…とりあえず、船からは脱したが…」

ハアとコンテナに背中を預け、その場にズルズルと崩れ落ちる。押さえている脇腹からは留まることなく血が流れ落ちている。

（このままだと失血死だな…）

幸いな事に、追っ手はどうやらないらしい。先程叩き付けた、ありったけの殺気で殆どの者が戦意を無くしたのであろうことは、紫苑自身すぐに分かった。

（かといって、のんびりとここで休んでいるわけにもいかない。あの場には武市が居た。恐らく…幹部が動き出す。…また子の姿は無かったが…だからといって、襲ってこないとは限らない。いや、また子よりも厄介なのは…万斉か…）

また子は銃を得物としている。二丁の銃を使つての攻撃は確かに厄介だが、銃弾の軌道を読み、発射される弾数を数え、弾が尽きてリロードする時に一気に畳み掛ければ容易く制する事はできる。他の誰でもないまた子だから、出来れば傷付けずに気絶させる程度で済ませたいと思っている。そう…紫苑が一番敵視している存在、それは河上なのだ。

（結局、奴の戦う姿は最後まで見る事が出来なかった。武市は一度、手合わせを願ったものつそい勢いで断られたなあ…。あれは多分、そこそこの腕でしかなのだろう。しかし万斉は…）

得物らしい得物は持ち歩いていない。持ち歩いているのは背中の三味線のみだ。まさかあれが武器だというわけではないだろうと考えるが…天人の力により色々な技術が特化した世の中だ。どんな武器

があってもおかしくはない。

（とりあえず…少しでも遠くに…、船から離れなくては…）

刀を携えていれば、警察か…もしくは真選組に捕まるだろう。しかし、それでも…鬼兵隊に捕まるよりかはマシだ。グツと足に力を入れて立ち上がる。フラリと体が傾いたが、何とか踏みとどまり片手をコンテナについて歩き出す。

その様子を…

「見つけたでござる…」

気配を殺した河上が、上から見ているとも知らずに。

（妙だ…静か過ぎる…）

暫く歩き、紫苑はふとこの状況に違和感を覚えた。自分は追われている身。にも関わらず、船から出てからというもの…追っ手らしき者の気配を全く感じない。ゆっくりとはいえ結構歩いた。船からは随分と離れただろう。もう少し歩けば恐らく、港から出られる。更に歩けば、港から一番近いかぶき町に辿り着くはずだ。

あまりにも…上手くいき過ぎている。

本来であれば楽観視するところも、相手があの晋助を筆頭とした鬼兵隊となれば話は別。ゲームと称して処刑を行うくらいだ。もっと刺客を送ってきてもおかしくはないはずなのに、その気配が全くな

い。部下は愚か、幹部の者達が追ってくる気配すらないのだ。

そこまで考え、ぴたりと足を止める。

(……まさか…既に尾行^つけられている…?)

気配は何も感じないが、もしも相手が手馴れで尚且つ死線を潜り抜けていた者であれば、気配を殺す事など造作でもないだろう。チツと紫苑は舌打ちをする。

(鬼兵隊の中でそんな事が出来る人物が居るとすれば兄さんだが…既に兄さんはこの戦いからは退^{しりぞ}いている)

あの“興^{ゲーム}が削がれた”という言葉が本心であれば、もう晋助がこの処刑に身を投じてくる事はまず無いだろう。となれば、必然的に思
い浮かぶ名前は…

「……万斎、か…」

「ほう、よく分かったでござるな」

「兄以外にこんな芸当が出来る人間はそうそういないだろう。また子や武市も恐らくは出来ない。こんなことが出来るのは……お前ぐらしいかいないかと思ってな。どうやら…私の予想は当たったらしい」
「ククッ、流石は晋助の妹でござる」

河上だった。名を呼べばあっさりとコンテナの上より姿を現し、スタンと紫苑の前に飛び降りる。片手には刀。背中には…相変わらず
三味線を背負っている。

「得物は刀か。何処に隠し持っていたのやら…」

「拙者も侍。常に刀は忍ばせているでござる。もったも、拙者には

表の顔もある故…：そうせざるを得ないというのが本音でござるが」
「なるほど、仕込み杖ならぬ、仕込み三味線という事か…」

どうりでどんなに探しても得物が分からないはずだと妙に納得してしまふ。しかしそんな暢気な考えをすぐに払拭し、紫苑は刀を構えた。相変わらず傷口からの出血は酷い。しかし、紫苑の瞳とその姿はそれを思わせない程の気迫だった。

「お主、そのまま動き続けられればいずれは死ぬでござろう…。ここはひとつ、大人しく鬼兵隊に戻らぬか？ さすれば、拙者もお主に危害は加えぬ。…良い話だとは思うが？」

「良いもクソもねエな。んな話、最初から願^{ヘナ}い下げだ。私の目的はただ1つ…」

ゆっくりと呼吸を整え、そして紫苑が地面を蹴る。

——キィィィン!!!!

「鬼兵隊からの脱退…ただ、それだけだッ!!」

港に刀同士のぶつかる金属音が響く。静まり返っているせいもあり、やたらその音は大きく聞こえた。

「それほどの傷を負いながら、これだけの力…。なるほど、流石は紫^{しおん}怨の…」

「その名は…呼ぶなど、言っただアアアツツ!!!!!!」

紫苑の絶叫が響いたと同時に、万斎は肩に重い衝撃を受ける。一瞬、

あまりの素早さに何が起きたのか理解する事が出来なかったが、少し前の晋助と紫苑のやり取りを思い出し現状を理解する。バツと身を引き、間合いを取って紫苑の手元を確認すれば右手には刀、左手には白い鞘という独特のスタイル。

「なるほど、これは確かにキツイ一撃でござるな…」

あの時、晋助もモロにその一撃を食らって膝をついたが…なるほど、これが刀であれば間違いない肩から下はバツサリと斬り捨てられていた事だろう。

「それほどの腕ならば、二刀流という戦い方もあろう。何故、なにゆえ1本の刃でのみ戦う？」

問われて紫苑は刀と鞘を構えたまま鋭く河上を睨む。暫くの沈黙の後…紫苑が口を開いた。

「私も最初は二刀流という戦い方を考えたさ。だが…」

脳裏を過ぎるは、自分と兄が恩師と慕った優しい松陽の姿。

『お前達は奪う為ではなく、護るために刀を振るうのです。護るための刀は1本あれば事足りるでしょう。紫苑、お前は確かに2本の刀を巧みに使い、敵を制する事に長けています。しかし、それは同時に2つの命を奪うという事にも繋がります。1つの命でも十分重たいというのに、一太刀で2つの命を奪い、2つの重みを背負うことがどんなに辛いのか…。今は分からずとも、いずれそれを後悔する日が必ず訪れるでしょう。だから…そうなる前に、もう1つの刃は捨てちゃいなさいな。私は紫苑の、その美しい顔が悲しみに濡れる姿

などみたくありませんからねえ：』

恩師の言葉で、紫苑は迷うことなく二刀流から一刀流の道へと歩みを変えた。それが正しかったのかどうかは今となっては分からないが、松陽の言った通り紫苑は1本でも十分に戦えた。

そして護ることが出来た。

もし、この手にもう1本刀を持っていたら：

自分はただの、人斬りに成り下がっていただろう。

「護る刃は1本で十分。私は私の護りたいものを護るために刀を抜く。テメエらのように私利私欲のために斬る為の刃ではない」

「私利私欲？それは誤解というものでござる。拙者達は倒幕という1つの理念の元、晋助の周りに集^{つど}った。拙者達が斬り捨ててきた者達は、その目的のための犠牲にすぎぬ。何事にも犠牲はつきものでござろう」

「：関係の無い人間を巻き添えにし、倒幕のためにのみ突き進む、か…。いや、“倒幕”などという生温い考えではなかったな。兄はいつも言っていた。“この世界をぶっ壊す”と：」

晋助の言う“世界”が何なのかは結局、紫苑には理解できなかった。だが、国そのものを破壊すると言っているようにしか聞こえないのだ。そうなれば必然的に、何の関係も無い市民が巻き込まれるのは目に見えている。

「私は、そんなやり方が気に食わないだけだ。幕府が憎いのは確かに同じ。私達に戦わせるだけ戦わせて裏切り、剩^{あまつさ}え我々侍から刀を

奪ったのだから」

「ならば、拙者達とお主の理念は同じでござろう？」

分らないと訝しげな表情を見せる河上に、紫苑は喉を鳴らして笑った。

「ククッ：テメェらと一緒にだ？笑わせるなよ：」

刹那、紫苑の姿が一瞬消えた。だがすぐに空気の流れと零れ出る殺気でその気配を感じ取る。再び、刀同士のぶつかる音が木霊した。

「“倒幕”は確かに望んでいる。だが私は“国を壊すこと”は望んでなどいない：」

感情の消えた声に、思わずゾツとするものを感じたが河上は片手で握っていた刀にもう片方の手を添えてガツと力を込める。力任せに押せば、僅かに紫苑の体がよろめいた。

「国を壊す事は望んでいない：。それは、かつての同胞がこの国で生きているからでござるか？それとも：」

白夜叉が生きているかもしれないからか？

河上の言葉に、一気に紫苑の頭に血が上る。凄まじい殺気が河上に叩き付けられるが、それでも河上は僅かなサングラスの隙間から紫苑を冷たい目で見下していた。

「そんな下らぬ理由のために晋助の足を引っ張るといっているのであれば、この独奏^{ソロ}はここで幕引きでござる」

スツと刀を高々と掲げ紫苑に向けて振り下ろす。

（紫苑は体勢を崩している。その体勢から、この太刀は…かわせぬ！！）

河上には確信があった。この一太刀で終わらせられるという、確信が。

しかし…

——ガツンツツ…！！

響いたのは、肉や骨を切り裂く音ではなく…無機質なそれがぶつかった音。

「…貴様…ツ…！！」

「ほう、テメエでもそんな口を利くのか…初めて知った…」

鞘を盾とし、刀で体勢を整え直した紫苑の姿がそこにあった。かなりの力で刀を振り下ろしたにも関わらず、それは女の腕一本…しかも鞘で受け止められている。とても満身創痍の女が成せる技とは思えない。

「その表情からして…私を斬ったという確信があったらしいな。だが言っただろうよ。私はそんなに…」

鞘で河上の刀を受け止めたままグツと身を屈める。闘技場で紫苑が見せたモーションだ。首を狙ってくると、咄嗟に万斉は刀を引き後退したが…

「甘くはねエッ!!」

首目掛けて刀を突き上げるモーションではなく、そのまま河上の胴を狙い真っ直ぐに刀を突いてきた。

「クッ…!!」

判断を誤ったとすぐに刀で攻撃を受けようとするが、完全に受け切る事はできず…

「…腕1本…貫った…」

逸れた太刀筋はそのまま、河上の右手の甲から肩にかけて傷を作った。ブシュウと血飛沫が飛ぶ。

「やってくれたでござるな。侍は腕が命だというのに…」

「テメエのような輩に、侍を語って欲しくはねえなア…」

その傷は決して浅くは無かったらしく、血はボタボタと留まることなく溢れ出ていた。

「万斉、そのままだとテメエ…失血死だぜエ？」

ニヤリと笑った紫苑の表情。

それが：

『オメエの腕、気に入った。今日からオメエは鬼兵隊の一員だ…』
紫苑の兄である晋助のそれと重なる。

（流石は兄妹でござるなきょうだい）

万斎もニヤリと口角を吊り上げながら立ち上がる。相変わらず出血は酷かったが、まだ河上にはもう1つの切り札がある。それは、河上が絶対の自信を持つ切り札だ。

「確かに腕はもう使い物にならんでござる。だが…拙者にもまだ切り札はあるでござるよ」

スツと背中に背負っていた三味線を持ち、河上が構えた。突然の不可思議な行動に、紫苑もぐら付く足を叱咤して刀を構える。

（何だ…？三味線なんぞ持ち出して、奴は何をしようとしている…？）

一瞬…河上の姿が目の前から消えた。だがすぐに…

——ベベンツ…

耳元で聞こえた三味線の音で、すぐ隣にまで河上が迫っている事に気付く。

「テメエ、何の真似だ!! 馬鹿にしてんのか!!」

わざと音を出し、まるで自分の居場所を教えているかのようなその行動。理解ができないと紫苑は吐き捨て、隣にいるであろう河上に向けて刀を薙ごうとした。だが：

「な…に…ッ!？」

紫苑の体はぴくりとも動かない。出血しすぎたせいで、とうとう身体が動かなくなったのではないかと一瞬思ったが、そうではない事は明らかだった。まるで金縛りにでもあったかのように、指一本動かす事が出来ないのだ。

「紫苑：確かに剣では拙者の負けでござる。満身創痍の身でありながら、拙者にこれほどの傷を負わせたことは流石。いや…もしもそのような満身創痍な状態でなければ、あるいは拙者の命はここで尽きていたやもしれぬ。素直に負けを認めよう…」

横にいたはずの河上だったが、声は背後から聞こえる。僅かな時間で移動した事は明白だった。だが、紫苑は自分の身体に何が起きているのか…それが分からず混乱していた。

「テメエ、何をした…ッ!？ 私の身体に何を…!？」

「別に知る必要も無からう。お主には、もはや死の道しか残されておらぬのだから。しかし…そうでござるな、このまま仕舞いというのもつまらぬ。結果次第では…そのまま見逃してやっても構わぬが？」

「なっ…!？」

声で分かった。河上が今、笑った事に。

それが無性に腹立たしく、力任せに腕を動かそうと試みた。

その刹那。

「いっ…!?!」

手首に鋭い痛みが走る。視線を向ければ、痛みの走った手首に赤い筋が出来ており、そこからパタパタと鮮血が流れ落ちていた。

（な、んだ…？万斉は何もしていない。今もなお、私の背後にいる。そこから動いていない。気配で分かる。じゃあ何で…私の手首は傷付いた！？）

思考が追いつかない。それどころか、僅かに残っている意識すら遠退きそうになっていた。

（クッ…流石に血を流しすぎた、か…？だが、ここで倒れるわけには…ッ…!!）

更に今度は足を動かす。辛うじて動いたが、やはり同じように鋭い痛みが走った。確認せずとも、先程と同じだった為結果は明白。

（何だ？私が…動くたびに斬れる…？）

必死に現状を理解しようと頭をフル回転させている紫苑の姿を背後で見つめながら、クツクツと河上は笑った。

「理解ができぬでござろう？」

「ッ、変な小細工を…。だが、動けば斬れる。それは分かった…」

「なるほど、それは正解でござる。が：理由が分からなければ、お主はそのまま動くことは出来ぬ。そしてその場で失血死…。もしくは…」

鋭い殺気を感じ、思わず刀を握る紫苑の手に力が入った。

「拙者が後ろから一突きにして命を絶つフィナーレという演出も悪くはない…。そうは思わぬか、紫苑？」

「ハッ、馬鹿言ってるじゃねえよ。こんな小細工使いやがって…。こんなものを使う奴を侍だとは言わないだよッ!!」

「だがしかし、お主が“侍”と認めぬその存在に殺される。それは目に見えた運命でござる。さぞ無念でござろう…」

「テメエに斬られて死ぬくらいだったら、自分で舌を嚙んで死んでやらアッ!!」

背中越しに叩き付けられる殺気にクッと河上の口角が上がる。

どんな状況に陥っても、決して諦める事は無く。

どんな絶望な状況下でも、侍としての誇りは捨てずに最期まで侍であらうとするその姿。

(本当に面白い女でござる…)

普通の人間ならば、いつそ殺してくれと願うか、鬼兵隊に戻らせてくれと懇願してくるところだ。

しかし、紫苑はそのどちらの選択肢も選ばず：

己の道を切り開くという、極めて困難な選択肢を選んだ。

（これは見物でござるな…）

構えた刀を下ろし、見苦しくもかく紫苑の背中を見つめながら…河上は静かに嘲笑^{わら}った。

そんな河上の視線を感じつつも、紫苑は必死に現状を打開しようと脳みそをフル回転させる。

（冷静になれ、落ち着け。意識が遠退きそうになっているが…覚醒させろ…！！）

ガツと少し強めに腕を振れば、手首のときとは比べ物にならない激痛が二の腕に走る。それにより、遠退きかけていた意識が戻った。

「無駄でござる。それとも、腕一本落としたいでござるか？」

神経を逆撫でするような河上の言葉を一切無視し、紫苑は全神経を自身の身体に集中させる。

（動けば斬れる。これはまず間違いない。3回とも同じ事が起きたんだ。動けば斬れる…。では、私の動きを制しつつ私を斬り付けているものは何だ？万斉は私の背後にいる。動いてはいないから何もしていない。ただ見ているだけだ）

そこまで考え、さっきの河上の動きが脳裏を過ぎった。

（私の横を通り過ぎた時…三味線の音が聞こえた。その直後、私の身体はこの有様。まさか、音を使った催眠術のような攻撃か？いや…この痛みは紛れも無く現実だ。それに、いくら天人の技術が特化しているとはいえ、さすがに飛躍しすぎだな。もっと身近な方法が

無いか?)

ちらりと…斬られた二の腕に視線を向ける。そこからは、パタパタと鮮血が流れていたが…ふと、妙な光景がその瞳に映る。

(血が…下に落ちずに宙を流れている…?…血を流しすぎてついに錯覚まで見えるようになったか…? いや、まさか…?)

今度は手首に視線をやる。同じように、血液が宙を流れている。いや、正確には何かを伝って流れている。そこまで考えた時、紫苑はハッと目を見開いた。

(そんな事がありえるのか…?!? いや、しかしそれ以外に考えられない…!!!)

残念ながら確認する方法は無い。もしあるとすれば、首を動かし河上の方を向く事だろう。だがそれをすれば、間違いなく首を深く挟まれる。

何か、確認する方法は…!?

その時、雲に翳^{かげ}っていた満月が姿を現す。月明かりが、紫苑の姿を照らし出した。

その影に映った紫苑自身の姿を見て…紫苑は確信する。

(万斉が背中に背負っていた三味線、身動きひとつ取れない身体、動けば斬り刻まれる現状…。更に、こうなる前の万斉の行動からして考えられる事は、ひとつ…!!)

紫苑の口元が弧を描く。

暫くの沈黙の間、ずっと河上は紫苑の姿を背後で見ていた。必死になって、身体が動かない原理を見出そうとしているその姿を。

しかしそれにも、そろそろ飽きてきたと…そう思い刀を構えようとした時だった。

（…紫苑を取り巻くリズムが変わったでござる…）

突然、紫苑から感じられる雰囲気が変わった。そして…

「よお、万斉…。随分と腑抜けな小細工をするじゃねエか…」

確信に満ちた声が聞こえた。

「ほう、その口ぶり…お主の身体を捉え斬り刻むものの正体が分かったと言っても言いたげでござるな」

「言いたげもなにも…分かったんだよ、このボケが」

ググッと紫苑が腕に力を込める。例の如く、ブシュツという音と共に肉が切れて血が噴出した。

「動けば…斬れる、身体…。動かせない、身体…!!」

更にもう片方の腕にも力を込める。同じように肉が切れ、血が溢れ出る。

「テメエが私の横を通り過ぎた時に聞こえてきた三味線の音…ッ、そして…この月明かりに映し出された…無数の糸ッ!!」

今度は右足に力を込める。いや、紫苑は全身に力を込めていた。身体のいたる所が斬れ、そこから血が噴出す姿をただ河上はぼんやりと眺めていた。

「答えは“三味線の弦”だ……!!」

紫苑の言葉に僅かに目を見開く河上であったが口角を吊り上げ、パチパチと拍手をする。

「正解でござるよ、紫苑。たったそれだけの事でその答えに辿り着くとは恐れ入った。まさか、この月明かりがお主に味方をするとは予想外でござったが……」

もがく紫苑を見つめ、ククツと喉を鳴らして河上は笑う。

「もはやお主は拙者の弦に囚われた状態。いわばクモの巣に掛った蝶でござる。動けば……言わずとも分かるでござろう」

「あぁっ、分かるさ……!! テメエの、小細工が……私の身体をズタズタにしていくこと、ぐらいつ……!!」

「ならば無駄なあがきはやめるでござる。そしてそのまま大人しく、拙者の刃に黙って貫かれて死を迎えるがいい……」

「ッざっけんな……ッ!! 私、は……こんなっ、糸ごときに……負け、は……しないっ……!!」

しかし、紫苑がもがけばもがくほど、弦は深く肉に食い込み容赦なく決る。その度に血が噴出し、もはや紫苑の戦装束は元の色が分からないほど血に染まっていた。

「その心意気は良し。しかし逃げ出せぬのも事実。もしその弦から

逃れられたあかつきには……」

紫苑…お前を見逃してやろう…

河上の言葉に、紫苑が目を見開く。

「い、ま……何て…？」

「聞こえなかったわけではあるまい？それに、さっきも言ったでござろう。“結果次第では見逃してやる”と」

「はったり…か…？」

「いいや、はったりではござらん。拙者の命にでも誓えば満足か？ただし…あくまで“逃げられたら”の話。その弦は鉄と同じ強度ゆえ…いくらお主といえど、そう簡単に引きちぎる事はかなわん。それに無理に動けば…もはや言うまでもござらん」

弦に絡め取られた四肢と胴体、そして首元。辛うじて首だけは無傷だったが、その他はいたるところに裂傷ができており、紫苑の立っている場所には赤いシミが出来ていた。

この糸地獄からは決して抜け出せない。

その絶対の自信が河上にはあったのだ。

「ククッ…、万斉…、その言葉…後悔、すんなよッ…！！」

しかし、紫苑は力を緩めるどころか更に全身に力を込める。ついに首にまで弦が食い込み、血が噴出した。

「…血を流しすぎて、まともな考えも出せぬようになってしまったでござるか？」

何をしてても無駄だと笑う河上に、同じように紫苑も笑う。しかしその笑みは穏やかで…とても、戦いに身を投じている者が見せる笑みとは思えない。僅かに見えたその笑みに…河上は訝しげに問う。

「何故、笑う？ ついに血を流しすぎておかしくなったでござるか？」

河上の問いに、紫苑は笑いながら…

「オメエには分かるめえよ…。例え鉄の糸だろうと、何だろうと…！！」

更に力を込める。弦が肉に食い込み、出血量も更に酷くなる。それに加えて、晋助から受けた脇腹の傷からもボタボタと容赦なく血が流れ落ちていた。

それでも、紫苑は力を緩めない。それどころか、更に力を込める。

「私の…この、想いは…」

『ね、銀時？一緒に暮らすときはさ、どこか静かな場所がいいな』

『そうさなあ、萩で静かに暮らすか？』

『うんうん、それがいいかなあ！！私達の故郷だもんね』

「自由になりたいと、願う…この、想いは…ッ…」

『ねー、何でコタローは兄さん達にヅラって呼ばれてるの?』

『知るか!! 俺が聞きたいくらいだ!!』

『そりゃ、おまんがヅラじゃからじゃ!! のう、銀時く、晋助く!!』

『そうそう、辰馬の言う通り!!』

『だからいい加減に、その長ったらしくて鬱陶しい髪型からすつきりした髪型に変えろや…』

『貴様ら…そんなに死にたいかッ!! 俺はヅラじゃない、桂だ!! ！そしてこれは、地毛だアアアッッ!! ！!!』

『わーっ!! ！狂乱の貴公子が怒った!! ！ちよ、マジギレしてるよ! ? どうすんの! ?』

『逃げるぜよっ!! ！』

ラジャーッ
『了解!! ！』

『ヅラも意外と短気だなッ、ククッ…』

『貴様らアアア!! ！だから、ヅラじゃない桂だアアア!! ！!!』

『うわあああっ!! ? 私も巻き添え!! ? 何でエエエ!! ? ? ?』

——ブチンッ!! ！

「なっ!! ?」

紫苑を絡め取っていた、鉄の強度を誇る弦の1本が音を立てて切れた。否、1本だけではない…

——ブチブチッ…!! ！

次々と、弦が音を立てて切れていく。血に染まった弦が1本、また1本と地面に落ちていった。

そして：

「例え、鉄の糸であろうと…、何であろうと…ッ…、私を…止められはしないッ！！」

——ブツン！！

紫苑を捕らえていた弦の全てが切れ落ちた。ただ河上は呆然とその様子を見つめる事しか出来ない。信じられなかったのだ。この鉄の強度を誇る三味線の弦を、まさか刀も使えない生身あらわさの…しかも力任せという荒業で断ち切ってしまうという事が。

「グッ…！！」

完全に糸からの呪縛が解け、紫苑はその場に倒れ込む。だがすぐに、刀を杖代わりにして立ち上がった。河上には背を向けたまま、ただ港の出口のみを見つめている。

「万斎…約束は、きっちり守ってもらうぜエ…？」

僅かに振り向いた紫苑の表情。それは勝ち誇った笑み。

「ククッ…流石に三味線コレの弦まで敗れたとあっては、拙者の完敗でござるよ。約束通り見逃そう…。何処へでも好きなところへ行くが

いい…」

しかし、と…河上はその背中に告げる。

「何処ゆに行こうとも、鬼兵隊は常にお主を狙うであろう。そしてまた、幕府もお主を鬼兵隊副官として命を狙う。どちらにしても、お主は容易く生きてはいけぬということだ…」

河上の言葉を受け紫苑は歩みを止める。天を仰ぎ、大きく深呼吸をして今度は真っ直ぐと河上の方に顔を向けた。

「確かに…鬼兵隊からも幕府からも追われる身となるだろう。だが、それでも私は…」

必ず、生き抜いてみせる。

強い眼差し。

傷付きボロボロの身体でありながら、いつだって絶望する事も諦めることも無く、ただその瞳は前だけを見据えていた。

「…惜しいでござるな…」

「何が？」

「今更ながら…もう少し、お主の奏でるリズムを聞いてみたいと思っただござる。独唱ソロではなく、兄妹揃おきょうぞろっての二重唱デュエットを…」

「…残念、もうそれも叶わないわ。だって、私と兄さんの心は……」

もう、離れてしまったから：

それだけを残し、紫苑はふらつく足取りで河上の前から姿を消した。
先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

そんな中、紫苑の消えていった闇を見つめながら河上はポツリと呟いた。

「晋助の心が紫苑から離れた？…そんなわけがなかろう。いつだって、晋助は…」

『よう、万斉…』

『何でござるか、晋助？』

『紫苑に…銀時のことを伝えなかった事は…間違いだっと思ったのか？』

『何故、そのような事を問う？お主らしくもない…』

『さア、なんでだろうなア？ただ…』

『ただ？』

『アイツの…紫苑の心はどんどんこの鬼兵隊から離れていく。俺ア、アイツを鬼兵隊の副官に戻す事でアイツを護ったつもりでいたが…』

『……晋助？』

『いや、何でもねエ。聞かなかった事にしてくれや…』

「誰よりも、お主のことを考えていたでござるよ。本当に兄妹できょうだいご

ざるな。不器用なところなどそっくりでござる…」

あるいは無理矢理にでも連れ帰り、再び鬼兵隊の副官に就かせることも出来ただろう。しかし、河上がそうしなかったのは、それを晋助が望んでいないと分かっていたからだ。

「さて、紫苑よ…。再び独りとなったお主が、今度はどのような人生を奏でるのか…拙者も興味が湧いたでござる。次、会う事があったらその時にでも聞かせてもらいたいものだ…」

口元に弧を描きながら、河上はくるりと踵を返してその場を去る。戻る場所は鬼兵隊本陣。

「さて…。晋助に何と言いつてやるか…そこまでは考えていなかったでござる…」

ポリポリと頭を掻きながら、河上もまた闇に消えていった。

ようやく手に入れた自由。

だが…

「ハアツ…ハア…ツ…!!」

晋助との戦い、更には河上との戦いで傷付いた身体はとつくに限界を迎えていた。

しかし、そんなときに限って…

「おい、あの女…高杉一派の…!!」

「鬼兵隊の副官か!？」

「だが…ククツ、随分と弱ってるみたいだなア…!!」

「こりゃ、絶好の機会だぜ？」

高杉一派を良く思わない浪人達が紫苑を狙う。ふらつく足取りの紫苑をグルリと囲むように浪人達が立ちふさがり、紫苑の行く手を阻んだ。

「どけっ…、私は…先を急いでいる…!!」

「まあ、そんなに急がずともすぐに行かせてやるさ…あの世という終着点になっ!!」

一斉に切りかかってきた浪人達を一瞥し、紫苑は小さく舌打ちをした。

「面倒だ…、そして…目障りだッ!!」

一気に気迫と殺気を叩き付け、そして刀を抜く。一太刀で数人が吹っ飛び、殺気だけで何人かは気絶した。

「ヒィッ!? な、何だこの女…!!」

「ば、化け物だアアア…!!」

結局、紫苑をあの世に送ると意気込んでいた浪人達の殆どは逃げ出し、紫苑の前から姿を消す。

「命が惜しくば…もう二度と、私の前に現れるな…」

倒れた浪人達を一瞥し、紫苑はその場を後にした。暫くして目覚めた浪人達は不思議そうに首を傾げる。確かに斬られた筈なのにと。だが体のいたるところから、打たれたような鈍い激痛が走る。そう、確かに斬られたのだ。刀の峰で。

「おいおい、まさかあの女……!!」

「峰打ち……!?!」

「峰打ちで、俺達はこのザマなのか……!?!」

自分達はとてつもなく恐ろしい相手に喧嘩を吹っ掛けてしまったのだと、血の気が失せた。そして逃げるように、その場を後にする。

その後も、似たような事が何度か起こり、その度に紫苑は刀を抜いて峰打ちで浪人達をねじ伏せた。

（別に……斬る必要はない。たかが浪人だ……。それに……）

ふと脳裏を過ぎったのは、ニヒルな笑みを浮かべる晋助の姿。

（恐らく鬼兵隊は、恨まれて当然の事をしてきたのだろう……）

ならば傷付いた鬼兵隊の副官を襲ってくるのも道理というものと、自嘲の笑みを浮かべながらひたすら紫苑は足を進めた。

別に目的地などはない。ただ……

自由に過ごせるならば、どこでもよかった。

しかし、河上も言った通り……必ず鬼兵隊は紫苑を見つけ出そうとするだろう。

何処に居ても、命の保証などない。

(どうせ…命の保証がない、というのであればっ……!!)

朦朧とする意識の中、電柱の看板を頼りにその場所を目指した。

紫苑が目指した場所、それは…

(フフッ、そう言えば兄さんに……売り言葉に買い言葉で“真選組に捕まって、鬼兵隊について洗いざらい吐く”なんて言ったっけ…?)

攘夷志士達にとっての天敵である、武装警察・真選組の屯所。

「目的地、に…とう、ちやく………」

そこで、紫苑の身体はついに限界を迎える。否、限界などとうの昔に超えていた。それを、紫苑は気力だけで保っていたのだ。ある意味、奇跡にも近かった。ドサリと音を立ててその身体が地面に崩れ落ちる。じわじわと紫苑の周りには血溜まりが出来た。脇腹から、首元から、身体のいたるところから出血している。その肌は、血の気が通っているのか疑わしくなるほど蒼白だった。

次第に薄れゆく意識の中で…

「土方さん、屯所の前に誰か寝てやすぜ?」

「大方、酔っ払いだろう。ったく…」

「屯所の前で寝こけるたア、大した奴でさア。しかも見てみなせエ、腰に刀を差してやすぜイ?」

「チッ、真選組も舐められたもんだ…」

「それは…土方さんのせいですねィ」

「んでそうなる!!」

声が聞こえた。

「土方さん、こいつァ…!!」

「……ッ……!! 総悟、至急救護班を叩き起こせ!! おい、しっかりしろ!! 俺の声が聞こえるか!? おい!!」

それは…

「クソッ、意識がはっきりしてねえな。だが安心しろ!! 絶対に死なせはしねえ!!」

天敵である真選組副長の声であり…

（……フフッ…鬼の副長、なんて言われている割に……随分と優しい人じゃない……）

命の恩人となる相手の声だった。

思えば…あの時は真選組に処刑される覚悟で屯所まで身体を引き摺っていった。

それがどういうわけか生かされ、そしてあろうことか憎むべき幕府の犬である真選組に身を投じる事となった。

幕府を憎む紫苑にしてみれば、真選組とて憎むべき相手であった。

だが…命の恩人で、しかも居場所をも与えてくれる者達を心の底から憎む事など出来るはずも無かった。

悩んでいた紫苑が心を決めた瞬間、それは…

「俺達も別に幕府のために真選組なんざやってるわけじゃねえんだ。ただ俺は…頭かしらである近藤さんのためにココに居る。あの人は、一度は奪われた刀を再び俺達に与えてくれた。どんなに感謝しても、し足りねえ程に恩を感じている。だから、俺達は俺達の大将である近藤さんを護るためにこの刀を抜く。もしも幕府が近藤さんに刃を向けるってんなら…俺達は迷うことなく、幕府を叩っ斬るぜ…？」

土方の真っ直ぐな信念を聞いた時だった。

確かに彼らは幕府側の人間ではある。だが、真選組この者達は幕府という柵しがらみに捕らわれることなく、それぞれが“侍”としての魂を心に宿している。

幕府を護るためではなく、近藤 勲という自分達の頭かしらを護るために刀を抜いている。

その姿が…

『いいか！！俺達は絶対に生きて攘夷戦争を切り抜ける！！そして、必ず4人でこの萩の地に戻る！！』

『うん、先生のために…江戸のために私達は戦う！！』

『先生が教えて下さった“護る剣”…。今こそその剣を振るう時…

！！

『ああ、絶対に俺達は生きて戻るぞ。そして、先生を殺した憎き仇を…叩っ斬ってやらア…！！』

——4人でこの剣に誓おう！！俺達私達は、この国を護るために戦うと！！

攘夷戦争に参加する前の自分達の姿によく似ていた。

国を護りたい、大切な人を護りたい。

それぞれの信念の元、全員が同じ思いで刀を掲げた。

結果、幕府の裏切りという形で想いは儚く散ってしまったが…

「…元攘夷志士…しかも、鬼兵隊の副官だった私でも…：…また、真選組で護るために刀を振るう事は出来るでしょうか…？」

「それはお前の気持ち次第だ。近藤さんはお前の入隊を望んでいる。俺も、近藤さんの言う事に異論は無い。お前自身から嘘偽りの無い真実を全て聞いたからな。…後は、お前次第だ」

護れるものがあるなら、護りたい。

この刀でまだ何か護れるなら…

晋助あにを変えられなかった罪滅あにぼしになるかは分からないが、それでも…

「土方副長、どうか私をこの真選組に置いて下さい。私は、私の護

るべきものを護りたいのです」

「お前の護りたいものとは…何だ？」

「私の護りたいものは…」

『紫苑、今日は先生が道場を自由に使っていていいってさ!!一緒に稽古しようぜ!!』

『うん!!銀時、手加減はなしだよ?』

『当たり前だ、バカヤローツ!!』

「愛する者が住まう…この江戸です」

貴方が生きているかもしれないこの江戸の町を…護りたい。

それが、紫苑の出した答えだった。

それから数年の年が流れ、平穏…とまではいかずとも、真選組でも有意義な毎日を過ごした。

自然に笑える自分が真選組にいた。

しかし…

銀時のことを、必死に探している自分がいた。

桂という名を聞く度に、複雑な心境になる自分がいた。

晋助と鬼兵隊の名を聞く度に、胸が締め付けられるような思いになる自分がいた。

坂本が宇宙を飛び回りながら別の方法で国を正そうとしている姿を、どこか羨ましく感じる自分がいた。

身体は真選組にあっても、本当の家族のように思っている。

いつも…紫苑の心は別のところにあった。

心だけはいつだって…かつての仲間の元にあった。

折角…会えたのに、ごめんね銀時…？

急に倒れてしまったから、吃驚したわよね…？

ゆっくりと紫苑が目を開けると、目に映ったのは屯所にある見慣れた自室の天井ではなく真っ白な天井。

そこが病院の集中治療室だと気付くまでに時間など掛かりはしなかった。

（そっか、私…走ってしまったから…。それにしても、随分とまた懐かしい夢を見たわね…）

銀時の姿を確認した時、止める土方と沖田の声が聞こえたが…それでも身体は止まらなかった。

銀時が生きていると分かって、目の前にいると分かって…感情が抑えられなかったのだ。

銀時は今、どうしているのだろうか？心配しているだろうか？

（ああ、どうしてかしら？…今にも泣きそうな顔をして凄く心配している姿が目に見えかわる…）

もう随分会っていないのに、その仕草や表情が手に取るように分かる。

そんな事をぼんやりとした意識の中で考えていたら…

——ダンッ…！！！！！！

壁を叩きつけるような激しい音が聞こえた。

（何かしら…？）

音がした方にゆっくりと視線をめぐらせる。そこには、ガラス張りになった壁に背を預けている銀時の姿があった。

（銀時…）

その名を呼びたいのに、思うように声が出ない。やっと呼べるのに、

やっと届くのに…。

今度は病がそれを邪魔する。このたった一枚の壁が、銀時と自分を隔てている。

もっと名前を呼びたい、もっとその温もりを確かめたい。

なのに…それが許されない。

紫苑の瞳から涙が零れ落ちた。

やっと、やっと会えたのに…

「何が攘夷戦争の英雄だ…何が白夜叉だ…!! 結局、俺ア…」

ああ、どうして…

「最後の最後まで…何も護れなかったじゃねえか…ッ…!!」

私は、貴方を悲しませる事しか出来ないのだろうか？

ごめんなさい、ごめんなさい…。

（貴方が悪いわけではない…。銀時、貴方は何も悪くないの…。ただ、私が弱かっただけ。だから、そんなに自分を責めないで？そんなに苦しまないで？）

ぼんやりとする意識の中で、必死に手を伸ばそうと力を込める。だが、その手に力はいらない。恐らくは葉のせいだろう。

（大丈夫、私は大丈夫だから…）

だから…、ねえ、銀時…？

「ぎ、ん…とき…」

笑って？

その優しい…夕焼けのような紅い瞳で、また私に笑いかけて？

「…銀、時…」

ねえ、あの時の約束…覚えてる？

みんなで一緒に、萩に行こう？

「銀…時…」

みんなで一緒に、花見をしよう？

「銀時…ッ…！！」

きつと、松陽先生も待っているわ。

だから…

「もう、桜…満開、だから…ね…っ…？」

みんなで、帰ろう…萩に…

僅かに聞こえた紫苑の声に、最初に気付いたのは沖田だった。驚いた表情で自分を見つめている沖田に、紫苑は力なく笑った。そして口を動かす。

「私は、大丈夫、よ…」

声は恐らく聞こえていないだろう。しかし口の動きで分かったらしい沖田は、慌てて近藤と土方の肩を叩いていた。安堵したように息を吐きながら立ち上がり突然座り込んだ土方と、ガラスにへばり付き滝のように涙を流している近藤、そんな近藤を呆れながら見つめつつも、紫苑の無事に同じように安堵している沖田。

そして…土方に支えられるようにして立たされた、銀時。

目が合った。

（ああ…ごめんなさい、私が泣かせてしまったのね…）

その瞳は、遠目から見ても分かるほど濡れていた。

だから、紫苑は…

「銀時…私は、大丈夫よ…」

その視線の先に居る、最愛の人に向けてフワリと笑う。

目を丸くして驚く銀時だったが…

濡れた瞳を、着流しの袖でゴシゴシと拭って…

（ああ、私の良く知る銀時だ…）

昔と変わらない笑みを見せてくれた。

（今…幸せ、だ…）

攘夷戦争で独りになり、

晋助や鬼兵隊から殺されそうになりながら逃げてきて、

自分は何の為に生きているのだろうと何度も考えた事があったが…

（生きてて…良かった…）

一番見たかった笑顔を見た瞬間、

生きる事を諦めずに突き進んできた人生に、初めて誇りが持てた。

自分はこの瞬間のために生きていたのだと。

最愛の人と再び出会うために生き延びたのだと。

（もう一度、言わせて…？）

ガラス張りの向こう側に居た近藤が忙しなく走り去ったかと思うと、医者を無理矢理引っ張って戻ってきた。恐らくは紫苑の目が覚めた事を必死に伝えようとしているのだろう。

そんな中でも、銀時と紫苑…この2人だけは、まるでその空間だけ切り取られたかのように、ジッと互いを見詰め合っていた。

例えばガラス越しでも、今は触れられなくても…

生きていれば、時間が経てばすぐに触れられる。

そして…

「やっと…」

「会えたね…」

この声は、いつだって届く。

銀時と紫苑。

2人の言葉は2人にだけ届き…

2人は嬉しそうに笑い合った。

【第八訓】 追憶　　ゝ逃走、そして今ゝ（後書き）

やっと、銀さん出せたよ！！ごめんね銀さん、待たせちゃって……
！！（笑）

さて、次回は場所が変わりまして：万事屋従業員に視点が移ります
！！ゲストも登場します☆まあ、彼をゲストと言えるかどうかは…
謎ですがWW

【第九訓】 それぞれ、想うは同じこと（前書き）

今回は神楽と新八に視点を当てました！！最初は、万事屋メンバーとお登勢メンバーだけで話を進めるつもりだったんですが……助っ人の登場です（笑）シリアスでもギャグでも大活躍のヅラですb（笑）

【感想サンクス☆】

クマ様

有難うございます、これからも頑張ります（＊、＼、＊）

【第九訓】それぞれ、想うは同じこと

銀時と見知らぬ女性との一連の出来事。それは、万事屋の子供達にはどんなに考えても理解の出来ないことだった。とりあえず、大江戸病院に向かう前に下の階にいるお登勢に伝える事を伝えなければと、新八と神楽は走った。

「おや、こんな真昼間からどうしたんだい？ やつと家賃でも払う気になったかい？」

「神楽様、新八様…どうなされたのですか？ 呼吸、心拍共に酷く乱れております」

「アホノ坂田サンハ、一緒ジャナインデスカ？」

それぞれ言いたいことを言いたい放題言っているが、とりあえず要点を伝えなければと新八がお登勢の元へ駆け寄る。

「えっと、家賃はすみませんがもうちょっと待ってください…!!」

「アアンツ!? もう十分待っただろうが!! さっさと払うもん払いな!!」

「ババァ!! とりあえず、その話は後アル!! まず私達の話聞くヨロシ!!! 大事な話ヨ!!!」

家賃よりも大事な話があるものかと更に続けようとしたが、ふと…お登勢はあることに気付いた。それは、子供達が必死であると同時にどこか不安そうな表情をしているということ。

（こりゃ、銀時絡みで何かあったね…）

やれやれ、こりゃ家賃どころじゃ無さそうだね…。

小さく溜息をつきながら、煙草を吹かし新八に視線をやる。

「まあ、いいさ。とりあえず、その大事な話とやらを聞かせてもらおうじゃないかい。たま、コイツらに水を持ってきておやり。随分急いで来たみたいだからね」

「了解しました」

たまがカウンターから奥へと姿を消すと、新八と神楽は顔を見合わせる。自分達だって何かを知っているわけではない。だが、これから暫く銀時が万事屋には戻らずあの女性の元に付ききりになることは何となく分かった。だから、万事屋を暫く空けることを話そうと思っていたのだ。

「あの、僕達も何が起きたのか良く分からないんですが、実は銀さんが…」

とりあえず、自分達が見た光景をありのままお登勢に伝える。話している途中で、たまが水を持ってきてくれたので、それをありがたく頂きながら、出来る限り詳しく話した。といっても、新八達が見た真選組の女性隊士は初めて見る人だった為、それが誰なのかは分からない。故に、その女性について詳しくは話せなかったが…しかし。

「僕の勝手な思い込みかもしれませんが…あの女の人、銀さんにとって凄く大事な人なんじゃないかって思ったんです」

「そうネ。だって銀ちゃん…あの女^{ひと}見たとき泣いてたヨ。それに…いつもの銀ちゃんじゃないみたいだったアル…」

いつもグータラしていて、めんどくさがりで、久々に入る仕事も面

倒だ何だと文句ばかり並べる銀時ではなく、あの時銀時が見せた表情は…それこそ、いつぞやに銀時自身が言っていた、“死んだ魚のような目だけど、いざという時は輝く”という表現にぴったりだったのだ。

「……アンタ達、その女の名前は分かるかい？」

お登勢に聞かれ、神楽と新八は顔を見合わせる。

直接の面識は無い為、名前と言われても分からない。

だが、確かに銀時は…

「“しおん”と言っていました。確かそうだったよね、神楽ちゃん？」

「そうアル」

そう呼んでいた。新八が口にした名前を聞くと、お登勢は小さく笑った。そしてフーツと紫煙を吐き出しながら小さく呟く。

「そうかい、ようやく…目的の人に会えたんだねえ、アイツも…」

「……？お登勢さんは、何か知っているんですか？」

「あの女と銀ちゃんのこと知ってるネ？」

「なあに、アタシも酔いつぶれた銀時が話しているのを聞いただけさね。あと……まあ、これも別にアンタ達なら話しても構わないだろう。銀時が何で万事屋なんて儲からない仕事を始めたか…知っているかい？」

お登勢に問われ、そういえば…と新八は思う。銀時は結構器用だ。万事屋なんて、あまり仕事が入らない職業なんかより、その無駄に

高いスキルを何故他に役立てないのかと思う程に。それに、当然と言えば当然だが銀時の剣の腕は凄い。用心棒なり、何なり…もつと彼の力を役立てる仕事はいくらでもあったはずだ。

それが何故、仕事が1週間に1回来るか来ないかの超幸先不安な、しがない万事屋なんてやっているのだろうか？

そんな事、考えた事もなかったと…新八も神楽も首を横に振る。

「やっぱり、アイツは何も話しちゃいないんだねえ。過去を話したがないのは本当にアイツの悪い癖さ…」

「お登勢さんは知っているんですか？ 銀さんが、万事屋を営む理由を…？」

「ああ、知ってるよ。…1人の女の為さ…」

1人の女。そう聞いてすぐに2人の脳裏には先程の、真選組の女性隊士が思い浮かんだ。

「銀時が攘夷戦争に出ていた事は知っているね？」

「それは知ってるアル!!」

「はい、桂さんからも聞きましたし、銀さんの口からも直接聞きました…」

「じゃあ、アイツに婚約者がいたことは…まあ、その様子からじゃ知らないんだろうねえ…」

お登勢がさらりと口にした言葉に、一瞬…神楽も新八も思考回路が停止する。

今、お登勢は何と言っただろうか？

え、なんて言った？

こんやくしや？

こんやくしや、
つて何だつけ？

ああ、婚約者の事か。

$$\vdots$$

「ええええええええ！！！！！！？？？？」

人二

「ぎ、ぎぎぎぎ……銀ちゃんにそんな女ひとが居たアルかアアアアア!?」

子供2人の絶叫がスナック・お登勢に木霊した。

暫く呆けていた子供達だったが、我に返った新八がグイッと詰め寄るように体を乗り出す。

「つ：つまり、銀さんには将来を約束した人が居たってことですよね！？なのになんで未だにマダオなんですか！？何で、真選組にいる女性と熱い抱擁なんてしてたんですか！？」

「そうネ!!あの男、やっぱり女にだらし無いアル!!」

折角、“女性関係はイメージ的にだらしなない”と思い込んでいたが違
うかもしれない”という認識に変わりつつあったのに、一気にまた
現実に戻された気分になる新八達である。勝手に騒ぎ立てる子供
達を呆れた様子で見ながら、「まあ、話を最後まで聞きな」と言い
お登勢は更に続けた。

「アイツには子供の頃から仲良くしていた幼馴染が3人居たんだそうな。1人は桂さん。まあ、ここの常連さね」

「ヅラアルな」

「そうだね」

「そしてもう1人は、超過激派テロリストの高杉って男」

「紅桜のときの…」

「包帯野郎アル!!」

「そして、もう1人は…その高杉って男の実の妹、名前は紫苑…。攘夷戦争で鬼兵隊の副官だった女さ」

お登勢の言葉に、新八と神楽は首を傾げた。あの高杉に妹がいたのだろうかと。しかし紅桜の一件の時は、それらしい人物は居なかった。幹部には確かに女がいたが、彼女は自分の事を“来島 また子”と名乗っていた為、違うだろう。と、そこまで考え…新八はハッと顔を上げる。

「それって、さっき銀さんが名前を呼んでいた…真選組の女性隊士!?!」

そう、最後にお登勢から聞かされた高杉の妹という人物の名は…

——紫…苑…?

まさに、銀時が心底驚いたように紡いでいた名前だった。

「その紫苑という名の女と銀時は、互いに互いを大切に想い合っていた仲らしい。それに、兄や仲間ともそれは仲が良かったそうな。」

だが、攘夷戦争の過酷さは：アンタ達も何となくは分かるだろう？」

問われ、新八も神楽もコクリと頷く。時々：本当に時々ではあるが、攘夷戦争関連の依頼が万事屋に来ることがある。その時の内容を聞く限りでは、本当に悲惨な戦争だったのだと：思わず目を背けたくなるような内容だったりもする。それに、銀時自身が一度だけ：ポツリと漏らした事があった。

『攘夷戦争終盤辺りは、そりやもう悲惨なものだったわ。ろくに飯にもありつけねえ、けど天人は次々に襲い掛かってくる。あのヅラが、天人に殺されるくらいなら潔く腹を切って死のうと言ったほどになあ…』

その時の銀時は、何とも悲しげな表情をしていた。故に、それ以上を聞くことは出来なかったのだ。それでも、銀時が攘夷戦争関連の依頼を断る事は決してなかった。いや、今思えば：その依頼に縋り付いて何かを探していたようにすら感じる。

「お登勢さん：、その：銀さん達は攘夷戦争で：何かあったんですか？」

何故、桂はテロリストなんかになってしまったのか？何か、高杉と袂を別つ程の出来事があったのだろうか？

そして何より、何故今まで：紫苑という、将来を約束した人を放っていたのか。

否、あの様子から放っていたというよりも：会いたくても会えなかったという方が正しいのではないだろうか？

暫くの沈黙の後、お登勢が静かに口を開く。

「攘夷戦争で戦っている最中^{さなか}…、銀時達と紫苑ははぐれちまったんだそう。な。かといつて、たった1人のためにずっと同じ場所に留まり続けることはある意味、大勢の仲間を危険に晒すことさね…」

「まさか、見捨てたアルか!? 婚約者を見捨てたアルか!?!」

神楽が凄い勢いでお登勢に掴みかかりそうになるのを、何とか新八が押さえる。しかし、新八も心中^{しんちゅう}は神楽と同じだった。

大事な人…ましてや婚約まで決まっていた人を見捨てるなんて…。

大事なものを護ると銀時はいつも言っていた。何度も何度も、自分達は銀時に護ってもらった。

しかし…

本当に護るべき人を、何故過酷な戦場に見捨て来たのか…?

新八が押さえたことにより、神楽もようやく黙る。新八も黙ったままだ。しかし、その瞳からは明らかに…戸惑いと怒りが垣間見えた。そんな2人を見て、小さく溜息を吐きながらお登勢は続ける。

「アイツは…銀時はね、ずっと後悔していたさ。何故、自分だけでも戦場に残って探さなかったのかと。何故…紫苑が敵を引き付けると言っただけ部下を引き連れて離れて行った時に、自分も一緒に行かなかったのか…あるいはそれを止めなかったのかと。けどね、戦場は遊び場じゃないのさ。常に命のやり取りが行われている場所さね。アンタ達が思っているような綺麗な事が通用するような場所じゃないのさ」

「綺麗事、ですか？ 大事な人を見捨てる事が正しくて…その人を探したいと思ってその場に留まる事が綺麗事ですか？ 大事な人を…婚約者を戦場に1人残すなんて…ッ…！！ 銀さんがそんな酷い事をするなんてッ…！！」

「そんなのおかしいヨ！！ だって銀ちゃん、その女の事好きだったんでシヨ？ 大事だったんでシヨ？ だったら何で、何で……1人で置いてきたアルか！！ そんなの酷すぎるアル！！ 銀ちゃん、見損なっ
たネ！！」

新八と神楽の言葉に、お登勢が鋭い視線を向けた。そのあまりの凄みに思わず2人がビクッと肩を弾ませる。

「…アンタ達、本気でそんな事を言ってるのかい？ ずっと銀時の傍に居たつてのに、本気でアイツが何も思わず苦しまず…大事な人を戦場に置き去りにしたと思ってるのかいッ！？」

いつもと違う、お登勢の怒鳴り声。家賃を取り立てるとき時とは違う、怒りを露にした声だ。只ならぬ雰囲気、キャサリンもたまも口を挟めず…ただお登勢達のことを見ていることしか出来なかった。

「…なんでアイツが万事屋なんて儲からない仕事を始めたか…。それは…」

短くなった煙草を揉み消しながら、お登勢は呟く。

「高杉 紫苑を探す為さ…」

「攘夷戦争で見捨てた人を、ですか？」

若干、棘のある新八の言葉。しかしそれを気にした様子も無く、お登勢は続ける。

「そうさ。生きてるのか、死んでるのかも分からない。けど僅かでも攘夷戦争に参加していた人間の情報が入れれば、例えどんなに危険な仕事でもアイツは木刀一本携えて、形振り構わず走って行つたさ。何度か命を落としたかけた事もあったねえ……。それでもアイツは諦めなかったよ。空振りして帰ってくるたびに、煽るように酒を飲んで溺れて……。いつも涙を流し紫苑の名前を口にしながら謝っていたさ。そして決まって言っていたよ。『もし、アイツが死んでたら……。アイツを殺したのは攘夷戦争時の俺だ』ってねえ……。紫苑とはぐれた当日は、紫苑の兄と銀時は……。それはもう死に物狂いで探したそうさね。それを止めたのが、桂さんともう1人の坂本っていう男だったそうだよ。最後まで見捨てる事は出来ないと譲らなかった銀時達を、無理矢理説得して先へと進ませたのは桂さん達だったと……。本人がそう話していたさ。桂さんもまた後悔してるんだろうねえ……。銀時が今でも苦しんでいる姿を見て……。アンタ達に、そんな銀時や桂さんの気持ちが分かるってのかい？ あんなに強い銀時が、涙を流しながら謝る程後悔しているってのに、それでもアンタ達は銀時が“酷い人間”だと思ふのかいッ!?」

お登勢の話は黙って聞いていた神楽と新八は、その言葉に胸が締め付けられるような思いがした。

自分達は……。一瞬とはいえ、何て酷いことを思ってしまったのだろうか。

あの銀時が……。何だかんだ言いながらも自分達の事を家族のように思ってくれている銀時が。

最も大切な人を、何も感じずに見捨てるはずが無い事など少し考えれば分かるはずなのに。

なのに…何故、“何て酷い人だ”と…思ってしまったのだろうか。

「……戦争というのはね、たった1人の行動が他の大勢の仲間の命を左右するのさ。1人のために仲間全員が死ぬか、1人を犠牲にして大義を成し遂げる為に先に進むか。……本当に、究極の選択さね…」

けどね、とお登勢は続ける。

「どちらを選択したとしても、最終的に残るのは後悔という最も苦しいものさ。ましてや、1人の仲間と沢山の仲間の命を天秤にけるんだ。そりゃ、悩むだろうし苦しむだろうねえ。だからこそ、銀時はいつだって大切なものを護ることに強くこだわっているのさ。決して見捨てることなく、最後まで己の武士道^{ルール}を貫き通す。その護ることの大切さと難しさを、くしくも惚れた女に教わったってところさね…」

ちらりとお登勢が子供達に視線を向ければ、神楽は肩を震わせて泣いており、そんな神楽の頭を撫でながら…新八も何とも言えない表情をしていた。

「誰も悪くなんかないのさ。銀時も、桂さんも、高杉って男も、坂本って男も、もちろん紫苑という女も。それぞれがそれぞれの感じたままに動き、そして己の魂に従ったまです。もし、何が悪いのか…それを決めるとすれば…そうさねえ…“攘夷戦争”そのものだろうさ。こんな馬鹿な喧嘩^{せんそう}さえなけりゃあ…」

「…きつと、桂さん達はずっと仲の良い幼馴染であり続ける事が出来た…」

「そして銀ちゃんは…好きな人とずっと一緒に居れたネ…ッ…」

そう：攘夷戦争関連の依頼が来た時に、銀時が縋るような思いで何かを探していたように感じたのは確かに間違いではなかったのだ。その依頼から、紫苑という存在が見つからないか：それを必死に探していたのだ。

それを思うと、また：胸が締め付けられるような思いがした。

「銀さんは：一体、どんな思いで：愛した人をその場に置いてきたんでしょうか：ッ：」

ポツリと呟いた新八の言葉。しかし：その答えを、誰も持ち合わせなどいない。

もし、その問いに答えることが出来る人物がいるとすれば、銀時かもしくは……

「……銀時は、紫苑を戦地に残すぐらいなら自分も死ぬと……。だから、何があっても紫苑は絶対に自分が護ると：そう、常に言っておった……。正直、紫苑とはぐれた後の銀時と高杉は見ていて辛かった。当時の銀時と高杉の悲痛な叫びが今でも忘れられんよ。あの時の、俺達の判断は正しかったと思っただけ……。今でも思い出すたびに、そして僅かな情報を頼りにして、銀時が紫苑の手がかりを死に物狂いで探している姿をみるたびに：もっと別の方法があったのではと後悔しない日は無い……」

その戦場で共に戦った仲間だろう。

突然聞こえてきた声に、子供達はバツと顔を上げて入り口を凝視する。そこには見知った指名手配犯で、そして銀時の友である桂の姿

があった。

「桂さん……!!」

「ヅラァ……ッ……!!」

悲しげに表情を歪める2人に、これはまた何事かと……そして何故、紫苑の名が今この場で出ているのかと疑問に思いつつ、「失礼」とお登勢に断りを入れて店内へと入った。

「どうしたんだい？まだ店は開けちゃいないよ？」

「いや、銀時の元に来たのですが……不在だったのでそのまま帰ろうとしたら……」

「なるほど、コイツらの声がココから聞こえてきたから顔を出したってことだね？」

「そんなところですよ」

苦笑しながら神楽の隣に座ると、思わず桂はギョツとする。神楽が泣いていたからだ。いや、神楽だけではない。新八も……何とも形容しがたい、辛そうな表情をしている。

「お前達、何かあったのか？というか、銀時はどうした？それに、何故……紫苑の話など……？」

紫苑という名前を出した途端、新八までもが泣き出してしまったため、桂は何事かと困り果てる。助けを求めるようにお登勢に視線を向ければ、煙草に火を点けながら、子供達から聞いた話を同じように桂にも話した。

すべての話をお登勢から聞き、なるほど……と腕を組む。

「紫苑は：無事だったか：」

「おや、随分と冷静だね。もしかしてアンタ、紫苑という女が生きていた事を知っていたんじゃないのかい？」

お登勢の言葉に子供達が「えっ!？」と顔を上げて桂を凝視する。お登勢からの問いに、小さく嘆息すると静かに口を開いた。

「攘夷戦争の時、紫苑は：俺達のいた本隊と離れた後、音信不通となりました。しかし：天人達を殲滅している途中、妙な噂を聞くようになったのです」

「噂、ですか？」

「ふむ。ココに居る皆、銀時がかつて“白夜叉”と呼ばれていたことは知っておろう？」

その問いに、一同は首を縦に振る。ただ、ただだけは分からなかったのか首を傾げていたが、「また後でちゃんと話すよ」とお登勢が言う。

「それと同じように：：：もう1つの名が、天人達の間で恐れられるようになった。もっとも、こちらは白夜叉ほど露見しなかった為、殆どの者が知らぬが：」

「その名前って何ネ：？」

“紫の髪を振り乱し、鬼のように強き者あり。その瞳に映るは、天人への怨念。その名は“紫怨の鬼”：天人を食う鬼なり：”。白夜叉同様、天人達の間で当時噂されていた謳い文句だ

「“紫怨の鬼”、ですか：」

「銀ちゃんの好きな人と同じ名前ネ!!」

「いや、リーダーの言う通りなのだが、漢字が違うのだ」

懐から髪とペンを出し、“高杉 紫苑”と流暢な文字でその名を綴

る。

「これが、彼女の名前だ。そして…」

その隣に、今度は“紫怨しおんの鬼”と綴った。

「こちらが、天人達の間で広まった誰かの二つ名だ」

「なるほど、怨念の怨の字を取っているんですね…」

「恐らく。…紫の髪など当時は、銀時の銀髪と同じくらい珍しかったからな。それこそ、高杉と紫苑しおんぐらいのもだった。だから、俺達はこの“紫怨しおんの鬼”と紫苑は同一人物ではないかという結論に達したのだ…」

しかし、そこには何の確証も無く…結局それが紫苑本人なのかどうかも分からないまま、攘夷戦争は終結。そして現在に至るという話だった。

「だが攘夷戦争終結後、今度は攘夷志士達の間で妙な噂が広がってな…」

「今度はどんな噂だい？」

「丁度、高杉の鬼兵隊が復活したという噂が広がった頃と同じ時期でした。鬼兵隊に、女の副官がいるという噂が出たんです」

「そ、それって…!!」

「ああ、俺ももしや紫苑きょうだいでは？と思った。高杉…、晋助と紫苑は兄妹だ。そして紫苑は元々、攘夷戦争時の鬼兵隊副官だった。そのポジションに紫苑が居てもなんらおかしくは無い…。晋助も紫苑のことを大層大事にしておったからな。鬼兵隊副官の席は、紫苑が抜けた後も空席のままだった…」

「それは、つまり…」

紫苑を信じている。生きていると信じている。だからこそ、副官という席を他の誰にも座らせるつもりは毛頭ない。鬼兵隊副官という席は紫苑が居てこそそのもの。それが…晋助の強い思いだったのだろう。

「晋助が何を思い、そうしたのは分からん。しかし、恐らくはそういうことなのだろうと、俺は思っている」

「けど、ちょっと待ってヨ！！何で生きてるって分かってて銀ちゃんに教えてあげなかったアルか！？」

神楽に問われ、静かに桂は目を閉じる。神楽の問いは、最もな事だ。他の誰でもない、銀時が一番知るべき事実。それを何故、銀時に教えなかったか。否、^{いな}教えたくても教えられなかったのだ。

「リーダーの言う通り、何度銀時にこの事を話そうと思ったか。だが…確証が無かった。紫苑が確かに生きているという確証が。確証を得てから、銀時に伝えるべきだと…そう思ったのだ。もう…あ奴が、酒に溺れて苦しむ姿など見たくは無かったからな…。だからこそ、紅桜の事件の時に探りを入れたのだ」

「…あの時に？」

そう…もし本当に紫苑が鬼兵隊にいたのであれば、どこかに紫苑がいるはずだと。そう思い、桂は敵の目を盗みつつ紫苑の姿を探したが…

「結局、紫苑らしき人物は見当たらなかった。その上、鬼兵隊の構成が頭^{かしら}である晋助、そして幹部達という構成だった。そこに“鬼兵隊副官”というポジションは存在しなかった…」

「つまり、鬼兵隊に紫苑さんは居ないと…そう判断したんですね？」

「その通りだ…」

結局、情報は掴めず。それどころか、紫苑は鬼兵隊に居ないという悪い情報しか得る事が出来なかった。晋助と対峙した時に直接聞くことも出来たのだが……桂自身、聞くのが怖かったのだ。

紫苑など居ないと…晋助自身の口からその答えが返ってくることを、どこかで恐れていた…。

「その後も…紫苑の情報は何も入らず仕舞いだった。それでも銀時は諦めずに、攘夷戦争関連の情報を洗っていたようだが…」

そこまで言うと、複雑な表情で桂が溜息を吐く。

「まさか、真選組に身を置いていたとは…」

一体、どのような状況でそうなったのかは分からない。最初、お登勢から話を聞いたときは捕まってしまったのかと肝が冷えたが、そうではないらしく真選組の隊服を身に纏っていたという。それはつまり、真選組の一員という事だ。

「紫苑とて…幕府が憎かった事に変わりはない。なのに何故、真選組などに身を置いているのか…」

そもそも、それを晋助が把握できていなかった事が不思議でならなかった。今の鬼兵隊には、変人謀略家・武市や、紅い弾丸・来島、そして人斬り万斎という凄腕の幹部達がいる。幹部達の力を使えば、情報を集める事など容易い。にも関わらず、真選組に紫苑がいるということが何故分からなかったのだろうか？

「それって…逆に言えば桂さんもそうですね？」

「む？何故そこで俺の名が出る？」

「そうアル。ヅラはいつも真選組に追われてるネ。それに、ヅラだって真選組に探りを入れたりしてたんでしょ？何で分からなかったアルか？」

「いや、確かに俺も真選組に追われてはいるが…俺を追ってくるのはいつも、土方や沖田だ。それに、真選組に探りなど入れたことは無いぞ？そのような自殺行為…考えただけでも恐ろしい…！！」

「アンタ、本当に高杉さんと同じ攘夷志士ですか？」

「新八君！？それ、どういう意味かなーッ！？」

「ヅラの部下と、高杉ってヤローの部下の違いネ！！きっと高杉の部下の方が優秀アル！！」

「リーダーッ！？なんでそうなるのオオオ！？俺の部下とて優秀だ！！エリザベスに何度助けられたか…！！」

「「あれはペットだろうが」」

思いつきり脱線しつつある話は、「アンタ達、まともに話しな！！」
というお登勢の毎度の怒声で見事に軌道修正された。改めて、桂は真剣に考える。

「…やはり、謎が多すぎる…」

「噂でも、鬼兵隊の副官になったという話があったぐらいですからね…」

「そういうのを、“火のないところに煙は立たぬ”っていうんだよ。もしかしたら、本当はそこに居たんじゃないのかい？」

「いえ、それだとしたら紅桜事件の時の説明が付きません…」

結局、何故紫苑が“鬼兵隊副官になった”という噂が立ったのかも、本来は恨むべきはずの真選組の元に紫苑が居たのかも、その事について晋助が何故把握していないのかも…何も分からないまま。

ただ、分かった事があるとすれば：

「それで、その…紫苑の身体は…？」

桂が聞きにくそうに問うた、それだけだった。

重い空気の中、新八が口を開く。

「最初は銀さんと抱擁していました。そしたら急に咳き込んでから倒れて、吐血…したんです…」

「それ以外のことは分からないヨ…。私達は、今から大江戸病院に行くアル。そうすればきつと何か分かるネ…！！」

新八と神楽は互いに強い眼差しで見詰め合って頷きあう。しかし、桂は複雑な表情を見せていた。

「俺もリーダーや新八君と共に紫苑の元に行きたい。紫苑の身体のこともちろん気がかりだが…銀時の精神状態も心配だ…。だが…」
「今、アンタがホイホイそこに行ってごらん。あつという間に真選組に捕まっちまうよ」

「やはりそう思われますか…」

「同然のことさね」

そう、桂は絶賛指名手配中の攘夷志士だ。新八達の話聞く限りでは、紫苑とそれに付き添った銀時は真選組のパトカーで病院まで運ばれたとのこと。そして、紫苑が現在真選組の隊士だというのであれば…そこには、彼女の身を案じた真選組隊士達がいる事だろう。迂闊には近づけない。

「クソッ……！！盟友の……幼馴染の安否すら……俺は知る事も許されるのか……ッ……！！銀時が苦しんでいる時に、俺は何も出来るのかッ……！！」

「桂さん……」

大切な友が苦しんでいる。

出来るものならば今すぐにでも駆けつけたい。不安であろう銀時の元で、「お前がしっかりしないでどうする」と叱咤するのは自分の役目のはずだった。しかし、それすら出来ない。病に苦しむ幼馴染に、大丈夫だと声を掛けることすら出来ない。

真選組という壁、そして攘夷志士という肩書きが……桂と幼馴染達の間には立ちはだかつているのだ。

「桂様」

その様子を、ただ黙って見ていたたまが突然桂を呼ぶ。一同の視線がたまへと集中した。

「私が新八様と神楽様に同行し、大江戸病院に行きます。そこで見た映像を記憶し、こちらに持ち帰れば見る事が可能です。直接は会えないかもしれませんが。ただ、見るだけでは桂様の苦しみが無くなることは無いかもしれませんが……」

不安そうな表情をみせるたまに、桂は苦笑する。

正直……たまの、その気遣いが嬉しかった。

「たま殿、頼んでも宜しいか？直接は会えずとも、その姿さえ見れ

れば…無事、生きていたという確認さえ出来れば…俺はそれだけで十分だ…」

本当に会おうと思えば、捕まる事を覚悟で会いに行く事も出来る。しかし、自分が捕まってしまえば…沢山の部下達が路頭に迷ってしまう事になる。そうなれば、攘夷云々どこの話ではない。それに、“高杉一派のストッパー”という役割も居なくなってしまったのは、間違いなく晋助が公言した通り…世界は破壊されてしまうだろう。

（結局、あの時も今も…俺は他の仲間や部下達を護ることしか出来なんだ…）

もっとも大切な幼馴染のために何もする事が出来ない自分が齒がゆかった。きつく握られた拳を、2つの手がしっかりと握る。

「新八君？リーダー？」

「桂さん、大丈夫です！！銀さんは僕達が何とかしますから！！」

「だから、ヅラは自分を責めちゃ駄目アル！！ヅラが悪いわけじゃないネ！！そんな辛気臭い顔してたら、また銀ちゃんに笑われるヨ！！それに…しーちゃんも喜ばないネ！！」

「……リーダー？しーちゃんとは誰の事だ？」

「ああ、神楽ちゃんまた勝手にあだ名を付けて…。多分、紫苑さんのことだと思います」

なるほどと笑う桂の表情は、いつものそれだった。

「では、新八君、リーダー、それからたま殿…。紫苑と銀時のことを頼んだ…」

「分かりました！！」

「任せるネ！！」

「了解しました」

力強い言葉に、ふと…桂は思う。

（銀時よ、お前は本当に幸せ者だな…）

こんなにも銀時の事を心配してくれる人がいる。銀時のために必死になってくれる人がいる。

「たまが行くってんなら、アタシも行こうかね」

「才登勢サンが行クナラ、私モ行キマス」

「何でそうなるネ！？ババア達は要らないアル！！」

「うるせえ！！銀時がどんな臍^{ツラ}抜けた面^{ツラ}をしてるか見てやろうじゃないかい！！」

「坂田サンガフラレル姿ヲ見レルト思ウト、楽シミデ仕方アリマセ
ン」

「ちょ、アンタらどんだけ歪んでんだよ！？純粹に銀さんの心配してください！！てか、銀さんフラれてませんからね！？」

攘夷戦争の時は自分達が同じように笑い合って、ふざけあったりしていた。

それが今では、見事にここに居る者達にそのポジションを取られてしまった。

しかし、桂はそれでよかったと…そう思っている。

（銀時…やはり今のお前に攘夷活動は似合わんな。このかぶき町で、新八君やリーダーと共に万事屋を営む…。それが、今の銀時の居場所だな…）

少し寂しいような気もする。桂は今もどこかで、銀時を自分の攘夷党に入れたいと思うっていた。だが何度も断られ、その度に銀時は自分達とは違う方法で護るべきものを護っている姿を見てきた。

もう二度と、紫苑の時のような悲劇を繰り返さんとするかのように。

（俺とて、何度もやり方を考え直そうと思ったさ。だがな、銀時よ…）

攘夷活動から退くべきなのかと、そう思うたびに…

『銀時！！ねえ、銀時！！』

『おいっ！！松陽先生は…松陽先生はどこだ！？』

『お前、一緒に居たんだろ！？松陽先生はどこに居んだよ！！』

あの日…

『あそこ…』

『…え…っ…？』

『松陽、先生は…あそこ…』

『……ッ……！！』

『先生ッ！！松陽先生エッ！！』

『晋助、危険だ！！』

『兄さん、嫌だよう…！！うえっ…ヒクッ…！！』

轟々と音を立てて燃える自分達の学び舎…松陽の家を呆然と見つめる銀時の姿が。

『……………た…』

『銀時？』

『俺…松陽先生に…護られた。俺…松陽先生を…護れなかった…。
俺の…目の前で、先生…殺された…』

そう呟き、感情の欠落した瞳からボロボロと涙を零す銀時の姿が…
脳裏を過ぎるのだ。

（やはり、俺は許せんよ。俺達からあの人を奪った幕府を。俺達に
癒えぬ傷を与えた、憎き天人を…許せるはずも無い…）

師を殺された恨み、攘夷戦争であろうことか幕府に裏切られた恨み、
あまつさえ刀まで奪われた恨み。

積み重なった恨みは、桂を攘夷活動という場所に留め続ける。そして
そこに集う仲間達もまた、そんな桂を慕い志を同じくしているの
だ。

（銀時…俺はお前が羨ましい。この世界を一番憎んでいるはずのお
前が、そんなにも笑って過ごせる日々が…羨ましい…）

最初は、何故そんなにヘラヘラしてられるのかと…そう思った。
真選組と銀時達の関係が腐れ縁という形容し難い形でつながってい
る事に、釈然としなかった事も事実だ。

だが…それこそ、銀時のやり方なのだと。そうやって、護るべきものを護っているのだと。

破壊する事しか出来ない自分と、護ることを一番に考える銀時。

（なるほど、どんなに俺が誘おうとも…お前が俺と手を組むはずも無いということか…）

もはや、銀時の居場所は攘夷活動の場所ではない。

銀時の居場所は…

「えっと、僕達だけで行くんだったら定春に乗って行くつもりだったけど…タクシー呼んだ方がよさそうですね」

「本当に迷惑なババア達アル！！たまたまでなら、ギリギリ定春の定員許可だったネ！！」

「うるせえ！！おら、とつとと行くよ！！」

「タクシーハ、私ガ呼ビマスネ」

「接客モードから外出モードに切り替えます」

この、騒がしくも笑顔の絶えない万事屋なのだ。

「……新八君、リーダー…ひとつ、俺からの頼まれごとを聞いてはもらえんか？」

「え、何ですか？」

「依頼料は酢昆布でヨロシ！！」

「いえ、無料でいいですよ」

「何でヨ！？これも立派な依頼ネ！！」

「依頼料が酢昆布っておかしいだろ！！つか、それだと僕には依頼

料無いよね!？」

駄眼鏡

「新八に依頼料は払わなくてヨロシ」

「コラアアアア!!! 新八と書いて駄眼鏡というルビを打つな、作者アアアアア!!!!!!!」

そんな彼らのやり取りを苦笑しながら見守っていたが、神楽には酢昆布、新八には寺門 通のニューシングルの買うという事でとりあえず落ち着く。

「それで、その頼みごとって何ネ？」

「…銀時と紫苑に、“そろそろ桜が見頃だぞ”と…そう伝えてはくれんか？」

「え、それだけでいいんですか？流石の銀さんも、それだけじゃ…」

「いや、銀時も紫苑も…これだけで分かるはずだ。…約束を、忘れていなければ…」

「約束、ですか…」

「どんな約束アルか？」

子供達に問われたが、結局どのような約束だったのか桂が口を開く事はなかった。

桂は万事屋の方で新八達の帰りを待つということになり…応接間兼リビングのソファ―に1人座っている。暫くボーッとしていたが、それに飽きたのかゴロンとソファ―に寝転がって、いろいろな思考をめぐらせる。

（紫苑は今でも晋助と連絡を取っているのだろうか？もしや、紫苑の真選組入隊はスパイ行為なのか？いや、だが…それにしてはあま

りにも危険すぎる。何より、鬼兵隊の副官自らが行うような事ではないだろう。それに、お登勢殿の話によれば銀時も……紫苑が真選組に居たということは知らなかったようだな。……あんなにも真選組と関わってきた銀時が気付かなかったということは……真選組は紫苑という存在を隠していたのか？だが、銀時が攘夷戦争で白夜叉と呼ばれていたことまでは……まだ、真選組の連中には勘付かれていないはず。紫苑も簡単には話したりしないだろう……。……やれやれ、本当に皆……好き放題・やりたい放題だな……)

それでも、そんな幼馴染達を……盟友を心の底から憎むことなど……出来ない。

(どこかで、信じているからなのだろうな……)

桂自身が、その繋がりを信じているから。

晋助とは結果的に、袂を別^{たもとわか}つてしまったが……それでもまだ、何とか説得が出来ないものかと考えている。次に会った時は全力でぶった斬ると宣言はしたものの、恐らく……それは出来ないだろうと桂は薄々思っている。それは桂だけではなく銀時もそうなのではないかと思っ

た。それ程までに、銀時・桂・晋助・紫苑・坂本という5人の絆は強いのだ。

「晋助、お前とて忘れたわけではあるまい。あの約束を……。萩の……寺子屋の桜の木の下で花見をしようという約束を……」

こんな未来が待ち受けているとは思ひもしなかった為、あの時は笑いながらそんな約束もしたが……今や晋助と桂は指名手配犯。恐らく

はそれも難しい事だろう。ましてや、紫苑はその指名手配犯を捕まえる真選組の隊士だ。

「本当に…未来とは予想のつかんものだな…」

何故、晋助の元には行かず…事もあるうに真選組の隊士になってしまったのかと嘆息する。

「紫苑、お前は知っているか？お前が攘夷戦争の時に買った2枚の着物…。その片方を、晋助が好んで着ていることを。お前を忘れまいと…その身に纏っている事を。…そして、もう1枚は…」

紫苑の忘れ形見となった、蝶柄の2枚の着物。

同じ柄で色違いの2枚の着物の行方…

1枚は兄である晋助の元に。

そして、もう1枚は…

「まあ、花見の時の楽しみにしているといいさ…」

万事屋の開放された窓から、ひらりと桜の花びらが舞い込んでくる。

「…夜桜の下で月見酒…。頃合だぞ…。月見酒がしたいと最初に言ったのは晋助、お前だ。まさか、それを無下^{むげ}にするなどという無粋な事はしないだろうな…？」

それは、約束の時間が近づいている事を知らせているかのようにだった。

【第九訓】 それぞれ、想うは同じこと（後書き）

何気にお登勢さんの口調って難しいという事に気付きました^^;;
別の小説でもお登勢さんは結構出て来るから慣れないとなあ…;

さて、次回からいよいよ集まるべき人が紫苑の元に集まる…予定☆
（予定かよ!?!）そしていよいよ、ラストに向かって進みます!!
さて…死ネタになるか、回避するか…^^;;（苦笑）

【第十訓】隣と居場所（前書き）

ちよつと時間が遡ります！！銀さんが壁を殴って「何が攘夷戦争の英雄だ！！何が白夜又だアアア！！」と乱心するちよつと前からスタートです！！今回は真選組に視点を当てつつ、全員に揃ってもらおうと思いますb

銀..いやあ、銀さんそんなに乱心してないからね。勝手に捏造すんな、コノヤローッ！！！！

あ、ちなみに大江戸病院は携帯使用可能という設定で行きます！！

紫..都合よすぎだと思うなあ、それ..。まあ、確かにそういう病院も増えてるけど..

いやほら原作でも、大江戸病院でさっちゃん携帯使ってる描写ありましたからね！！

銀&紫..そういえばそんな事もあったねえ..

銀..てか、この話での俺..なんか、廃人みたいになってる..（不満）

紫..私なんてベッドに寝たきり..（不満）

銀&紫..刀持たせろ、戦わせろ、攘夷戦争時代に戻せゴルァ

攘夷戦争時代には、もう戻りません（笑）あとは、ヒロインの生死をどうするか決めるだけです！！その主導権は..私にありますb

紫..ナマ言っすんませんでしたッッ!! (土下座)

銀..生かしてやって下さいッッ!! (テラ必死)

さー、では物語スタート☆

【第十訓】隣と居場所

処置室から集中治療室へと運ばれた紫苑の姿を、ただ銀時は呆然とガラス越しに見ていることしか出来なかった。

何が起きている？

何が起きた？

何故こうなった？

まさか、このまま……目を覚まさないのでは？

真っ白の部屋に横たわる紫苑の姿を見て、何度も何度も同じ言葉が銀時の脳裏を過ぎる。ただ呆然と立ち尽くしている銀時の姿を、何とも言えない表情で土方と沖田は見つめていた。

そして、銀時と同じように土方と沖田も考えていた。

何故もっと早くにこの事実が分からなかったのかと。

まるで運命の悪戯とでも言うかのように、銀時達万事屋と真選組が接触する時：紫苑は決まって別の任務についていたり、もしくは体調が優れずに床に臥せていたりした。また、近藤・土方・沖田を始めとした真選組隊士の殆どが、銀時のことを名前ではなく“万事屋”と呼んだり“旦那”と呼んだりする。それは紫苑の前でも例外で

はなく、また紫苑もそれが何という名前の人なのかとか、その容姿とかを聞いてくる事も無かった為、万事屋・坂田 銀時の情報が紫苑に流れる事は無かったのだ。また同時に、紫苑も銀時の名前は一切口にしなかった。それは恐らく、かつて攘夷戦争に関わった人間の名前は出すべきではないと…そう思ったのだろう。指名手配となっている桂や、自分の兄である晋助のことは、既に真選組は把握していた為、そこは偽ることなく出していた。しかし、婚約者の名前だけはいつも“あの人”や“彼”としか言わなかったのだ。近藤達も、紫苑がそれを思っであえて名前を出さないのだろうと、興味本位で聞くような事はしなかった。

故に、双方が紫苑の婚約者の情報を得る事が無かったのだ。

まさかこんな形で再会するなど思ってもいなかった。

そしてこんな最悪の形で再び引き裂かれるなど…誰が想像しただろうか？

本人達を始めとした誰もが、恐らくは予想できなかったに違いない。このような悲しい現実が待ち受けているなど…。

シンとした何とも言えない空気。銀時が居ればいつも騒がしくなるその場所が、やけに静かに感じる。土方も沖田も…何も言えず、ただ銀時と紫苑のことを見ていることしか出来なかった。

その何とも言えない空気を裂いたのは…

「トシ、総悟！！」

「…近藤さん…」

紫苑が倒れたと聞いて駆けつけた近藤の慌てた声だった。ふとそこに、本来であればいないはずの人物がいることに気付き首を傾げる。

「万事屋…？何故ここに…？」

胡乱気に聞く近藤。しかし、銀時はその言葉に全く反応を示さず：ただ呆然と、集中治療室に横たわる紫苑を見つめているだけだった。もう一度、銀時を呼ぼうとした近藤に土方が待ったを掛ける。

「近藤さん、ちょっと話しがある。総悟、ここは任せた。何かあったら俺の携帯に連絡を入れろ」

「分かりやした。紫苑のことも旦那の事も…何かあったらすぐに連絡しやす」

いつもは素直じゃない総悟も、流石にこの状況ではそんな馬鹿げたことをしている場合ではない事ぐらい理解していた。今、最も危険なのは紫苑の容態よりも、銀時の精神状態なのだ。

「頼んだぞ」

「はいよ」

そして近藤と土方は、自販機の設置してある待合室まで移動する。

「トシ、何があった？」

何があったと聞かれ、何から話すべきなのかと…土方は思う。だが、ここはやはり真選組隊士である紫苑の身体について優先的に話すべきだろうと、土方は口を開いた。

「まずは紫苑の容態についてだが、いつもの発作だ。紫苑の奴、走

っちまってな。それが原因で発作を起こしてしまったようだ。俺が付いていながら…」

「いや、トシのせいじゃないさ。だが…紫苑自身、走れば身体に負担が掛かる事は分かっている筈だ。紫苑が走らなければならないほどの出来事が…何かあったのか？」

思えば治療室の前に万事屋が居たことも気になる、と付け足せば「ここからがある意味本題だ」と…土方が話し始めた。

「単刀直入に言うが…近藤さんも、紫苑に婚約者がいた事は知ってんだろ？」

「ああ、確か攘夷戦争で共に戦った仲間だったとか。しかし、離れ離れになって消息どころか生死も不明と聞いていたが…それがどうかしたのか？」

「見つかったんだよ、その婚約者が」

「…おい、トシ？まさかとは思うが…!？」

「…万事屋だ…」

土方の言葉に、近藤は驚愕する。今…何と言っただろうか？目の前にいるこの戦友であり、それと同時に朋友である彼は…今、何かとんでもない事を口にしなかっただろうか？しかし、土方がこんな悪い嘘など吐く筈がないことは、他の誰より一番近藤が分かりきっている。

「……こんなに近くに居て…ずっと、会えなかったとは…ッ…」

「ああ、俺ア…紫苑に何て謝ればいい？万事屋と何度も何度も会ってて、それでいて紫苑は会いたはずの奴にずっと会えず…それどころかその生死すら分からず…その身を案じていた。俺達が当たり前のように会っていた万事屋に、他の誰でもない紫苑がずっと会えなかったなんて…こんな現実を…ッ…」

土方が悔しそうに表情をゆがめながら拳を握る。もし自分が、銀時のことを一度でも名前で呼んでいれば、それで紫苑は分かったはずだ。しかし、土方自身“万事屋”と呼ぶことが定着していた為、名前で呼ぶようなことは全く無かった。否、真選組の隊士全員がそうだろう。

「トシよ…あまり自分を責めるな。……誰が悪いわけでもない。今回の事は…決して、誰が悪いわけでもないんだ…」

強いて言うならば、こんな残酷な運命を与えた神という存在だろうか…？

真選組と万事屋。

こんなにも近くにいて、本当に会いたい者同士が会えずに長い間、想い続けていた。

「そりゃあ…紫苑も走りたくなるだろうさ。ずっと…探していた大切な人とやっと会えたのだからなあ…」

そして、銀時もまたそれは同じだろうと近藤は思う。

「…万事屋の野郎…紫苑を抱きしめた時、泣いてやがった…」

「……つまり、万事屋もずっと紫苑のことを探していたという事か…」

「じゃなけりゃ、あんなに取り乱したりはしないだろう。あの様子じゃ、恐らくは万事屋も紫苑の生死については把握しきれていなかったんだろ。そりゃ、泣くほど嬉しいだろうよ…。そしてその会いたかった女が、目の前で血を吐いて倒れたら……取り乱すだろうよ」

…」

「万事屋の目の前で倒れたのか!？」

「万事屋の腕の中で倒れた。…幸せそうな顔をしてな…」

あれだけの吐血をしながら、しかし紫苑は嬉しそうに笑っていた。
否、笑いながら泣いていたのだ。そしてその口からは確かに言葉が
零れた。

——どうして…？

何に対する疑問か、など…考えずとも分かる。

どうして、こんなに傍にいたのに会えなかったのだろうか？

どうして、こんな時に限って倒れてしまったのだろうか？

どうして、折角会えたのにその命は尽きようとしているのだろうか？

どうして？

たった一言の言葉なのに、その一言には色んな意味が含まれており、
何気なくいつも使っているその言葉は……自分達がいつも使ってい
る以上に、とても重い。

「……それで、万事屋は…あんな状態だったわけだな…」

「ああ、あれはまだマシな方だ。今の万事屋は正直言って……何を
仕出かすか分からねえ。病院に着いてすぐ、処置室に入っていこう
とする医者に掴み掛かって、「紫苑を死なせたら俺がテメエをぶっ
殺す」と言いやがった。その殺気に当てられて、総悟が抜刀しそう
になった。あの時の万事屋は…正直、俺でも恐ろしいと感じたぐら

いだ…」

「…それで、総悟をあの場所に残してきたのか？」

「ああ、紫苑の身体はいつもの発作らしいから暫くすれば薬も抜けて目が覚めるそうだ。容態が急変することも無いというのが今回の医者の見解だな。今、一番危険なのは…精神状態の不安定な万事屋だ。1人放置してたら、何を仕出かすか分からねえ。俺じゃあすぐに頭に血が上るだろうし、万事屋も俺相手だったら形振りかまわねえ。だが、総悟と万事屋は…まあなんか得体の知れねえ仲みただから…殺伐とした殺り合いにはならねえだろう」

「なるほど…それで総悟も黙ってその場に残ったという事か…」

誰もが危惧している事。それは、紫苑の身体もだが…銀時の精神状態も同様なのだ。紫苑から聞かされた攘夷戦争時の話では、紫苑は本隊と離れる直前に婚約者…つまり銀時と会話を交わしたと言っていた。皮肉にもそれは、互いに“絶対に死ぬな”という約束であり誓いだったという。

「今の万事屋には、誰の言葉も届かねえかもな…。もし、その言葉が届くとすりゃ、それは…」

「紫苑の言葉のみ、か…」

「ああ…。万事屋のガキ共の言葉ですら、今の万事屋には届かないかもしれねえ」

「その場に子供達はいたのか？」

「居た。そして、紫苑が倒れるところまでしっかり見ている」

「……それで、その後は？」

「パトカーは定員オーバーだから乗せられないと言ったが、その辺りは緊急事態だと察したんだろう。黙って頷いてた…」

恐らく、あんなに取り乱した銀時を見たのは子供達とて初めてのはず。その時の子供達の表情が、それを物語っていた。その後どうし

たのかは分からないが、恐らくはこの大江戸病院に訪れるだろう。

「…トシ…こんな事是不謹慎かもしれんが…紫苑の命は…」

「ああ、今年の春。つまり“今”が…そのタイムリミットだ」

思えば、医者への反対を押し切って入院することなく屯所で過ごすことと決めた時は、医者へ「その分、命の保証はないということだけは覚悟しておいてください」と言われた。しかし、紫苑はまるでまだ死ねないと言わんばかりに、何度倒れても、何度吐血しても絶対に生きる事を諦めなかった。

今思えば…会いたい人に会うまでは死ねないと…そう思っていたのかもしれない。

「この事実を万事屋には…？」

「言えるわけねえだろ、今の野郎に。何仕出かすか分からねえぞ？」

「しかし…言わねばならんことでもある。万事屋が落ち着いた時に…きちんと話そう。そして、紫苑の意識が回復した時に…確認をしよう」

「確認？」

土方が聞けば、近藤は少し寂しそうに笑いながら言う。

「真選組に残るか、除隊するか、だ…。俺達真選組は、紫苑を家族同然に慕ってきた。これは確かだ。だが、トシよ…考えてもみろ。紫苑はいつだって、遠くを見つめて想いをはせていた…。婚約者を…万事屋を想ってだ。その万事屋にようやく会えたというのに、最期の時間を真選組で過ごさせるわけにはいかんよ…」

例え残り少ない時間でも、“家族同然”に過ごしてきた者達と過ご

すより、離れ離れになってもずっと想い続けていた“婚約者”と過ごした方がずっと幸せなはずだ。

「…そうだな…」

いつの間にか、真選組には紫苑がいて当然だと思う自分達がいた。

しかし本来であれば、紫苑の居場所は真選組ではなかったのだ。

「帰してやろう…本来の居場所に。“坂田 銀時の隣”という…本来の居場所に…」

「…ああ…」

「それを、紫苑に選ばせよう。これは俺達が決める事ではない。紫苑自身が決める事だ…」

その時、紫苑がどんな選択をしても自分達は笑って見送ろう。

自分達はいつだって、紫苑の幸せを願ってきたのだから。

近藤と土方が話している頃…集中治療室の前には、呆然と立ち尽くす銀時と、通路の壁際に設置されている長いすに座っている沖田の姿があった。

ぼんやりと紫苑を見つめて立ち尽くしている銀時の背中を見つめながら、沖田は1人考えていた。

（旦那…。アンタ、一体何者ですかイ？前に土方さんが、アンタの事を山崎に調べさせたことがありやした。そんな時は、結局シロとい

う判断でしたが…あの殺気は異常でしたぜイ？普段のアンタからはとても想像がつかねえような殺気で…俺ア、思わず抜刀しそうになっちまった…」

そして紫苑の言葉を思い出す。

『私の大切な人は、凄く強くて、凄く優しい人だった。怖いって言う子達も多かったけど…とても優しく、強くて、そして…とても脆くて、悲しい過去を背負っている人なの。この世界を一番憎んでいる人といっても過言ではないわね。けれど…その人は、コタローや兄さんのように世界をひっくり返そうとはしていない。その理由が…私には分かるような気がするの。きつと、あの人にとって憎むべき世界でも、この世界にはそれ以上に大切な思いが沢山あるから…だから壊せないの。あの人は優しい人だから、自分が傷付けられることよりも、仲間が傷付けられることを嫌がっていた。自分が辛い思いをするより、仲間が辛い思いをする事を辛く感じていた。…私が好きになった人は…私が愛した人は…そういう人なの…。真っ直ぐで、単純で…けど、誰よりも…傷付けられることと、失う事を恐れている人。だから、いつも口癖のように言っていたわ…』

「絶対に…護る、って…約束、してたのにな…」

（ああ、確かに紫苑の言う通りだぜイ。いつも旦那は口癖のように言ってた…。眼鏡やチャイナを絶対に“護る”って…。強いお人だと思っていたが…そいつア違ってたんだ…。旦那が護ることを第一に考えていたのは…“もう二度と何も失わない為”だったんですね…）

失った時の失望、護れなかったという絶望。

約束を果たせなかったという後悔。

それらを背負い続け、しかし銀時は…現在^{いま}、己が護るものの為^{ため}に何
度も立ち上がってきた。

「何も…護れなかった…」

しかし、銀時は横たわる紫苑を見つめて何も護れなかったと言う。

（旦那、そいつは違うぜイ？万事屋のガキ共も、俺達真選組も、そ
して紫苑も…アンタに護られてるじゃありませんか。紫苑を護れ
なかった？馬鹿を言っちゃいけやせんぜ？旦那という存在があつた
からこそ、短い寿命を必死に延ばしたんでイ。旦那に会いたいとい
うその気持ち^{こころ}が、紫苑を護ったんでさア。だから旦那…）

「すまない、紫苑…」

「そんなに、謝らないでくだせエ…」

もう何度目になるだろうか？2人きりになったこの空間で、銀時が
謝ったのは…これで何度目だろうか？その度に、辛そうに表情を歪
めながら…何度も何度も謝った。

「旦那…アンタが悪いわけじゃないんでさア…」

「ごめん…」

「もっと早くに、旦那と紫苑を会わせてあげられなかった…俺達が
悪いんでさア…」

しかし、どんなに沖田が声を掛けても…

「本当に……ごめんな……。あの時……俺と晋助がもつと……粘っていれば……、ヅラと辰馬を説得できていたら……。ごめんな……」

その声が、銀時に届く事は無かった。

（辛エ……、そして……痛エ……。旦那……、アンタが背負ってる苦しみに比べたらこんなもん、針で刺された程度の痛みかもしれやせん。けど……俺ア……）

目を閉じれば、死んだ魚のような目で自分を見つめながらワザと名前を間違え、楽しそうに笑う銀時の姿が過ぎる。万事屋の子供達以上に子供っぽい表情を見せる銀時の姿が過ぎる。

そして……

何も言わずに、自分達を助けてくれるその強い姿が、脳裏を過ぎる。

だからこそ、今の銀時は見ていらなかった。

何度も何度も謝り続ける銀時の姿は、見ていて辛くそして苦しかった。

銀時の苦しみと比べれば、本当に針に刺された程度の痛みだろう。

それでも……

「やっぱり、痛いのは嫌でさア……。だから、旦那……。謝るんじゃないくて、紫苑の為に笑ってやってくだせエ……。俺ア、旦那のそんな辛そうな顔を見るのは嫌でさア。だから……いつもみたいに“総一郎君

” っ て言っ てくだせエ。そしたら、俺もいつも通り、“ 総悟でさア ” っ て返しやすから…”

いつもとは違う、ちょっと困ったような笑みを浮かべる沖田。しかし、そんな沖田の表情も、そして言葉も…銀時には届いていなかった。

そして改めて、思う。

坂田 銀時にとって、高杉 紫苑は本当に大きな存在だったのだと。そしてまた、逆もしかりだったのだと。

（真選組から抜ければ切腹…。しかし、志願して局長・副長の合意が得られての脱退だったら局中法度には触れねエ…。紫苑、俺ア…この先も紫苑と一緒に屯所で過ごしたいと思ってる…。けど…やっぱり、紫苑の隣は旦那じゃないと駄目でさア。もう、命の残りは少なえかもしれないが…それでも…いや、だからこそ…）

心の底から紫苑が笑って過ごせるというのであれば、例え近藤や土方が反対しても…。自分が処分を食らってもいい。

「紫苑…俺が絶対に旦那の隣に戻してやりまさア…」

自分にとって、どこか優しい姉のような存在だった紫苑。本当の姉であるミツバと同じくらい慕っていた。だからこそ、紫苑には心の底から笑っていて貰いたいのだ。

（ああ…旦那が何でモテないのか分かったぜイ…。モテないんじゃないエ…、自分から興味を示さなかっただけなんだ…。アンタの隣は、ずっと紫苑の為に空けていたんですねイ…）

常に銀時は「天パだからモテない」と言っていた。だが、明らかに好意を寄せている女性が多かった。モテないなんて言ってるが、どれだけ鈍感なんだと沖田自身何度か思った事があった。しかし…そうではない。銀時の眼中には紫苑以外の女性は、“ただの女性”でしかなく…恋愛の対象ではなかった。

モテなかったんじゃない、自分から遠ざけていたのだ。

（全く…旦那を好いている女達が泣きやすぜイ？）

しかし、それが銀時の選んだ道というのであれば…きっと、誰もが納得するだろう。それほどまでに、坂田 銀時という男は皆に慕われ好かれているのだ。

「……ずっと…一緒に居るって…約束、だったのにな…」

だったらその約束を今から果たせばいい…。

命のタイムリミットはもう残りわずかかもしれない。だが…

「旦那…その約束は今からしっかりと護ればいいじゃないですか…。
紫苑だって、きっと喜びますぜイ？」

何せ、紫苑は諦めていたのだから。

自分の想い人は素敵で優しい人だから、その隣にはきっと素敵な女性がいて、もう自分の事などきっと忘れていると…。もう、銀時の隣は自分の居場所ではないのだと…。

（紫苑：旦那は忘れてなんかいなかったゼイ？それどころか、紫苑だけを想い続けてる…。俺ア、2人が羨ましいでさア…。こんなにも綺麗な愛ってやつを、初めて見やしたゼイ…？）

いつもよりも、とても小さく見える銀時の背中を見つめながら…沖田は思う。

こんなにも綺麗で、そしてこんなにも悲しい愛など…本当に初めてだ、と…。

ひたすら謝り続ける銀時と、その度に声を掛ける沖田。反応が返ってこないと分かっている、沖田は決してそれをやめなかった。土方が、自分にこの場に残るよう指示した理由は、そういう事なのだろうと…そう思ったからだ。そんな事を何度か繰り返していたら、どうやら話を終えたらしい近藤と土方が戻ってきた。土方は銀時を一瞥した後、沖田に視線をやる。口に出さずとも、土方が言いたい事は分かっていた。だから、沖田も言葉にすることなく…ただ首を横に振って答えるだけだった。

（この様子じゃ、紫苑もまだ目を覚ましてねえな。そして万事屋も変わらず、か…。まあ、何も仕出かさなかっただけマシってところだな…）

本当に、先ほどのキレ方は尋常では無かった。沖田だけでなく、下手すれば土方も刀に手を掛けていたかもしれない。医者から銀時を引き剥がすのにどれ程苦労したことか。

と同時に、土方は思った。

(……紫苑の想い人は攘夷戦争で背中を預け合った戦友でもあったと聞く。つまりは…万事屋がその戦友…。なるほど、それなら桂や高杉との繋がりにも納得がいくって話だ…)

だが、攘夷戦争参加者の中で名前が表立って有名になったのは、“狂乱の貴公子・桂 小太郎”、“鬼兵隊総督・高杉 晋助”、“鬼兵隊副官・高杉 紫苑”、そして現在は攘夷活動とは無縁の快援隊社長である“坂本 辰馬”。この4名だけだ。そこに“坂田 銀時”の名は無い。しかし、さっき土方が感じた殺気は…とても、尋常ではなかった。それに、紫苑自身も言っていたのだ。

『私の大切な人はね、私達の中では一番強かったのよ？子供の頃からそう。私なんて、何度かしか剣で勝てたことは無いわ』

どこか得意げにそう自慢していた。それほどの腕を持ちながら、何故…その名前は露見しなかったのだろうか？

1人思案している土方だったが…かすかに、謝罪以外の言葉が聞こえた。

「こんなに待ち続けて…こんなに探し続けて…」

悔しそうに、そして悲しそうに顔を歪めながら…銀時は言う。

「何で…ッ…!!」

その言葉に、真選組の3人が同じ事を思った。

ああ、どうして…

もっと早くに、この2人を会わせてあげられなかったのかと…。

——ダンッ!!

銀時が、拳を握り壁を殴る。このまま暴れるのではと、一瞬土方は構えた。

「旦那？」

沖田は心配そうに名前を呼ぶ。

しかし、やはりその声は届かず…

「何が攘夷戦争の英雄だ…何が白夜叉だ…!! 結局、俺ア…」

銀時はその場に崩れ落ち…

「最後の最後まで…何も護れなかったじゃねえか…ッ…!!」

口元を自嘲に歪め、頭を抱えて静かに涙を流していた。

その場に居る誰もが、銀時の言葉に耳を疑う。

今…この男は何と言っただろうか…

（白夜叉…だと…!!? 天人は勿論のこと仲間からも恐れられていたという…、あの白夜叉か…!!? 攘夷戦争後期でもっとも強かったと

される英雄と言われた者ではないか……!!)

(万事屋が……白夜叉……!!? 二つ名が先走りしすぎて本名すら分
らず……攘夷戦争後は、その生死すら分かっていなかったという、あの
伝説の……!?)

(ああ、だから……あの時の殺気は凄かったんですね……。紫苑が“
一番強かった”って自慢してたんですね……。納得でさア……)

銀時の発した“白夜叉”という言葉。真選組という立場上、それは
是が非でも今すぐに問い詰めたいところだった。だが……

(……こんな時に、んなことが出来るわけねえだろ……ッ……)

肩を震わせて泣いている銀時に、尋問をするような真似など……いく
ら“鬼の副長”と恐れられる男でも……出来る筈がなかった。

それは、その場に居た近藤もそして沖田も同じで……結局、目元を抑
えて泣き崩れている銀時に何と声を掛けたらよいのか……否、^{いな}声を掛
けるべきなのか……そう躊躇^{ちゅうちよ}していた。

その時……

——銀……時……

声が聞こえたような気がした。自分の気のせいだろうか、沖田は
首を傾げる。しかし、その声は確かに……知った声。自分が姉のよう
に慕っていた大切な“家族”の声。

——みんなで、帰ろう…萩に…

今度ははっきりと聞こえた。聞き逃してしまいそうなほど、小さな声だったが…それは確かに紫苑の声だった。慌てて顔を上げて、集中治療室で眠っている紫苑に視線をやる。すると、自分達の方を見つめ…必死に口を動かしている紫苑の姿があった。紫苑と目があった沖田は驚いたように目を見開くと、紫苑はフワリと笑う。紫苑が何か言ったが…残念ながら声は聞こえない。しかし、その口の動きから“大丈夫”だと…そう言っていると分かった。

「近藤さん、土方さん!!」

「…どうした、総悟?」

「病院だぞ、あんまりデケエ声を…」

首を傾げる近藤と沖田を注意する土方だったが、慌てて2人の肩を叩きながら沖田が集中治療室を指差す。その意味が分かった2人はすぐに視線をそちらに向けと、力なく笑っている紫苑の姿があった。その表情はどこか、申し訳なさそうに笑っているようにすら見える。

「……やれやれ、手間掛けさせやがって…」

一体、どちらに対しての言葉なのか…。否、^{いな}恐らくは双方に向けての言葉なのだろう。土方は崩れ落ちたまま泣き崩れていた銀時に、視線を合わせるように座り込む。

「おい、万事屋。テメエがしっかりしねえでどうする。……それじゃあ、紫苑から笑われるぜ?」

「……………」

やはり、反応は無い。

（やれやれ、いつものコイツなら憎まれ口の1つや2つは返ってくるのに…調子が狂っちゃうな…）

バリバリと頭を掻きながら、銀時の腕を掴む。そしてその耳元で：

「紫苑が目を覚ました。お前の顔をしっかりと見せてやれ。いい歳したオッサンが泣いてるだらしねえ面^{ツラ}をな。そして紫苑に笑われろ」

そう言っ、乱暴に立ち上がらせる。その時：

「うおおおっ、紫苑んんっ！！無事でよかったあああ！！」

横から有り得ない量の涙を流しながら、そして有り得ない声を出しながら泣いている自分の上司の姿と：

「近藤さん、静かにしなせエ。ここ、病院ですぜイ？…駄目だこりゃ、聞こえてねえや…」

その上司を何とか黙らせようとしている部下の姿があった。そんな2人に苦笑しつつ、改めて銀時に視線を向ける。

その表情は…驚いたように目を見開いていて、思わず土方は溜息を吐く。

（やっぱり、今回は命に別状が無かった事だけは伝えるべきだったか…？）

まるで永遠の別れを覚悟していたかのようなその表情に、土方が思

わず嘆息する。銀時はガラス窓に手を付き、その中に横たわっている紫苑を静かに見つめていた。そしてまた、紫苑もそんな銀時を見つめている。

「銀時：私は、大丈夫よ：」

かすかだが：紫苑の声が聞こえた。その声にまた：銀時は泣きそうな表情を見せたが、それを隠すかのように着流しで己の濡れた顔を、ごしごしと拭う。

（バカヤロウ、今更んなことしたってバレバレだろうが：）

だが、次に見せた銀時の表情は：土方が見てきた中で、一番“らしくない” と思ってしまうほど：幸せそうに笑う銀時の笑顔だった。

「俺、医者呼んでくる！！」

「近藤さん、落ちつきなせエ……。って聞いてねえや：」

後ろはとても慌ただしいのに、まるでそれを感じさせない銀時と紫苑。

まるでそこだけ、空間が切り取られたかのような錯覚にすら陥ってしまう：。

もう、自分が支えなくても己の足で立っていられるだろうと判断した土方は、掴んでいた腕から手を放そうとした。

その時：

「やっと……会えたな……」

銀時の声が聞こえた。

優しく、そしていろんな思いの詰まった一言。

たった一言の言葉だがしかし、その一言にはきっと銀時のいろんな気持ちが籠っているに違いない。

「……たく……」

やれやれと息を吐きながら、銀時から離れ沖田の元に行けば、彼も苦笑している。

「とんだお騒がせカップルだな、コイツらは……」

「けど、俺アいいと思いやすぜイ？ 旦那らしいじゃないですかイ……」

「お騒がせで、迷惑かけっぱなしなところとか特にな……」

「違いねえや……」

そんな話をしていると、恐らくは無理矢理引っ張ってきたのだろう。近藤が医者を引きずるようにして連れてきた。

「……まあ、こっちも人の事は言えねえか……」

「俺は止めたんですぜイ？ それでも聞いてくれなかったんでさア……」

「ああ、万事屋も何を仕出かすか分からねえが……今の近藤さんも何を仕出かすか分からねえな」

そういえば身近なところにもお騒がせな人が1人居たと、頬を引き攣らせる土方である。近藤は必死に医者に目が覚めたと伝えていて、それに医者が「落ちついて下さい」と必死に宥^{なだ}めていた。

「つたく、この人は…」

隊士達を何より大事にするが故に、こんなにも必死なのだろう。いや、こんなところで紫苑を死なせたくはない、死なせてはいけないとそう思っているのだろう。近藤 勲とは…そういう男なのだ。

今度は近藤を落ちつかせなければとか、何で自分はこんな役回りばかりなんだとか思っていたら、パタパタといくつかの足音がこっちに近づいてくる。

（万事屋のガキ共か？にしちゃ、足音の数が多いような…）

もうここまで来ると、否が応でも嫌な予感しかしないと再び頬を引き攣らせた。

最初に姿を見せたのは、新八と神楽だった。その後を追うように、お登勢とキャサリン、そしてたまの姿が。

「おいおい、また随分と大所帯だな…」

わざとらしく溜息をつけば、新八が申し訳なさそうに苦笑する。

「すみません、本当は僕と神楽ちゃん、あとたまさんだけで来るつもりだったんですが…」

そこまで新八が言うと、それ以上は何も言わなくていいと…分かっていると言わんばかりに土方が手を上げて制した。

（大方、万事屋の事が心配だったんだろう…）

何となく、子供達だけではなく下の階に住むスナックの面々も来る事は予想出来ていたため、それを咎める事はしなかった。

（けどまあ、どこかで…もしかしたら桂と一緒に来るかもしれないか…）
と思ったが…さすがに、奴もそこまで間抜けではないか…）

この場に来ていれば即刻逮捕してやったものを、と内心悪態を吐きながら子供達へと視線を向けた。

「……銀ちゃん……」

その子供達は…

「銀さん…ッ…」

どこか辛そうに、表情を歪めている。思えば、彼らと別れて子供達がココに来るまで随分と間が空いたような気もする。そして子供達のこの表情。もちろん、視線の先に居るのは銀時だ。その銀時は…今にも泣き出しそうな、しかしそれでいてとても幸せそうな顔をしている。

（こっちはこっちで何かあったのか…？）

何故子供達がこんな表情をしているのか…。 “銀時を誰かに取られた” というような下らない嫉妬心を持つような子供達ではないことくらい土方も把握している。だからこそ、この子供達が何故こんな…今にも泣き出しそうな表情かおをしているのか分からなかったのだ。

「おう、チャイナ。随分ヒデ顔をしてるじゃねえか…」

いつものように沖田が神楽に喧嘩を吹っ掛ける。それを「やめろ」とため息交じりに止める土方。いつもだったら、それに神楽が掴みかかるのだが……その反撃が無い。

何だ……？ 本当に何事だ……？

沖田までもが呆けてしまう。そして、土方と沖田は顔を見合わせ……一番事情を知っているであろうお登勢に視線をやった。一方のお登勢は、真選組の2人から視線を向けられ、小さく嘆息する。2人とも口にはしていないが、子供達のこの様子について疑問に思っているであろうことはすぐに分かった。

お登勢がそれについて、口を開きかけた時……

「僕達は……本当に、何て馬鹿な事を思ってしまったんだろう……」
「銀ちゃん……ごめんヨ……。私、一瞬でも銀ちゃんのこと、見損なったとか……ッ、本当にごめんネ……ッ……」

子供達が先に口を開いた。その言葉は、後悔と謝罪の言葉。

(……おいおい、本当に何があったんだよ……？)

ますます分からないと表情を歪める土方だったが、子供達はすぐに銀時のそばに駆け寄る。そして神楽が銀時の右手を、新八が銀時の左手を取った。

「…………紫苑……ごめんな……。ずっと、独りにさせちゃって……。けど……護るから……、何があっても……絶対に俺が護るから……。もう一度、護らせてくれ……」

しかし、それに気付いていないのか…ただ真つすぐと、集中治療室を見つめたまま銀時は呟く。

（やっぱり…ガキ共でも今の野郎には……）

紫苑が目を覚ました事で、少しは落ち着いた銀時だったが…それでもまだ、視界には紫苑しか映っていない。溜息を吐きながら、今度こそお登勢に事情を聞こうとした時…

「そうネ、銀ちゃんがすっかり護ってあげればヨロシ。だから、そんなに泣かないで、銀ちゃん…」

「銀さん…僕達、家族じゃないですか…。何でこんなに辛いこと、黙ってたんですか…。1人で背負ってカッコつけて…」

「昔、マミーが言ってたネ。嬉しい事は一緒に喜んで、悲しい事は一緒に悲しむのが家族アル。私達…家族でシヨ？銀ちゃん…銀ちゃん、独りじゃないヨ…」

「攘夷戦争の時の仲間に比べたら頼りないかもしれないけど…僕が居ます」

「私も居るネ。だから……」

泣かないで…大切な人の為に、笑ってあげて…

子供達の言葉に、その場にいた大人達は誰もが息を呑んだ。自分達よりもはるかに年下の子供達は、自分達大人よりもしっかりと銀時を支えようとしている。

どうしたらいいのか分からないと、何か仕出かさないようにと見ている事しか出来なかった自分達とは大違いだと…土方は思う。

声を掛ける事しか出来なかった自分とは大違いだと…沖田は思う。

そりゃ、万事屋も反応しないはずだ…。

「銀さん…」

「銀ちゃん…」

ああ、やっぱり旦那のところのガキ達には敵いやせん…。今回ばかりは負けを認めまさア…。

「……、神楽…？…新八…？」

だって…どんなに俺達が声を掛けようとも、反応を示さなかった万事屋が…

ガキ達の言葉で、我に返ったんですゼイ？こりゃ、完敗でさア…

銀時は驚いたように、両隣りにいる子供達の名前を呼ぶ。一体、いつからそこに居たのかと…そう言いたげな表情だ。それに、神楽と新八は笑う。

「銀さん、まさか気付いてなかったんですか？」

「さっきから居たネ！！銀ちゃん、どんだけ鈍感アルか？」

ああ、何だ…何も心配する事は無いではないか。

「しかも泣いたんですか？大の大人が情けないですよ…」

「それじゃあ、しーちゃんにフラれるネ！！マダオで泣き虫は、女に嫌われる男の条件ナンバー1アル！！」

ほら、子供達はいつものように銀時をあしらっている。

そして…

「うるせえ…、大人だってマジ泣きする時があんだよ、コノヤロー…！！」

いつもよりかは、どこか言葉に力は無いが、子供達の憎まれ口に反撃する銀時の姿がある。

やっぱり、子供達には敵わない。

そこに居た大人達は皆、一樣に同じ事を思いながら…微笑ましげにその様子を見守っていた。

その様子を、もう1人…：ガラス越しに、ベッドの上から見つめている人物がいた。そう、紫苑である。さっきまではどこか瞳も虚ろで、自分の身体よりも銀時の方が心配で仕方がなかった。銀時は、松陽を亡くした後から…“大切な人の死”という場面に遭遇すると、かなり情緒不安定になる。それは、さっきの様子からも何となく分かった。自分の事を凄く心配していると同時に、銀時もまた崩れ落ちそうなほどギリギリのところにいると。

心配だった。

だが…：チャイナ服を着た女の子と、眼鏡を掛けた男の子が来て…言葉を二言三言交わしただけで、その表情は紫苑のよく知り、そして紫苑が好きだと思った…その顔に戻った。

「今の銀時には…貴方のことを大切にしてくれる人が沢山いるのね…」

銀時のことは、“万事屋”として真選組内でも噂は絶えなかった。皆、好き放題言っではいたが、しかしそこからは信頼も窺えた。近藤も土方も、遠回しではあるが…万事屋を慕っている事は分かった。沖田に関しては自ら“旦那は悪友”だと言っていた。

「……もう、昔みたいに悲しい思いはしてないのね……」

その特殊な髪色と瞳の色から、“屍を食らう鬼”と心無い言葉を浴びせられていた。その強さから、敵はおろか味方からも“まさに夜叉だ”と恐れられていた。

けれど、彼の周りには今…あの頃の自分達のように、銀時を支える人達が居る。

「私も早く、そこに行きたいわ…」

ねえ、銀時…？

その可愛いチャイナ服の女の子は誰？もし彼女だったら、コタローに“銀時はロリコン疑惑”を告げ口するわよ？

そっちの眼鏡を掛けた男の子は…ああ、凄く優しそうな子。銀時のハイテンションに振り回されていなければいいけど…。

次第に、葉が抜けてきた紫苑の意識ははっきりとしてくる。

ガラスの向こう側で笑っている銀時の姿を微笑ましく見守りながら…

「ねっ、銀時…？私も混ぜてよ…！！」

紫苑は、幸せそうに笑っていた。

集中治療室の中を何気なく見た沖田は、紫苑の表情を見て…自身もまた笑う。

「なんでイ、紫苑も幸せそうに笑ってらァ…」

さっきまではどこか殺伐としていたこの空間が…

たった1人の女性と、たった2人の子供達の力で…

いつもとなんら変わらない光景に戻った。

【第十訓】隣と居場所（後書き）

そろそろ、紫苑ちゃんにも本格的にみんなと合流してもらいましょー！！最近、出番が少なすぎる：^^；次ぐらいには桂や晋助、辰馬辺りも出せたらいいな〜と：思っております^^

【第十一訓】言葉の重み（前書き）

今回はしーちゃんこと紫苑の出番はありません^^；ごめんね（苦笑）そろそろ、攘夷組を出したとか言っておきながら今回の話には登場してないとか……!! どんだけ話持っていくのが下手なんだよorz（苦笑）

【第十一訓】言葉の重み

集中治療室前の殺伐とした空気が、子供達によっていつものそれへと変わったときだった。沖田がクイツと銀時の着流しを引っ張ると、さっきまでの悲しみに揺れていたその瞳は、いつもと同じ：沖田のよく知る“死んだ魚のような目”になっていた。それを見て、思わず沖田は笑ってしまう。

「：ね、人の顔を見て笑うって失礼じゃない？総一郎君？」

「総悟でさア、旦那」

ああ、いつもの彼だ。

そんな事を考えながら、沖田は屈託なく笑う。それを見た銀時は少し驚いたような表情を見せたが、バツが悪そうに頭をかきながら苦笑した。

「あー、その悪かったねえ…。：ちゃんと聞こえてたから」

「何がですかイ？」

「ん？全部」

さっきまで申し訳なさそうな表情をしていた銀時は、今度はニヤリと笑う。流石の沖田も、あの状態ですべてを聞かれていたとは思ってもいなかったらしく、今度は沖田が参ったといわんばかりの表情を見せた。そして思った。やはり、彼には敵わないと。

「全く、銀さん：まさか沖田さん達に迷惑を掛けたんじゃないでしょうね？」

「別にサドとマヨとゴリラに迷惑を掛けようと構わないネ！！」

子供達の言葉に周りの大人達は笑ったり、一部は眉をヒクつかせたりと反応は様々だったが、沖田だけは違った。大事な事を言いそびれたと溜息を吐きながら、改めて銀時を呼び治療室の中を指差す。

「旦那、紫苑が目を覚ましてますゼイ？多分、薬が抜けきったんでさア…」

「……！！紫苑……！！」

その言葉を聞けば、またすぐに視線は紫苑の眠る部屋の中へと移る。しかしその瞳は先ほどとは違い、どこか崩れてしまいそうな危うさは無く…心の底から心配していると、そんな表情だ。さっきよりもしっかりとした瞳で紫苑を見つめていた。

「……なんだよ、笑いながら手なんか振りやがって……」

ガラス越しに見た紫苑は、完全に薬が抜けたのだろう。笑いながら銀時に手を振っている。それにつられるように、銀時もまた笑い小さく手を振った。その様子を、その場に居た全員が微笑ましく見守っていたが、近藤だけがどこか悲しげに笑っている。それを見た土方も、改めて幸せそうに笑っている銀時を見て複雑な心境になった。

紫苑の命は残り少ない。

それを今、伝えるべきか否か…。

どうしたものかと考えていた2人だったが、ガラツと扉の開く音で2人は我に返る。まさか銀時が中に入ってしまったのでは？と一瞬思ったのだ。しかし、予想に反して銀時は先ほどと同じ場所に立っている。中に入ったのはどうやら医者だったらしい。小さく嘆息し、

土方は近藤に視線をやる。それに気付いた近藤は小さく頷いた。

土方の言わんとすることが分かっていたから。

（そうだ…隠す事ではない。いや、隠してはいけないことだ…）

相手が他の誰でもない紫苑の婚約者である銀時は、この事実を…一番知る必要がある。意を決したように、近藤は銀時の傍まで歩み寄り声を掛ける。それに、銀時はきちんと反応して振り返った。

「万事屋、紫苑のことで大事な話があるのだが…」

「……分かった。けどよ、俺だけじゃ多分…納得いかねえ奴らがいると思うからよお…」

そう言って、銀時は自分を心配して訪れたのであろう子供達やお登勢達を見渡す。そして苦笑しながら先を続けた。

「全員に聞かせてもいいかねえ…？ババア達がここに来てる理由は…何となく、分かるからよお…」

銀時は気付いていた。何故、たまもこの場所に來たのかという…その理由が。よく自分の家に押しかけてきては厄介ごとを持ち込んでくる幼馴染の為に、この場所にやって來たのだろう。

（まあ、ヅラが來なかつただけでも良しとするか…。流石にアイツも、そこまで馬鹿じゃなかつたか…）

桂は時として、形振り構わない時がある。銀時とて人のことを言えた立場ではないのだが、桂は手段を選ばないで突っ込んでくる為、銀時以上にタチが悪い。しかし、その桂が今回あえて來なかつたと

いう事は…恐らくはこの場に真選組が居る事を子供達から聞いたのだろう。そこまで考えた銀時は、チョイチョイとたまに手招きをした。

「何でしょう、銀時様？」

「ほら、しっかり見て…しっかり記憶して、しっかり持って返ってやってくれ。アイツも…相当、苦しんだからな…」

「…銀時様はご存知だったのですか？私がこの場所に訪れた理由を…？」

「いいや、知らねえよ？けど…何となく分かったってところかな？」

真選組の面々は訳が分からないとそれぞれ訝しげな表情を見せたり、首を傾げたりしていたがそれに構うことなく、銀時はポンポンとたまの頭を撫でる。

「暫く、紫苑のことを任せた。何かあったらすぐに知らせに来てくれ…」

「了解しました」

「では行くか」と近藤に促され、銀時は頷きその場を離れようとする。チラリと…紫苑の方に視線を向ければ、どこか不安そうな表情かおをしていた。それに苦笑しながら、ちよつと待つて欲しいと近藤に告げ、紫苑が見える位置に再び戻る。そして…

——スッ…、サッサッ…、シュッ…

銀時は両手を大きく動かし、何かを紫苑に伝えた。それを理解した

らしい紫苑は、不安そうな表情から、安心したような…それでいてどこかおかしそうに笑う。そして、ゆっくりと紫苑も手を動かす。それは、両腕を使って大きな丸を作っていた。

「…よし、紫苑副官殿の許可も得たし…本当に行こうかねえ…」

どこか懐かしそうに笑いながら、銀時は近藤の隣に足を進める。全員が、今のは一体何なのかと…そういった視線で銀時を見つめていた。それに気付いていた銀時は、少し悲しそうに笑いながら…

「合図だ…。鬼兵隊とその仲間達にだけ通じる合図。攘夷戦争中は、爆音やら何やらで声なんて全然聞こえなかったからな。離れた位置にいる場合はこうやって腕で指示を仰いだり、それに対して返事をしたりしてたんだよ…」

そう告げた。全員が驚いたように目を見開く。まさか、銀時の口から“鬼兵隊”という言葉が出るとは思いもしなかったからだ。否、^{いな}その口から“攘夷戦争”という言葉が出ること事態予想できなかった。もちろん、紫苑と銀時の関係が分かった以上、今更すぎる事ではあるが…それを誰に追及される事も無く、銀時が自然に口にしたことが意外だったのだ。

「ちなみに、今の合図は何て言ったんだい？」

聞いたのはお登勢である。それに、銀時は笑いながら…

「“本陣から離れて敵陣に探りを入れてくる”って…言っちゃった」

ニヤリと笑う銀時に、土方が「誰が敵だ!!」と声を荒げ、それに対して「ウルセエ、土方コノヤロー」といつものように沖田が毒舌

攻撃をする。騒がしくなってきた病院の廊下でお登勢は溜息を吐き、キャサリンは「ウルサイ人達デスネ」などと呆れている。そんな中、さっきの合図に興味を示した子供達は銀時の傍に駆け寄りクイツと着流しを引っ張った。

「他にもあるネ？あんな合図？」

「おー、俺達本陣の人間ですら分からない合図もあるぜ？例えば：鬼兵隊総督と副官の間でしか分からない合図、とかな：」

「それってつまり：高杉さんと紫苑さん：ですよネ？」

「そーゆーことだよ、新八君」

「じゃあ、しーちゃんと銀ちゃんにしか分からない合図もあったりするネ？」

「え、俺と紫苑？……そうさなあ……俺は鬼兵隊の隊員じゃなかったから、特にねえよ」

「恋人同士なのに普通の隊員達と扱いが変わらないなんて：」

「銀ちゃん、ご愁傷様アル：」

「何？え、何？何でそこで、お前らは銀さんを哀れんでるわけ！？」

子供達の視線に哀れみのそれが含まれていることを感じて、何でそんな目をされなければならぬのかと不機嫌そうに言うが、それでも子供達が両の手を放すことは無く。

「けど、羨ましいです……。そうやって、言葉を交わさなくても通じる何かがあるって：」

「そうネ、私達も結構長い付き合いになるけど：やっぱりしーちゃん達には敵わないアル」

「そうだろう、そうだろう。羨ましいだろう？けどな、肝心な時に言葉が届かないのも：結構辛いんだぜ？」

「それがイコールで泣いていい理由にはならないネ」

「あ、僕が言おうと思ったのに：」

「だからいつまで経っても新八のままなんだヨ、新一になれないんだヨ。何だよ、八って」

「コラアアアツツッ！！！全国の新八さんに謝れエエエ！！！」

「はいはい、新八の全力のツツコミは痛いほど分かったから場所を考えようなく。ここ、病院だから…」

「うっ…は、はい…そうですね…」

また、銀時もそんな子供達の手を放すことは無く。

そこには、先ほどまで崩れ落ちそうなほどに脆かった銀時ではなく…皆のよく知り、そして慕っている銀時が居た。

紫苑の担当医から予め許可を得ていた近藤は、銀時を始めとした万事屋メンバーとその場に残ったたま以外のスナック・お登勢メンバーをある部屋へと招き入れた。恐らくは医師と患者、もしくは親族が話し合う場所だろう。そこに人数分の椅子を揃えて、中央には近藤と銀時が向かい合うようにして座る。他のメンバーは思い思いの場所に座っていた。

「……まあ、なんつつーか…よ…。ありがとな…」

何とも言えない沈黙。それを破ったのは、銀時の礼の言葉だった。誰もが驚いていたが、構わず銀時は続ける。

「紫苑がどういう経緯で真選組に入ったのかは分からねえし、真選組に入った紫苑を責めるつもりもねえ。ただ…生きてた。それだけで…俺あ十分だ…。多分、アンタらが助けてくれたんだろ、紫苑を？…マジでありがとな…」

正直な話：真選組のメンバーは全員、銀時に罵られると：そう思っていた。何故、その存在を隠していたのかと：そう言われると思っていた。もちろん、真選組メンバーは紫苑の存在を隠していたわけではない。ただ、身体に負担をかけないようにと：あまり大きな任務を与えなかっただけだ。それに、万事屋が絡んでくる事件の時には本当にタイミングが悪く、いつも紫苑はそこに居なかった。

「いや、万事屋よ：。俺達はお前に謝らなければならん。紫苑が攘夷戦争に出ていたことも、元鬼兵隊の副官だったことも、そして紫苑に婚約者がいたことも：本人の口から聞いて知っていた：」

「まさか、その婚約者がお前だとは思ひもしなかったがな」

「：てえことは、紫苑は俺の名は言わなかったのか？」

「言ってたら、とつくに旦那と紫苑：会わせてまさア：。流石の俺でも、そこまでドSじゃありませんゼイ？」

真選組面々の言葉に、一瞬呆けた銀時だったが：確かに、今まで何度も接触してきた真選組の隊士達が、自分を攘夷志士と疑う事はあっても攘夷戦争に参加していた者として扱ってくる事はなかった。それは恐らく、紫苑が銀時に気を遣ってそうしたのでろう。名前を言えば、その生存が分かる確率は格段に上がる。しかし、もし攘夷志士としてではなく、一般人として平穏な暮らしをしていたら：銀時に迷惑が掛かってしまうと危惧したのでろう。

「紫苑に気を遣わせちゃったなあ：」

苦笑する銀時に、土方は更に続けた。

「まあ、まさかお前が自ら口を割るとは思ひもしなかったがな：」

「……はあ：、 “ 白夜叉 ” についてか？」

白夜叉…。

その言葉に、部屋の空気が一瞬にして変わる。新八と神楽は驚いたような…それでいて、どこか不安な様子で銀時と土方を交互に見つめている。お登勢は溜息を吐きながら、それでも事の成り行きをただ見ているだけだった。

「…認めるのか…？自分が…白夜叉だと…？」

驚愕の近藤の声。その声は、驚きからか…それとも伝説とまで言われ、尚且つ最も恐れられたと言われていたその張本人を目の前にした故の恐怖からか…少し震えている。問われた銀時は一つ溜息を吐くと、めんどくさそうに頭を掻いた。

「ま、自分で言っちゃったからな。攘夷戦争で…ヅラが“狂乱の貴公子”、高杉が“鬼兵隊総督”、紫苑が“鬼兵隊副官”と言われていたように…俺は“白夜叉”と呼ばれていた。…迷惑な話だ。こんな二つ名、望んでねえんだよ…俺あ…。しかも、本名より白夜叉^{こっち}の方が有名になっちゃったから洒落にならねって話。まあ、そのおかげで…坂田 銀時が攘夷戦争に参加していたという事実が明るみになることは無かったんだけどな」

ふと…そこまで話した時、銀時はあることを思い出す。自分と同じような二つ名が…ある時より天人達の間で恐れられるようになった事を。その二つ名が、当時の自分達に“紫苑が生きているのでは？”という希望をもたらしたということ。

「なあ…聞きたいことがあんだけどよお…」

「何ですかイ？」

「…お前ら真選組…いや、幕府でもいいや。そっち側で…“紫怨しおんの鬼”という二つ名は…有名か？」

問われた真選組の面々は、それぞれ首を横に振る。3人が揃って「“紫苑”という名なら当然知っているが」と付け足す。

（ということは…この二つ名は俺の白夜叉ほど露見しなかったという事か…。いや、そもそも紫苑の二つ名かどうかすら定かじゃねえ。あくまで、攘夷戦争の時だけ広まった二つ名ってことか…）

「それがどうかしたのか」と問うてきた土方に、「いや、なんでもない」と苦笑してその話はそこで終わる。だが、一連の話を黙って聞いていた万事屋の従業員達とスナック・お登勢のメンバーは何ともいえない表情でその様子を見ていた。

“紫怨しおんの鬼”…。

その名は、さっきまだスナックに居た時…桂の口から聞いた二つ名だ。もしかしたら、紫苑のことかもしれないが、結局は分からなかったと…桂自身がそう言っていた二つ名。やはり、どこかで銀時も気にしていたのだろう。

「ケッ、しかしまさかテメエが伝説とまで言われた男だったとはな。世も末だ…」

「言ってるよ、多串君」

「誰が多串だ、誰が…！」

「…あ、あの…土方さん…？」

「あ？なんだ、眼鏡？」

土方と銀時が毒舌戦を繰り広げているところに口を挟むのはかなり

勇気がいったが…しかし、新八にはどうしても確認しておきたい事があった。否、しなければならぬことがあった。

ただでさえ、銀時は真選組…というよりも土方から、攘夷志士ではないかという疑いの目を向けられていた。

しかし、ここで銀時の正体が“白夜叉”だとバレてしまった。

「…銀さんを…捕まえるんですか…？」

声が震える。

新八は知っているのだ。天人達…しかも幕府側についている天人達にとって、白夜叉は大量の天人を殺した憎き仇であり、天人が幕府を牛耳っている今でもなお恐怖の対象であるということを。そして、現在攘夷活動をしていなくても…白夜叉は捕縛の対象となり、そしてそのまま死刑となるということも。

考えなくても分かることだ。

今の幕府を操っているのは、天導衆と呼ばれる天人集団。その天人集団が白夜叉を憎み恐れていないはずが無い。

新八の問いに、流石の神楽もキッと土方を睨む。

「捕まえるアルか？銀ちゃんは今、何もしてないネ。それなのに捕まえるアルか？“白夜叉”だから？たった…そんな名前ひとつで銀ちゃんは捕まらなきゃならないネ？」

神楽はこういったことに非常に敏感だ。自分が天人だと…夜兎だと

恐れられ、人々から避けられていたからだ。流れている血が違う、種族が違う。ただそれだけの理由で、嫌な思いを沢山してきた。そんな中で、自分を家族同然に慕ってくれたのが銀時だった。銀時が白夜叉だと知っても、神楽は何も感じなかった。その銀時が、“白夜叉”という名前だけで捕まってしまう。神楽だけではなく、これは新八も危惧していたことだった。神楽同様、新八の表情も険しい。

「僕達にとって、銀さんは銀さんです」

「銀ちゃんが白夜叉だろうと何だろうと、私達には関係ないネ」

子供達の真剣な瞳と言葉を受け、ハアと土方は小さく溜息を吐きながら頭をガシガシと掻く。煙草に手が伸びそうになったが、ここが病院である事を思い出しそれは何とか留めた。

「確かに：御上^{おかみ}からは、白夜叉を見つけ次第捕縛^{ちよくめい}という勅命がある」

「……！！だったら、絶対に私達が銀ちゃんを護るネ！！」

「チャイナ、最後まで俺の話を聞け」

少し強い口調で：そして鋭い視線で神楽を睨めば、不満そうではあったが土方の話を聞くために黙る。一方の土方は近藤に視線をやり、ひとつ頷く。そして：

「俺達は確かに幕臣であり、御上の勅命であれば絶対に守らなければならぬ。勿論、白夜叉を捕らえよという命^{めい}も例外ではない。だが……俺達は俺達なりの武士道^{ルール}を持っている。万事屋がガキ共を護ることを武士道^{ルール}にしているように：俺達は、俺達の魂に従って剣を抜いている。……今の俺達にとって、“白夜叉を捕まえる”ことは……その武士道^{ルール}に反する……」

「……それって、つまり……」

「まあ、俺達は万事屋に沢山の借りがあるからな。それに、俺達の

目の前におるのは“万事屋”を営む胡散臭い一般人ということだ。捕まえる理由などありはせんよ」

土方はタンタンと、そして近藤はニツと笑いながらそう言った。しかし、この2人が言っている事は：矛盾していないだろうか？近藤は“万事屋を営む一般人”と言ったが、銀時は自ら“自分は白夜叉”だと名乗ったのだ。

目の前にいるのは、万事屋のオーナーでもあり、そして白夜叉でもあるのだ。

「アンタ達、言ってることが無茶苦茶だね。どういふつもりだい？」

胡乱氣に聞くお登勢の言葉に答えたのは沖田だった。

「まあ、何と言いますか：俺達はアンタらが思っているほど、御上に忠誠を誓ってる訳ではないんでさア」

「あーあ、そういうことサラツと言っちゃっていいわけえ？」

銀時が間髪入れずにツッコめば、沖田は悪びれた様子も無く笑う。そして土方もまた、口角を吊り上げて笑っていた。

「誰があんな奴らに忠誠を誓うかよ。俺達の国を乗っ取っただけでは飽き足らず、侍の魂である刀まで奪いやがった奴らだぜ？俺が：俺達真選組全員が忠誠を誓い、絶対の頭かしらと決めているのはただ1人だけだ」

誰、と言わずとも：それが誰なのかはすぐに分かる。

「随分愛されてんねえ、局長さんよお？」

真選組にとって、御上よりも大事な存在は他の誰でもない：真選組局長の近藤 勲ただ1人なのだ。

「あとは俺の決めることじゃねえ。この件は近藤さんの決める事だ。俺も総悟も、近藤さんの命に従う：」

「そういうことでさア。まあ、出来れば：めんどくさくない命である事を願いたいもんですけどねィ」

「同感だ。白夜叉をとっ捕まえるなんざ、随分と骨が折れそうだからな」

「そのまま全身の骨が折れて死んじまえ、土方コノヤロー」

「デメエこそバツサリ斬られて死んじまえ、沖田コンチクショー」

勝手に始まった土方と沖田の毒舌戦に「また始まった」と苦笑しつつも、近藤は真っ直ぐと銀時を見据える。それを、死んだ魚のような目で銀時は見返していた。

「坂田 銀時はただの一般人。俺達は、その坂田 銀時と白夜叉が同一人物であることを知らなかった。そして、今後この件に関して調査をするつもりはない。これが：俺の下した判断だ」

「御上に「なんで？」って聞かれたらどー答えるつもりだ？」

「一般人を疑っては警察の名が下がる。それとも幕府そのものの名が下がっても宜しいのか？と：脅しでもかけるか？」

「ククッ、こりゃとんでもねえこと言い出しやがったよ：」

参ったと両手を挙げてヘラツと笑う銀時。同じように、近藤もまたニツと笑った。

「そういうことだが……何か問題があるだろうか？」

別に誰に聞いたわけでもないのだろうが、近藤が尋ねると子供達はニツと笑う。

「問題ないですね」

「そーヨ！！銀ちゃんは銀ちゃんネ！！」

お登勢もフツと笑みを零した。

「銀時、命拾いしたね。アンタ、コイツらに感謝しなよ…」

キャサリンはどこかつまらなさそうにしている。

「坂田サンモ、一度ブタバコニ入ッテミタラドウデスカ？結構、居心地イイデスヨ？」

「キャサリン！！冗談でも勘弁してくんねえ！？そういうのはよ！！」

キャサリンの言葉と銀時のツツコミに、重い空気が漂っていたその部屋に初めて笑い声が響いた。

「まあ、近藤さんが言った通りだ。テメエじゃなけりや話は変わってきたんだろがな…。マジで感謝しやがれ、ボケが」

「いっそ、土方コンチクショーが白夜叉って事で御上に報告しやしようか？」

「おー、それいいね総悟君。けど、ソイツ銀髪じゃねえよ？無理じゃね？」

「んなもん、ペンキでもぶっかけて白く染めれば十分ヨ！！」

「お、チャイナもたまにはいいこと言うじゃねえか」

「オイイイイイ！！！！テメエら、何俺を陥れようとしてやがんだアアアア！！！！」

ギャーギャーと騒ぐ4人を引き攣った笑みで見守りつつ…ふと、新八は近藤に視線を向ける。同じように苦笑しながらその様子を見ていたが…どこか、表情が冴えないような気がする。

「近藤さん？」

「ん？どうした、新八君？」

「いえ…、近藤さん…他に何か銀さんに言いたいことがあるんじゃないですか？」

新八に指摘され、驚いたように目を見開けば新八は苦笑しながら続ける。

「何か凄く…言いづらそうな…それでいて、絶対に伝えなければならぬって…。そんな顔、してましたから」

「新八君には敵わんな…。流石は未来の義弟だ…」
おとうと

「誰が義弟ですか、誰が」
おとうと

ツッコむところはしっかりとツッコむ辺りは流石である。冗談はさておき…と、近藤は改めて銀時を呼んだ。丁度銀時は、土方と睨み合いながら火花を散らしていたが、近藤に呼ばれ、それはあっけなく幕引きとなる。

「今度は何だよ？…あ、いや…。俺も聞きたいことがあったんだ。どうしても…聞きたいことが…」

「そうか…。俺も万事屋にどうしても言わねばならんことがある。だがまあ…万事屋の方から先に聞こう」

「…そんじゃ…お言葉に甘えて…」

どこか聞きづらそうに…否、いな出来れば聞きたくなど無いとその表情

が物語っていた。だが、聞かねばならない事実だと…銀時は腹を括る。

銀時の聞きたかったこと、それは…

「紫苑のことだ…。アイツは…何か、酷い病…なのか…？」

まさに、近藤が言わねばならないと思っていたそれだった。

銀時が離脱した事で、今度は土方と沖田、それに神楽が加わって毒舌戦を繰り広げていたが…銀時の言葉で、それが強制的に終了となる。神楽は首を傾げていたが、土方と沖田は何ともいえない表情をしている。そう、それこそさつき新八が近藤に対して言った“言いづらいが言わねばならない”というような…そんな表情である。

一瞬の沈黙。その沈黙が、僅かに明るさを取り戻しつつあった部屋の空気を再び重くした。

「……万事屋よ、俺の言わねばならんことは……紫苑の病についてだ…」

重い沈黙を破ったのは近藤の一言。

その一言は…

「…紫苑の身体はもう…いつ、限界を迎えてもおかしくは無い…」

銀時が生きてきた中で最も重く…

「1年前の今頃だった……」

最も…

「あと1年、その命がもつかどうか…それが、医者からの告知だった。つまり…“今”が…その告知の時なんだ…」

聞きたくない言葉だった。

近藤から、その言葉を聞いた瞬間…

銀時は目を見開き、その紅い瞳から…

大粒の涙を零した。

「う、そ…、だろ…」

ああ…まただ…。

「な、んで…」

どうしてこんなに…

「俺、達……また、離れ離れに……なるのかよ……ッ……!!」

ひとつひとつの言葉が、重く感じてしまおうのだろうか…?

いつも何気なく使っている言葉が。
いつも何気なく呼んでいる名前が。

「……し、おん……」

どうして、こんなに重く…苦しいのだろうか……?

その答えは、誰も見出す事が出来るはずも無く…

ただ、涙を零しながら「何で」と呟く銀時が再び壊れてしまわないように…

「銀さん」

「銀ちゃん」

その手を握り、名前を呼ぶことしか出来なかった。

真選組以外の誰も知らなかった事実。

紫苑の寿命。

それは：銀時だけでなく、その事実を知らなかった誰もが胸を痛める事実であった。

【第十一訓】言葉の重み（後書き）

次：攘夷組出せるかな？てか、追憶編の晋助の終わり方が銀時との電話っていう設定を忘れてるわけじゃないですよ！！まだそこまです話が進んでないだけです^^；（苦笑）

さて、紫苑の寿命を知ってしまった銀時はどういう行動に出るか……！！？

【第十二訓】桜の約束（前書き）

今回は紫苑ちゃんが大活躍（？）のターンです♪ただ…未だに攘夷組は出てこずorz名前だけならヅラが出てきますが…本当に名前だけ…^^;あと、現状でも十分長いんですが…もっと長くなりそうな予感だったので、途中で切って話を分けました（笑）

【第十二訓】桜の約束

暫く…何ともいえない沈黙が部屋を支配した。誰か、何か言おうと口を開くが…それが形になることはなく、結局口を噤^{つぐ}んでしまう。銀時は、衝撃の事実を聞かされてからずっと俯いたままだ。

(…やはりまだ、万事屋に知らせるのは早すぎたか…?)

紫苑という最愛の人との再会を果たし、しかしその最愛の人が目の前で倒れて錯乱、その直後に知らされた余命宣告。

喜びよりも、悲しみのほうが大きすぎるこの再会。例え銀時が望んだ事とは言えど、やはり…知らせるにはまだ少し早かったかと近藤は険しい表情をする。

その時…

「なあ…」

ポツリと…銀時が口を開いた。

「何だ？」

それに答えたのは土方である。俯いていた銀時は顔を上げて、真っ直ぐと土方を見た。いつもの死んだ魚のような目ではない…とても真剣な瞳に、思わず土方が息を呑んだ。この男の、こんな顔など…今までに見たことが無かったからだ。

「聞きたいことがある」

「俺達に答えられることであれば…なんでも…」

その気迫に吞まれ、いつものような皮肉のひとつも返せない。そこで改めて土方は思う。やはりこの男は紛れもなく“白夜叉”と呼ばれた男なのだと。

「多分…お前ら真選組の連中にしか分からねえことだ」

「……それで、聞きたいことは？」

近藤が先を促せば、少し苦い表情をしながら…銀時は口を開いた。

「攘夷戦争の最中で、俺達本陣と紫苑が離れ離れになったことは紫苑から聞いてるだろ？」

「ああ、聞いているが…それがどうかしたのか？」

「……攘夷戦争後すぐに…紫苑を見つけてくれたのは、お前達真選組…なのか…？」

戸惑いながらも、しかし確実に銀時は自分の知りえない紫苑のことを尋ねる。しかし、返ってきた答えは意外なものだった。

「いや…紫苑を助けたのは数年前だ…」

「……てえことは、あの噂は…本当だったんだな…」

「あの噂ってのは…何ですかイ？」

納得したように頷く銀時と、首を傾げる沖田。しかし、万事屋メンバーとスナック・お登勢メンバーにはすぐに分かった。銀時の言う“噂”が何なのか。

「攘夷戦争集結から真選組が紫苑を助けるまで。その空白の時間…紫苑はどこに身を潜めていたのか…。それこそ俺は、死に物狂いで

色んな情報を当たった。そんな時に…聞いたんだよ…。“鬼兵隊に女の副官がいる”ってな…」

そう、それは桂が言っていた噂と寸分違わないものだった。桂は銀時に隠していたようだが、どうやら噂は銀時の耳にも入っていたらしく…その事実には僅かながらにお登勢は驚く。

「じゃあ、アンタはその噂を信じていたのかい？」

「まあな。高杉は紫苑を大事にした。だから、もしかしたら…高杉のところに戻ったのかもしれないねえと…そう、思ったんだ…」

しかし…と、そこで銀時の表情が曇る。何故、鬼兵隊副官の紫苑が、現在は真選組にいるのだろうか？しかも捕らわれの攘夷志士としてではなく、真選組の隊士として。

「紅桜の事件の時…俺は紫苑が鬼兵隊にいると…そう思っていた。だが、紫苑は姿を見せなかった。そんな時、紫苑は鬼兵隊から抜けているという核心はあったが……なんでまた真選組に…？」

もったもな問いだろう。紫苑は真選組…いや、幕府から見れば最重要人物だ。鬼兵隊副官で、実力は鬼兵隊総督であり彼女の兄である晋助に引けをとらないといわれる手練^{てだ}れ。その彼女が真選組の隊士として所属しているということは、それ相応の理由があるはずなのだ。

「これは…俺が聞いても許される範囲の内容か？」

銀時が聞けば、近藤・土方は互いに顔を見合わせるが…やがて問題ないと判断したのだろう。2人とも首を縦に振る。「ただし」と近藤が前置きを付けた。

「正直：万事屋が今、高杉をどう思っているかは分かんが、内容はかなり：残酷だぞ？」

「：別に：どうも思っちゃいねえよ。俺と高杉は、紅桜の件で完全に袂を別たもとわかつた。それに、どんな事でもそれが現実なら：俺はそれを受け入れなければなるめえよ。紫苑のことであるなら、尚更だ」

強い言葉を隣で聞いていた子供達はそれぞれ思う。

それ程までに、銀時にとって紫苑という存在は大切なものなのだ。

いつもはヘラヘラしていて、マダオの代名詞みたいな生活を送っている銀時。しかし、今自分達の横に居る男は：とても同一人物とは思えない。真剣な瞳も、その口ぶりも、感じる雰囲気も。

（：なんだか：銀さんの存在が遠く感じるな：）

（銀ちゃんが遠くに行っちゃうような気がするヨ：）

だからだろうか？このまま：銀時がどこか、自分達の知らないところに行ってしまうそうで：怖かった。新八も神楽も、無意識に銀時の手を握る。それに気付いた銀時は驚いたように、2人を交互に見つめた。

「新八？神楽？」

「銀さん、その：僕達が居ますからね？」

「：勝手に居なくなっちゃーヨ：」

不安そうな2人の子供達に苦笑しながら、返事の代わりに銀時はその手を強く握り締めた。不思議と痛みは感じない：優しいその手に、新八と神楽は少しだけ安堵する。

そして改めて：銀時は真選組の面々と向き合った。

「頼む、知っている限りの事を全て話してくれ…」

「分かった」

そして：銀時が知らなかった、紫苑の空白の時間が：近藤・土方・沖田の口から語られる。

一体：どれくらいの時間が過ぎたろうか…？まだ、銀時達が治療室の前に戻ってくる気配は無い。医者からは「いつもの発作なので、今日1日入院したら明日退院してもいいですよ。あと、無理さえしなければ病院内を歩き回っても構いません」と、そう言われた。と同時に、「今度、大きな発作を起こした時には命の保証はありませんので覚悟しておいて下さい」とも言われた。それでも、紫苑は決して入院するという選択をせず：真選組の屯所に戻る事を選んだのだ。そして、医者から面会許可が下りたため：現在、紫苑の隣には機械家政婦のたまがいる。

「そっか、じゃあたまちゃんカラクリは芙蓉プロジェクトで指名手配になった機械だったのね…」

「私のデータには残っていないのですが、銀時様からそのように聞いております」

「フフッ、銀時様だなんて：似合わないなあ…」

どこかで見た顔だと思ったが、まさかお尋ね者の機械家政婦だったとはと苦笑する。しかし、近藤を始めとした上司や同僚はたまの事を見ても何も言わなかった。ということは恐らく容認しているのだ

ろうと悟り、紫苑も事情聴取のような尋問をする事はなかった。それよりも、自分の知らない間の銀時の話を聞こうと、たまにいろいろ質問をしている。

「えー、銀時ったらたまちゃんにネジをプレゼントしたの！？趣味悪いなあ……！！女心が分かってない……！！」

「いえ、私が欲しいと言ったのです。そしたら、銀時様買って下さいました」

「そっか、たまちゃんは機械カラクリだからそういうのに興味があるのね……。たまちゃんはやっぱりネジとか……そういうのが好き？」

「よく……分かりませんが、とても惹かれるものがありました」

「なるほどなあ……！！あ、もしかしてそのかんざしにしているネジが……」

「はい、初めて貰った“プレゼント”です」

「ふふっ……」

形は違えど、かんざしがプレゼント。

「おそろいね……！！」

「……？紫苑様もネジを貰ったのですか？」

「ううん、私はネジじゃないけどね……銀時にかんざしを貰ったのよ」

そう言うと、紫苑はゴソゴソと自分の持ち物を漁る。いつも肌身離さず持っていたそれ。真選組の隊服のポケットに入れている……綺麗な石の付いたかんざし。

「ほら、これよ……」

「これを、銀時様が紫苑様に贈ったのですか？」

「うん……。当時はこんな綺麗な装飾品って中々手に入らなくて……。貰った時はとても嬉しかったわ……」

このかんざしと共に、紫苑は銀時から“言葉”も貰った。それから随分と長い時間が過ぎてしまったが…果たして、今でもあの言葉は有効なのだろうか…ふと、思う。

「綺麗なかんざしですね。紫苑様の紫の髪によくお似合いかと…」

「もう、たまちゃんったらおだてるのが上手なんだから…!! 那样的えば、スナックのお手伝いをしてるんだったわね。フツ、それだったらおだてるのも上手になるわね!!」

「いえ、決してそのようなことでは。銀時様が紫苑様のためにと心を込めて贈ったものであれば、きっと紫苑様が身に付けることで、とても美しく輝くと…そう思いました」

「たまちゃん…」

「そのかんざしも、きっと紫苑様から大切にしてもらって喜んでいると思います」

「……、そうだいいなあ……」

唯一、銀時から貰ったもの。本陣から離れてしまい、孤独な戦いを強いられ何度も壊れそうになった時も。

鬼兵隊に再び戻り、変わり果てた兄の元で形だけの副官を務め、自分の存在理由を見失いそうになった時も。

このかんざしが、いつだって自分の傍にあった。まるでそこに銀時が居るかのよう…そのかんざしを手取るだけで、髪に差すだけで心が落ち着くのだ。

「たまちゃんは…今、幸せ？」

「……? どうしてそのような事を聞くのですか?」

「ん? だって、折角今を生きているんですもの。しかも、銀時のすぐ傍で同じ時間を過ごしている。だからかな? 少し気になったの。」

たまちゃんは今…幸せ？」

問われ、たまは少し悩むような仕草を見せる。暫くそうしていたが、ずっと顔を上げて紫苑の瞳を見つめる。

「機械カラクリの私にとって、幸せというものが何なのか…よく、分かりません。けれど…お登勢様やキャサリン様、そして銀時様、神楽様、新八様…スナックに訪れるお客様。皆様と共に過ごす時間は…私にとっては必要なものと認識しております。1人にはなりたくない…失いたくない…そう、思っております。これは、幸せ…ということなのでしょうか？」

幸せが何なのか分からないたまは紫苑に聞く。すると紫苑は笑いながら、そっとたまの頭を撫でた。

「うんうん、それが幸せっていうのよ。何気ない事で笑い合って、何気ない事で喧嘩して、けどまた笑い合って…。些細な事だけだね、それが幸せなの。フフツ…たまちゃんは十分幸せなのね…」

そう…。いつだって銀時の回りは幸せで溢れていた。仲の良かった5人。些細な事で言い合いになることなど多々あったが、それでも笑い合って、辛い時には共に泣き、苦しい局面では互いに背中を預け合って戦った。その中心に居たのは、いつだって銀時だった。

「今でも…中心は銀時のまま。それは変わらないのね…」

それが嬉しくもあり、どこか羨ましくもあった。

自分の居ない間に、銀時は新たな居場所を見つけている。

そして紫苑もまた、自分の居るべき場所に身を置いている。

坂本も桂も晋助も、それぞれがそれぞれの場所で自分の成すべき事をしようとしている。

「もう…元には戻れないのかな…。昔の私達には…戻れないのかな…？」

悲しげな問いに、たまは首を捻ったが紫苑はただ微笑むだけだった。

それは…少し、悲しみを帯びた笑み。

分かりきっている事だ。

自分が真選組に身を置いている今、それが容易ではないことぐらい。

桂と晋助は攘夷志士で、自分はそれを捕まえる真選組。

そして何より、晋助とは兄妹きょうだいの縁が完全に切れてしまったのだ。

どんなに足掻いたところで、もうあの頃には戻れない。

「結局…私は何も護れず、護られてばかりで…。そして、私は何も変えられず…ただ、死を待つのみ、か…。」

晴れた外を眺めながら、紫苑はポツリと呟く。病院の外に咲き乱れた桜が、風に舞っているそれをみて…悲しそうに微笑んだ。

「約束…守れなかったね…」

一方、とある一室では…。

「これが…俺達が紫苑から聞いた全てだ…」

真選組の面々が、銀時に紫苑から聞いた全てを丁度話し終えたところだった。予想していた以上に残酷な現実。

実の兄との、刀を交えての兄妹喧嘩^{きょうだいきやう}。

それが決定的に2人の縁を切ってしまったと本人が悲しげに話していたことを、真選組の3人は鮮明に覚えている。

「……なんでヨ…。兄妹^{きょうだい}なのに…。それじゃあ、私達と変わらないネ…」

神楽は恐らく、自分の兄である神威の事を思い出したのだろう。悲しげに表情を歪めながら俯いてしまった。

「……銀さん？」

すべての話を聞き終えてから、銀時は俯いたまま…何も言わない。しかし、銀時から感じる雰囲気は…例えようも無いものだった。

殺気とも違う…、かといっていつものだらしない雰囲気でもない。

一体…銀時は今、何を考えているのだろうか？

その場にいる誰もが、分からず…互いに顔を見合わせては首を横に

振ったりと、そんな事を繰り返していた。

そんな彼らの戸惑いをよそに…ポツリと銀時が呟く。

「バカヤロー…、やっぱ…お前ら兄妹きょうだいだわ…」

ククッ…と肩を震わしながら。しかし、その声はどこか震えている。

「兄妹の縁が切れた？んなことあるわけねえだろ。アイツは…晋助は今でもお前のことを想ってらあ…」

その言葉に、ピクリと反応したのは土方だ。

「お前…今までの話を聞いてなかったのか？自分の妹に刀を向けて、ズタズタにしたんだぞ？んな野郎が、今でも紫苑のことを想ってるだあ？」

「ああ…想ってる。アイツは今でも紫苑の事を大事に想ってる…」

「じゃあ聞くがよ、万事屋。テメエは何を根拠に、んなことが言えんだ？」

剣呑を帯びた土方の問い。口調は荒かったが、確かに土方の言う事はもつともで…そこにいる全員が、土方と同じ疑問を抱いていた。

話を聞く限りでは、晋助と紫苑の間には完全な亀裂が生じている。

しかし、銀時はそれを否定している。否定するからには、それなりの確信があつてのことなのだろう。全員の視線が銀時に集中した。

「高杉…、いや…晋助はよお。昔っから背が小せえから、男ものの着流しが合わなくてなあ…。いっつも女もんの地味な着物を着て

たんだよ…」

どこか懐かしそうに遠くを見ながら、銀時は話す。

「源外のじいさんを巻き込んだ、機械騒動カラクリが起きた祭り…覚えてんだろ？」

「…あの、上様がいらした祭りのことですかイ？」

「そっ、それ。そんな時に、俺は…久々に晋助と再会した。吃驚したぜ…雰囲気も、何もかも…昔のアイツと変わっちまったからなあ。けど…ひとつだけ、変わらないものを見つけたんだ…」

どんなに変わっても、紫苑を想う気持ちだけは変わらないと言わんばかりに…

「紫苑が攘夷戦争の物資調達の際に、気に入って買った…同じ柄で色違いの着物…。蝶があしらわれた着物でな、ひとつは桜色を基調とした色で、そしてもうひとつは…紫を基調とした色だった…」

「……！！それって、高杉さんが着ている…！？」

その、着物を纏っていた。

「ああ、新八の言う通りだ。アイツがいつも着てる着物…ありゃ、紫苑の着物なんだよ。紫苑とはぐれて、攘夷戦争が終わって…着物だけが俺達の手元に残った。どうするか考えた結果、片方は晋助が持つ事になった。それが…今、アイツが着てる着物なんだよ…」

「だが万事屋よ、それだけでは紫苑と高杉の縁が切れていないとは言え切れんだろう。単に奴が、その着物を好んで着ているだけかもしれない」

近藤のもっともな言葉にその通りだと言わんばかりに土方と沖田も

頷く。しかし、銀時だけは違った。

「アイツな、派手な事が好きな割りに…派手な着物は滅茶苦茶嫌い
でなあ…。着物は特にこだわってやがったんだわ。出来る限りシン
プルで、色も派手な色じゃない…黒とか紺とか…そんなんばつか。
柄入ってない無地の着物なんて、女ものの着物じゃなかなか見つ
からねえから、そりゃもう苦労したわけよ…」

「……、今の高杉が着てる着物…派手すぎるネ」

「だろ？誰の目から見ても派手な着物。だから、知らねえ奴からす
りゃあ…ただの派手好きにしか見えねえだろうよ。けど…アイツが
今着ている着物は…アイツ好みの着物じゃねえんだよ…」

「つまり…紫苑という存在を忘れないように着ていると…。アン
タはそう言いたいのかい？」

「言いたいもなにも、事実だ。ただそこに着物があるから着る、な
んて…そんな単純な奴じゃねえからなあ…晋助は…」

それだけで…2人の縁が切れてないと、本当に言い切れるのだろう
か？しかし、銀時の口調はともしつかりしており、確信があると
いわんばかりの表情をしている。

「それに…今の鬼兵隊、副官がいるって情報は真選組そっちにあるか？」

問われ、土方は鬼兵隊の構成を思い出す。

「鬼兵隊は総督の高杉、幹部の武市、来島、河上で構成されている。
そこに…鬼兵隊副官というポジションは存在しない。それがどうし
た？」

不審げに問えば、「それぞれ」と銀時は笑いながら言う。

「元々、鬼兵隊には副官がいた。攘夷戦争の時も、そして…まあ一時的とはいえ、復活した直後の鬼兵隊にもだ。けど、紫苑が抜けても副官のポジションは埋まらない…。妙だとは思わねえ？」

「確かに、旦那の言う通り…普通だったらすぐに副官をそこに当てまさア。土方コンチクショーがいなくなったら、確実に俺が副長の座を頂くように…」

「オイッ！！総悟、テメツ…！！…チツ、それがどうしたんだよ万事屋…」

今は沖田と言いつ合っている場合じゃないと、自分の感情を抑えて再び土方は銀時に視線を戻す。

「理由は…俺と同じだ…」

「万事屋と同じ？そりゃ一体…？」

「俺は…俺の隣は紫苑だけのものだと思っている。だから…今、俺の隣に女はいない」

「…まさか…！？鬼兵隊副官のポジションは紫苑でしかない…高杉はそう思っているのか…！？」

「アイツが副官を従えてねえ理由なんぞ、考えなくても分からねえ。アイツにとって、鬼兵隊副官のポジションは自分の妹だけ…紫苑だけにしか許せないポジションなんだよ。アイツは、仲間が認めるほどのシスコンだったからなあ…」

当時を思い出したのだろう。ククツと至極楽しそうに笑いながら銀時は話す。それを言えば、いつだって晋助は声を荒げて「違う、ただ大切なだけだ！！」と言っていた。それをシスコンと言うのだと…そう言つてよく笑ったものだ。

「じゃあ…なんで高杉って男は、紫苑を斬ったんだい？そんなに大切にしているなら…何もそんな事をしなくたっていいじゃないのさ。」

とても大切にしているようには思えないねえ……」

そう……。そこにいる銀時以外の者が“今でも晋助が紫苑を想っている”ということを信じられない理由はそこにある。

本当に大切ならば、何故……紫苑を斬ったのか？

鬼兵隊脱退を望んだ紫苑に、何故刃を向けたのか？

紫苑自身は、鬼兵隊から抜けるという事は直結して死を意味すると言っていた。それは幹部達も例外ではない、とも。しかし、実の妹を思うなら……隠れて逃がす事など、造作も無かっただろう。それなのに何故、晋助は紫苑に刃を向けたのか……？

「……俺も……それだけが分からない。ババアの言う通り……なんでアイツは……紫苑を斬っちまったんだだろうなあ……」

それは銀時にも分からない事。それでも、銀時には“晋助は今でも紫苑のことを大切に想っている”という確信があった。大切に想っているのに何故……刃を交え、斬ってしまったのか。

もしその答えが分かる人物がいるとすれば、それは紫苑本人か……あるいは斬った張本人である晋助だけだろう。

「……アイツら……ホント、不器用な兄妹きょうだいだったからなあ……」

その言葉を最後に、再び室内は静寂に包まれる。

銀時はどこか悲しそうに窓の外を眺めていた。

「そっか……、もう春なんだな……」

桜の花びらが舞っている。

その光景を見たとき、銀時は思った。

（もう…あの約束は果たせねえなあ…）

晋助とは袂を別たもとわかつてしまった。しかし…紅桜の戦いで僅かに垣間見た晋助の表情が…銀時は今でも忘れられないのだ。

“お前の隣に紫苑はいないのか？”

そう…問うていたかのような…あの瞳が。

春、という言葉が銀時の口から漏れた時…。子供達は揃って「あっ！！」と声を上げた。何事かと全員が2人に注目する。

「そうヨ、私達伝言を預かってたネ！！」

「危ない危ない、忘れるところでしたよ銀さん…！！」

「ん？俺に伝言？誰からだよ？」

「銀ちゃんとしーちゃんに伝言アル！！」

「えっと…とある方、からです…」

流石に真選組の連中の前で桂の名前を堂々と出せるはずもなく、そこは新八が濁した。

「…ふうん、そっか…。んで？その伝言って何だ？」

それでどうやら察したらしい銀時は先を促す。新八が口を開きかけた…その時だった。

——コンコン……

ドアのノック音が聞こえた。

「はい？」

近藤が返事をする。医者だろうか？そう思ったが、そっと開かれた扉の先に居たのは……

「紫苑！？」

「へへっ、来ちゃった」

集中治療室に居るはずの紫苑だった。真選組の3人と銀時は立ち上がって驚くが、その様子を見て紫苑は至極楽しそうに笑う。

「ちょっと、みんな驚きすぎよ」

「おま……無理すんな！！さっきぶっ倒れたばっかだろうが！！」

土方がそう言えば、「それだけど」と紫苑は微笑みながら言う。

「いつもの発作だから、明日退院してもいいって。それから、無理しない程度だったら病院内を出歩いてもいいってさ」

「だから、抜け出してきたわけじゃないのよ？」と悪戯っぽく笑いながら彼女は言った。そんな紫苑を見て、呆ける真選組の面々。しかし、銀時だけは違った。

「ククッ…本当にお前、変わらねえのな。そーゆーところ、昔のまんま」

「あら？銀時だって同じよ？死んだ魚のような目をして…ぜーんぜん変わってない。相変わらず甘いものの好きも治ってないの？」

「おいおい、人を病人みたいに言うなって」

「いやいや、あれはもう病人の域ですよ、銀時君？」

「うわーっ、久々だなその憎まれ口！！」

懐かしいな、と笑いながら銀時は紫苑に歩み寄り…そっと、その身体を抱きしめた。それを受け入れ、紫苑もまた銀時の背中に腕を回す。

「……心配した……」

「うん…」

「生きてるのか、死んでるのか…それすら分からねえで…。ずっと…生きた心地がしなかった…」

「私も同じ。銀時が生きているのか、死んでしまったのか……。誰も、何も教えてくれなかったから…ずっと、ずっと心配してた」

「やっとな…」

「うん、そうね…」

2人とも、幸せそうに微笑みながら互いの温もりを確かめ合うように抱擁する。その光景は見ていて、とても微笑ましくもあり…しかし、これからのことを考えると…なんとも切なくなる光景でもあった。

その時ふと、銀時はあることに気付く。

「お前、このかんざし…」

そう、それは紫苑が髪に差しているかんざし。他の誰でもない、銀時が攘夷戦争の始まる前に贈ったかんざしだ。

「覚えていたの？」

「当たり前だろ、俺が贈ったんだから……」

まだ持っていたのか、などと思いつつそのかんざしに触れる。思えば、自分はこのかんざしと共に、言葉を贈った。それは、ずっと自分の隣に居て欲しいと……そう願う言葉だった。

紫苑もまた同じことを思う。自分はこのかんざしと共に、銀時にプロポーズという言葉も貰ったと。それは、銀時の隣にずっと自分がいるというこの上ない幸せの言葉だった。

果たして……その言葉は、まだ有効期限を過ぎていないだろうか……？

「銀時」

「紫苑」

互いに、互いを呼ぶ声が重なった。2人は驚いたように視線を交わしたが……プツと銀時が噴出し、紫苑の頭をポンポンと撫でる。

「そっちから先にどーぞ」

「……ん、じゃあ……お言葉に甘えて……」

どこかで不安もあった。銀時は優しい人だから、その隣には自分以外の誰かがいるのではないかと。もし誰も居なくても……もう、銀時の中に自分という存在は居ないのではないかと。

しかし……言わなければ……聞かなければ、きっと後悔する。

意を決して、紫苑は口を開いた。

「この戦争が終わったらよ…、一緒に暮らそう。だからな、その…俺の嫁さんになって下さいッ！！マジでお願いします！！紫苑以外の奴とか、俺には考えられねェ！！マジでお願い！！断られたら、俺泣いちゃう！！」…だったわけ？」

「……お前……！！」

「フフッ、どんなに時間が経ってもね…この言葉だけは忘れられない。ううん、忘れたくなかった…。私も、銀時以外の人は考えられなかったから。それは…今でも変わらない…。ねえ、銀時？このかんざしと一緒に贈ってくれた…あの時の言葉は…^{プロポーズ}今でもまだ有効かしら…？私は、銀時の隣にいてもいい…？」

消えない不安。

晋助は自分のためにと鬼兵隊副官のポジションを用意していた。しかし結局それも、変わり果てた鬼兵隊と晋助から逃げるように…自らそのポジションを捨てた。

銀時だけは変わってないと信じた。

けれど、もし…銀時の隣というポジションにもう自分の居場所が無かったら…？

どこかで覚悟はしていたが、それを考えると…とても辛い。

僅かに漂う沈黙の時間。しかしそれは…

「…バカヤロー…全然有効に決まってるだろうが…。俺の隣は、いつだって…紫苑の為にだけ存在するんだよ。だから…お前さえ嫌で

なければ…、あの時の気持ちはまだ変わっていないなら…」

俺の隣に、居てくれ…

強く抱きしめて銀時がそう言えば、紫苑は幸せそうに笑う。

「あーあ、あんなに幸せそうに笑って…。やっぱ、紫苑は旦那じゃないと駄目なんですネィ」

「そうだな…。紫苑があんなに幸せそうに笑っている姿を、俺は初めて見るよ…」

「まさか、野郎が紫苑の婚約者だったとは驚きだし、幸先も不安だが…まあ、あの様子じゃ…何を言っても、もう二度と離れることはねえだろ」

そんな2人を見つめながら、真選組の3人は思い思いの言葉を口にしていた。一方、万事屋の子供達かというと…パタパタと、2人の元まで駆け寄る。

「銀さん、いい加減紹介してくださいよ!!」

「そーネー!! 私達にも教えるヨロシ!!」

2人の子供達の言葉に、「あー、そうだな…」と恥ずかしそうに笑いながら、今度はポンポンと子供達の頭を撫でる。

「まさか…銀時の隠し子!？」

「何でそーなる!?! んなわけねえだろ!!」

「あっ!! 私、まだ銀時が言おうとしたこと聞いてない!! 銀時は何を言おうとしたの?」

「んゝ…？まあ、言う必要はねえかなあと…。だから忘れろや」

「ちょ、嘘でしょ！？気になる！！教えてよ、銀時！！」

「はいはい、じゃあお前らに紫苑のことを紹介するからな」

「銀時！っ！！無視するな！っ！！この天パツ！！」

「…お前、ホント相変わらずなのな…。今の言葉、グサツときたわ…グサツと…」

「しょうがないネ、本当のことアル」

「今更じゃないですか」

「そうよねー？」

「おいおい…俺の味方は居ねえのかよ…！！」

紫苑と銀時、そして子供達の会話にその場の空気が和む。ただ紫苑が加わっただけで、さっきまではただ重いだけだった空気が軽くなり、そしてとても明るくなる。

「ホント…俺ア旦那にも紫苑にもかないませんねィ…」

そんな様子を見ていた沖田はそう呟き、微笑んだ。

暫く他愛ない話をしていたが、やがて…神楽は銀時の手を、新八は紫苑の手を握った。

「お、何だ神楽？」

「どうしたの？」

銀時と紫苑の疑問に、子供達は笑いながら言う。

「ある電波野郎からの伝言ネ！！」

「僕達にはさっぱり意味が分からなかったんですが、2人なら…この言葉だけで分かると言っていたんですよ…」

電波、と言われて2人の脳裏を過ぎったのは勿論、桂の姿である。紫苑はクスクスと笑いながら、銀時はめんどくさそうに頭を掻きながら子供達を見つめる。

「そーいやお前ら、俺と紫苑に何か伝える事があるつつつてたな…。その電波野郎からの伝言か？電波みたいな伝言だったら、アップパーカット食らわせるって伝えておけや」

「それで…どんな伝言だったの？」

紫苑の問いに、2人は口を揃えて言う。

「「そろそろ桜が見頃だぞ」」

「「つて…言ってましたよ？」」

「それだけで分かるって電波は言ってたネ。しーちゃんも銀ちゃんも分かるアルか？」

桜…

その言葉を聞き、銀時と紫苑は目を見開く。

そう、それは攘夷戦争の最中で交わしたあの約束…。

——戦争が終って、全員が無事に生きて戻れたらその時はその桜の木の下で、宴会しようよ！！

「分からないアルか？やっぱ電波野郎の飛ばした、ただの電波ネ？アップパーカット確定アルか？」

「そもそも、肝心な部分が抜けてますよね…。これじゃあ、何が言いたいのか…。やっぱりアップパーカットですね…」

神楽は内心で桂に「使えない野郎アル」などと悪態を吐いており、新八は苦笑していた。

だが：銀時と紫苑は互いに視線を交わす。

そして：クシヤリと笑った。

「そうね、桜が：見頃だわ：」

「ああ、そうだなあ…。まったく、電波の癖に覚えてやがったのかよ…」

驚いたのは子供達である。あれだけの言葉で、この2人は桂の言葉を理解したのだ。

「死んだら仲間はずれ、だったっけ？」

「そうよ？みんな生きてる、けど…」

あの時の約束は、果たせそうに無い…。

桂自身は、紫苑が真選組に身を置いていようが居まいが、恐らくは関係なく花見をしようと言いだすに違いない。

宴好きの辰馬も、連絡をすればどんな事をしてでも時間を作って地球にやって来るだろう。

しかし：晋助はどうだろうか？銀時と桂は袂^{たもと}を別^{わか}ち、紫苑は兄妹^{きょうだい}の縁が切れてしまったと思っている。

しかし本当は：銀時も紫苑も、そんな事など望んではいなかったのだ。

だが、自分達が師と慕った人が願っていたことは、全く逆の事をしようとしている晋助がどうしても許せなかった。その目を覚まさせなければならぬと：そう思った。

次に会った時には全力でぶった斬ると：桂と共に銀時がそう宣言したのは、まだ記憶に新しい。

「桜の木の下で月見酒……。言い出しっぺが不在、か……」
「やっぱり、全員では無理よね……」

それでも。

交わした約束はやはり、守りたい……。

「萩の寺子屋の桜：もう満開かしら……？」
「早く行かねえとなあ……」

2人は窓の外を眺めながら、ハラリと舞う桜の花びらを見つめる。

交わした約束……

それを果たす時は、もはや今しかない。

紫苑の命は既に、灯火が消えようとしているのだ。

「……なんだ？ お前達、何か約束でもしてたのか？」

近藤が聞けば、紫苑は微笑みながら頷く。

「ええ、とても大切な約束を…。何があっても、違^{たが}えたくない約束を…」

遠くを見つめる紫苑の瞳には果たして、何が映っているのだろうか？

そんな紫苑を見つめながら…銀時は思う。

（晋助：お前、本当にこのままでいいのかよ…ッ…。紫苑：もう居なくなっちまうんだぞ…！？お前ら…兄妹^{きょうだい}だろうが…！！不器用も大概にしやがれよ、コノヤローッ…！！）

あの時交わした約束を、寸分違^{たが}えることなく叶えたいと。

そこには銀時が居て、紫苑が居て、桂が居て、坂本が居て、そして…晋助が居る。

桜の木の下で月見酒をしながら、バカ騒ぎをして…

（…確かに夢のような話かもしれねえ。今の状況を考えると、そりゃ無理だろうよ。けどな…）

攘夷だとか国を壊すだとか…そのような事全てを忘れて、酒を酌み交わすことは…もう出来ないのだろうか？

紫苑と同じように、銀時も窓の外を見つめる。しかし、紫苑とは違い…その瞳はとても強く、真っ直ぐと先を見据えていた。

（簡単に諦めるほど、物分りのいい人間じゃねえぞ俺ァ…。無理矢理にでも晋助を引き摺って行って…紫苑に会わせてやらァ…!!）

その瞳は、決意の眼差しだと…横でこっそり盗み見た紫苑だけが気付いた。

何を決意したのかまでは分からなかったが…

（…そういう、強い瞳で真っ直ぐと先だけを見据える貴方が…私は好きなの…）

ただ、その優しく紅い瞳が強く輝く姿を、紫苑は静かに見つめていた。

【第十二訓】桜の約束（後書き）

後半！！紫苑が登場してから後半！！紫苑と銀時以外が空気な件について！！本当にごめんよおお！！そして、一応補足ですが：紫苑が銀時達の話していた部屋に来た時に、たまも一緒についてきます！！分かりづらい：ってか、どこにも書いてないから分からないよなあ：；本当にサーセンorz（苦笑）次の話で、銀時の攘夷戦争以前の過去にちよつと触れて：いいいよ！！銀時と晋助の電話のシーン：になると思います！！（曖昧キター！！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664u/>

恋空 ～春、夜空の下で～

2011年10月9日07時57分発行